

「「やしなって」」

風邪薬力

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八幡と杏のものごと

※番組プロデューサー等のオリキャラが出てきます

目次

「やしなつて」	1	雪に頼まれたモノが日常を運べたら	96
「つかれたー」	12	雪に頼まれたモノが日常を運べたら2	2
「いやだ」	29	日常から脱線した先には果てが見える	112
何の為に輝くのか			
「…笑顔が固いぞ」『ハチ君、お願いがあるの』	48	果てのその先には	143
「お久しぶりです、平塚先生」「君は自分のために行動したことなど一度もない」		番外	
		俺の宝物	173
		輝きの向こうへ	181
		小さな空の大きな太陽	192
「やしなうから」	79	日常の1分	209
日常の果て		もしも同級生なら、彼と彼女は。	

214	彼と彼女は踊り出す	—
247	そうして比企谷八幡は	—
268	実家	—
278	御伽噺のような実話	—
288	比企谷八幡は魔法使いになった	—
298	されどパパは上司と踊る	—
307	灰被りは魔法使いを見つけ、魔法使い はシンデレラを見つけた	—

「やしなつて」

働きたくない。

そんなことを思いつつ、俺は働いていた。

やばい、気がつけば社畜一直線。高校を卒業してある人にスカウトされた俺はアイドル業界に足を踏み入れていた。

そう、目が腐ってる系アイドル八幡だ。めぎすは一流のじゃにー…何てのは嘘で。

足を踏み入れたのはプロデューサーの仕事だった。

そこで俺はひとつのユニットをプロデュースしている。

「ねえープロデューサー。杏もう働きたくないから寝て良い？」

「奇遇だな、俺も働きたくないから寝る」

二人でソファへ寝転びながら天井を仰ぐ。

プロデューサー、比企谷八幡とアイドル、双葉杏だった。

「八幡は仕事しなきゃダメでしょ」

「俺は宿題は夏休み最初に終わらせるタイプだ。もう終わってる」

「意外に仕事できるよねー、普段は働きたくないとか言ってるくせに」

「意外とか言うなよ。結構必死に働いてんだから」

本当に必死に働いてる。最初からこいつらを任せて貰えたのが幸運だったんだろうと今にして思うが、それでも専業主夫と言う夢を掲げた男は働きたくないのだ。

しかし働かなければ生きていけない。専業主夫になるためのパートナーを見つけれなかった俺は、目の前に差し出された好機に働くことを受け入れてしまったのだ。

あー。やだな。ずっと日朝アニメ見て小町の飯食べて生きていきたい。

しかし悲しいかな、入社を終え働くためのノウハウを身に叩き込まれる日々。一週間ほどプロデューサーとしての研修を終えた俺は、上司に連れられ受け持つべきアイドルのもとへ案内される。そこにいたのが双葉杏。

そしてこいつは初めにこう言いやがった。

「杏はさ、働きたくないんだよねー。だから印税生活で楽しみたいんだけど…君に出来るの?」

…なるほど。そんな手もあるのか。失敗したなー。

こんなことならやつぱり八幡もアイドル目指すべきだった。

まあ俺じゃ地下アイドル止まりですよー。地下は地下でも墓場系アイドルか?

言つてて悲しいな。

「もう、二人ともお?ちゃんと用意してなきやダメだよー?今からみんなをばひばひす

るんだよお？」

「あー…でもきらりがいれば皆はぴはぴするんじゃないかな？というわけで杏はいらない子ー」

「うむ。まあ俺も働いたらはぴはぴ出来ないしな。自分が幸せにならなきゃ人の幸せなんて望むべくもないだろ？俺は今超はぴはぴしてるし」

「もう！ハチ君も、杏ちゃんも皆の期待裏切ったらめっ！だよ？それに杏ちゃんいらない子とか言ったらきらり寂しい…」

そう言つて諸星はうるうると瞳を濡らした。

「ほらほら杏ちゃん？諸星泣かせたら後悔するぞ？」

「人の事言えないでしょ、八幡。しゃーない、働くかあ」

そんなこんなで今まで寛いでいたのはTV局の控え室。

この後二人のユニットのライブがある。ライブといっても歌番組の曲披露程度の事なんだが。

「ほら、挨拶回りに行くぞ。名だたる先輩共に挨拶しとかにや干される」

「うへえ…めんどくさい。これだから局の仕事は嫌なんだよなー。八幡、代わりにあいさつしてー」

「んなわけにいくか。ほら行くぞ」

「きやは☆やつぱりハチ君はやればできる子だにい？」

「…ああ約束は守んなきゃな」

「今日はこちらの無理な提案を受けていただきありがとうございます」

「ああ…比企谷君だったつけ。まあもちろん僕が君たちを採用してあげた事は覚えておいてほしいけど、その無理な提案を受けると決めたのは僕だからねえ」

「ここは局の一室だった。」

現在杏たちはEランクアイドル。そんなアイドルを起用してもらった番組プロデューサーの元へ挨拶に来ていた。

「ええもちろん、この恩はきつとすぐに返すことになるでしょう」

局にとつてのメリットとは数字である。視聴率という数字が社の、ひいては自分の為になり、ステータスとなる。

俺はその数字をEランクアイドルを起用してくれるだけですぐに返せると自信満々に言い切つたのだつた。我ながら思う。ふざけた話だなと。

「しかし私が言うのもなんですけど、よく起用してくださいましたね」

「本当になんだね、それ。まあなにあの子達が直接返せなくても君の会社なら他の方法で返してくれるだろう？それを考えた上で、だよ」

まあそうだろうなと。そもそも話を持ちかけたときに自分達が高名なアイドルを排出し続けている346プロ所属だと、その意図をもって売り込んだのは自分なのだ。

会社に甘えすぎカッコ悪い？しらん。

使えるものは使い、そして俺の仕事は彼女たちの輝きを解き放つ場所を作ることだ。

「まあ私が話した通りになりますよ。うちのアイドルはあの場所で輝き、その明かりにファンが寄せ付けられるでしょう。その輝きが共演者を食ってしまうことを心配すべきですね」

いかん。すこし言葉が強くなってしまったか。

だつてこの人杏達売れるとか考えてないんだもん。はちまんわるくない。

そもそも働きたくない人間がペコペコしているのだ。イラツとすることもある。

「はは。嘗められてるね。うちはゴールデンタイムに歌番組出来るほどの大手の番組だよ？もちろん演者もハイレベルだ。もし僕がプロデューサーならこんな戦場に新人レベルの子を出そうなんて思わないなあ。それにこんなに眩しい世界では明かりなんて必要ないんだよ？見えないからね」

.....

「そうですね。表現を間違えました。彼女たちは他の誰より高い位置で太陽のように輝き続けるでしょう。この世の誰もがその位置にいるのが当たり前だと思うように」

確かに働くのは嫌いだ。だが。

双葉杏。

俺のアイドルをバカにされるのはもつと嫌いだ。

「ふ、ふふ、はっはっは！それだよ！プロデューサーもアイドルも新人の癖にその確信しか持っていないような君の愚かな考え！その態度をみて君の話を信じてみたんだ。：
楽しんでしておくよ、僕が太陽としてあの子らを見上げる日だね」

「ええ、近い内に」

「ねえ、八幡」

「なんだ？」

今は本番すこし前。最後の確認を終え、後は本番に備えるだけになっていた。

「どうして杏達がこんな大手の番組でいきなり歌うの？おかしいよね？」

そう思ってもおかしくはない。むしろ妥当だろう。

今までも小さなローカル番組程度しか出たことはなく、初めての地上波がゴールデンタイムの歌番組。

そこはアイドルにとつてのホームでもなく、所謂J-POPの歌手なども出演している。もちろん観覧に来ているオーディエンスも杏達のファンなどいないだろう。アイ

ドル好きがいるかどうかも怪しい。そんな中で歌うというのはとても無理な話だ。

「怖じ気づいたか？」

「そういうんじゃないけどさあ…早いんじゃないかなーって」

「プロデューサーの研修で言ってたよ」

「ん？」

「プロデューサーはアイドルを輝かせる仕事だって」

「まあそうだね」

「そうなんだろうな、普通は。でも俺は杏を見て違うと思った」

そこで一息つき、

「杏はもう輝いてた。腐った目でもわかるくらいにな。だから俺は杏を世間から見える位置に送り出すだけで良い。そう思った」

そう言っただけで見た杏の顔は驚きに溢れ、そして盛大に笑った。

「くふふ。確かに八幡はひねくれているから普通にプロデューサーやるなんて無理だよ
ねー」

「…うるせ」

「それにさーそれじゃ杏におんぶにだっこじゃん。こんなろりっこにおんぶさせるなんて鬼畜ー」

「…え？なに、通報されちゃうのん？」

「でもさあ、太陽つて言つてくれたんだよねー？誰よりも高い位置にいるのが当たり前になるつて」

「なつ！あのプロデューサー…！」

ふとそつちを見るとこつちに気づいたのだろうか手を振っている。

ちくしようおぼえてろ。絶対に許さないリストに名前かいとくからな！

「いいね、太陽。気に入っちゃった。だつて空に浮かんでるだけで良いんでしょ？…うん、なろつか、太陽に」

「…ああ行つてこい。夜明けが来たことを見せつけてやれ」

杏は似合わな—い何て言いながら、諸星の横へ並ぶ。

その位置へ行くと俺に目を合わせ、そして指差す。天を。

ちくしよう、こいつはいつも俺の感情に触れてくる。

あのときだつてそうだ。初めてあつた日。

「杏はさ、働きたくないんだよねー。だから印税生活で楽しみたいんだけど…君に出来るの？」

そんな言葉を聞きながら思った。双葉杏がステージに立てばどうなるのかと。

今でさえこんなにも身体が言うことを聞かないほどなのだ。本気になればきつと。

「…出来るな。本気でやれば」

「ええー。本気なんてやだよ。杏は楽しんで生きていきたいのー。養ってもらおうのきぼー」

「…わかった。アイドルの仕事以外は全部俺に任せろ。その代わりアイドルの仕事だけは本気でやってくれ」

「…え？まじで？」

「まじだ」

「飴も買ってくれる？それに仕事だけじゃなくて家から事務所も送り迎えほしいなー。

あとあと…」

「全部面倒見る」

「…え、もしかして杏のこと口説いてる？」

そんなわけない。

「取引だ。お前はトップアイドルになる。そのときは俺を養ってくれ！」

そう、これこそ完璧な作戦だ。

今は投資の時期なのだ。双葉杏は必ず売れる。ならば今のうちから投資をして、後々に養ってもらえば良い！完璧な作戦だ。

「やだよー！」

「…え？今なんて？」

「なんで」

「だつてそれ杏に結婚しろつてことじゃん！しかも養つてつて主夫になるき満々じゃん！」

「な！結婚しなくていいだろ！それまで投資したぶん払つてくれるだけでいいから！」「せめて主夫くらいしなよ！それじゃ離婚夫婦の養育費みたいじゃん！」

「え？ちよいきなりプロポーズとか俺か、かんちがいなんかないから！」

「杏の台詞だつてば！それにさー最初に養つてくれるならそのままでもいいじゃん」「断る」

「しんじらんない…。とにかく杏のこと…」

「いや、俺を…」

「やしなつてー！」

「杏ちゃん？楽しそうだにいい？きらりは、緊張してきたゆ…」

「きらり、考えなくて良いよ。杏たち太陽なんだつてさ」

「うにゆ？たいよー？んーよくわからないにいい」

「そだね。杏たちはわかんないね。でも、杏のプロデューサーがわかつてくれてるんだ」「ハチ君？でも今はきらりのプロデューサーでもあるんだよお？」

「そうだった。でもまあ約束したからねー八幡」

「んゆ？」

『…わかった。アイドルの仕事以外は全部俺に任せろ。その代わりにアイドルの仕事だけは本気でやってくれ』

そう言つて杏に舞台を用意してくれたんだよね。

なら杏も…

「本気で輝いてやるから」

「つかれたー」

今日は休み。

今日は休み。

今日は休み。

「はい。その日程でお願いしたいのですが…はい、有り難うございます。ではこれから
も宜しくお願いします」

今日は休み。

今日は休み。

今日は休み。

「生憎とその日程は埋まつておりまして…。しかし御社様とは良くして頂いております
ので、そうですね…こういうプランはいかがでしょうか？宜しいですか？ありがとうございます
ございます、このご恩は346プロダクションが責任を持ってお返し致します。今後とも
宜しくお願い致します」

今日は休み…だったはず。

現在午前7時。

今日は受け持っているAランクアイドルが全休であるという、月に何度もない珍しい日。

それを聞いて今日は泥のように寝ると決めたのだったが…。

「今日は俺が休み、って関係各所に連絡回らないかなー」

回りませんよね。

そもそも中学の時、生徒が他の生徒に回す連絡網で俺にだけ回ってこず、翌日持って行かないきやいけないものを知らなかったなんてこともあった。

これぞぼっちの成せる技。はぐれ者からもはぐれるほどの逸材。

はちまんないてないよ。

それがどうしたことか。仕事用の携帯からひっきりなしに掛かる電話。

惰眠を貪るべく入っていたベッドから朝早くに電話で起こされ、終わって寝直そうとするとまた掛かってくる。

え？てか携帯ってこんなに鳴るものなの？仕事用に電話掛け放題をガラケーで契約したけど、掛けることしかないと思ってた。

何カ月か前に大成功を納めた歌番組のプロデューサーからはプライベートでも飲み

に誘われるし。あれ、モテ期かな？

違うか。違うな。

そもそも男からモテても嬉しくない。戸塚は別で。

ああー。

アニメ見て癒されたい。小町と会って癒されたい。杏とソファで寝転がりたい。

しかしどれも許されない。時間が足りなーい。

夏休みほしいなー、一年くらい。

でもそうしたら杏と一年会えないなー。

…あれ？今、変なこと考えた…か？

「おはようございます。比企谷君」

「おはようございます、武内さん」

結局事務所に行くはめに。

今日は休み、そう思いたかった…。

そんなこんなで廊下で出会ったのは先輩プロデューサー。

この人は幾つものユニットをプロデュースするという化け物。

俺と同じくらいのアイドルを任せるとか言われたら夜逃げするレベル。

「比企谷君は勤勉ですね。双葉さんが休みなのに会社に出勤ですか？」

「そんなわけないじゃないですか。俺の夢は専業主夫つすよ?」
「それは、その、はあ」

首の後ろに手を置いて難しい顔をする武内さん。

同僚に引かれちやつたよ。専業主夫つて駄目なのか?

男女差別いけない。

「しかしそれならば、養ってくれる女性を探すべきでは?」

「今は夢に向かって努力してるんすよ。努力しなきゃ夢なんて、願うべきじゃないつすからね」

「はあ、努力ですか。…自分磨きとかでしようか?」

「…悲しい話、磨いても目は治んないつすからね。それに基本ぼつちなんで磨く以前に見せる相手がいけませんよ」

かなしいな。まあ、目が直ったところでリア充みたく出来ないから結局むりかな。。

夢抱いた瞬間詰んでました。

…まあいままでは。

「しかし、あなたの目を見て何かを感じたのは私です。保証しますよ、あなたは何かを成し遂げられる人です。外見は関係ありませんよ」

この人に言われるとものごく説得力あるな。

何せこの人も、見た目だけは怖いから今までいろいろと誤解されたんだろな。

初めての頃は二人でスカウトの研修にいつて、二人で警察に連れていかれたし。

二人とも口下手だから事務員さんが来るまで解放されなかった。警察は外見で判断するからなー。まあしようがないか。しようがないって言っちゃったよ。

「武内さんには感謝してます。あのままだと二一ト選んで妹に嫌われてたかもしれないんで」

「いえいえ。それで今日は仕事をしに来たのではないとしたら何か用事ですか？」

「まあ、今度のCM採用が決定した後、別の仕事も決まってしまったのでちよつと調整しなきゃいけないくて。資料はデスクですからね。あつと、すみません先方と調整しながらチェックしなきゃいけないので行きますね。お疲れさまです」

「あ、ああ。お疲れさまです」

うーん。面倒だなー。あつこの社長あんま好きじゃないし。大手じゃなかったら断つてやりたいほどだ。

あの社長ロリコンだな。絶対。杏を見る目が気に入らない。

あの汚らわしい目で見やがつて。あそこの会社の仕事受けるときは杏と一瞬たりとも離れないようにしないと。

うちのアイドル超手が掛かるじゃん。なんでこんなに働いてるんだろ。働かないと生活できないしな。うん、しょうがない。

廊下で別れた比企谷君の後ろ姿を見送ってからも、少しばかり彼の言葉を噛み砕いて考えていたのだが：

結局それは仕事では？

なんだかんだ働きたくないと言いつつ、彼は働く。

普段の言葉がポーズなのか、それとも気づいてないのか。

ポーズは無いですね。

彼はやらなくていい仕事はしませんし、休憩中とはいえ事務所でも全力で寛ぎますし。

双葉さんと一緒に。

最近部屋にある二つのソファは二人の寝床になっていますし。

まあ比企谷君は他のアイドルが来ると部屋から出ていきますけど。

そもそも比企谷君は気づいてるんでしょうか、自分が双葉さんに惹かれていることに。

彼女が仕事の時は、勿論比企谷君が車をだし、仕事に向かっていますが、驚くことに

これは双葉さんが休日の時も車を出して双葉さんを乗せている。

それはたとえば買い物だったり、諸星さんとの約束だったりするらしいのですが、なんでも双葉さんは休日は遠慮したいそうだけれど。嬉しいけどどうしても遠慮したくなるそう。

それはそうだろう。そもそも仕事の時は交通費は経費で落ちますけどプライベートならそうはいきませんし。

それを考えれば送り迎えだけに、足としてだけにプロデューサーを使うのはどうしても気が引けるのは当然でしょう。

しかし、一度双葉さんが比企谷君に遠慮して、連絡しないで出た所、それがあとで知れると、

『…お前が嫌ならそれでも良い。プライベートまでどこに行くとか俺に知られるしな。けど遠慮してるだけならやめろ。俺は約束したからな、全部面倒見るって』

私には言えない言葉…でしょうかね。

この言葉を聞いていた数人のアイドルはなにやら黄色い声を上げていたようですが、社員の立場として考えると少しだけ心配でしょうか。

比企谷君は最初は、もつと斜に構えていたように思いますが、それも双葉さんと組むようになって変わりましたね。

なにか感じるものがあつたのでしょうか？

なにはともあれ彼をスカウトしたのは間違ひではなかつたですね。

「あ、プロデューサーじゃん。こんなところで立ち止まって何してんの？」

「ああ、双葉さんですか。おはようございます、少々考え事をしていました。今日は比企谷君についてきたんですか？」

先程彼を見たし、彼女が動くときはほぼ彼と一緒にだ。

「いや、ちがうけど…。今日はきらりに呼ばれてさー。家まで来て拉致されちゃつたんだよね」

「そ、そうなんですか。あれ、比企谷君に連絡しなくて良いんですか？」

「ん？ああ、家から出るときに一人じゃないなら好きにしたらいいって言つてたよ。要するに、一人で出るときは好きに使えつてことだと思ふよ」

つ、使えますか。

なんとも…：なんとさえいいのでしょうか？捻くれている？

実は一緒に居たい口実なんですか。：彼は難しいですね。

「ていうか八幡事務所にいるんだ。うーん、あとで顔だそうかなー」

「それはいいですね。彼は喜びますよ」

私は素直に思っていることを言つたつもりですが、

「え…八幡が喜ぶ姿ってみたくない…。なんかふあんになるんだけど…」

それはいくらなんでもひどい…まあ双葉さんを見て比企谷君が笑顔になるとすこし不安が…

いえいえ、そんなこと考えては駄目ですね。

「え、ええと、彼ならデスクにいるはずですから会いに行くならそこですね」

「んー。ありがと、プロデューサー。じゃねー」

彼女の後ろ姿を見ていて先程のことを考える。

彼が嬉しい姿を不安といった彼女は、何処か楽しそうで。

ひきつった笑顔をみて不思議と嬉しそうだなど思ってしまった。つい顔が綻んでしまします。

「さて」

私も仕事をしなきゃいけませんね。つい話し込んでいましたが、渋谷さんを待たせていることを思い出しました。いけませんね、怒られます。

「プロデューサー」

「！は、はい。すみません、待たせてしまいましたね」

後ろを振り替えればそこには渋谷さんが。

「あ、あのさプロデューサーって…」

「?はい、なんでしよう」

「ロリコンじゃ…ないよね?」

「な!いえ!あの!違います!」

「だって振り返ったプロデューサーが笑ってたから…。杏見て変なこと考えてたのかなって」

「いえ、その、ちがいます。色々とありまして…」

笑っていたのですか、私は…。

「まあ違うなら良いよ。じゃあ早く行こっか」

「え、ええ。そうですね」

「…本当に違うんだよね?」

「違います…」

変に疑われました…。

今度比企谷君に奢っていただきますからね。

今度決まったのは大手家具メーカーのベッドのCM。

まあ確かに杏には似合いの仕事だろう。あいつが気持ち良さそうに寝ている姿は、こっちの睡眠意欲を目覚めさせるからな。

杏の天使のような寝顔を見ればベッドも売れるというものだ。

ん？天使？…まあいいか。事実だし。別に俺の主観の話じゃないし。

みんながそう思っているからファンがいるわけで。だから俺が特別そう思っている訳じゃない…ハズ。

なんでこんなに必死になってるのん？

さて、仕事終わったし帰りますかね。と、考えたところでプライベート用のスマホが鳴る。

そこに表記されていたのはアイドルの名前で、双葉杏だった。

それを見たとき俺は、間違えて、今出来たばかりの資料を削除した。

……

「八幡、まだ仕事終わってなかったんだ」

「仕事って仕事じゃねえよ。ちよつと必要な資料作ってただけだ」

そうなんだー何て言いながらソファへ寝転がる。

杏からメールで、

『仕事終わったらメールして。こっち終わったらデスクの方に行くから。今事務所にきらりと来てるんだよねー。でも仕事終わってたら帰っても良いよー。帰るときもきらりと帰るからだいじょーぶ』

それが30分前。

俺は間違つて、作った資料を消してしまったので作り直していた。

そんなわけで今日は結構な時間をパソコンの前で過ごしてしまっているわけ。

「つかれたー」

ん？

「なんで杏も疲れてんだよ。今日は休みだろ？」

「朝からきらりに拉致されたんだよ…。事務所で暇な子集まってわいわいしてたんだよね。嫌じゃないけどつかれたー」

ああ、なるほど。まあこいつも素直じゃないからなー。

みんなとわいわいするのも嫌いじゃないけど、疲れたのは本当だし、ちよつと気恥ずかしいってのもあるんだろう。

それでここに寝に来たと。

「せつかくの全体に外に出るなんて信じられんな。代わってくれ」

「いいけどそしたら八幡、きらきらしたすかーとはいてすてーじでおどりなよ？」

笑いながらそういった。

「気持ち悪いよ…なに、人の精神力削つてたのしいの？」

「楽しくないよ…杏もきもちわるくなっちゃった…」

なら言うなよ…なんて思いながら寝ている杏へ目をやる。

いいなあ。俺も寝たいな。さっきまで集中できていたのに今は空いているソファが気になって仕方がない。

「八幡、それって次の仕事？」

「ああ。ベッドで寝るだけの簡単なお仕事だ」

「え、枕えい…」

「違うから」

俺も言い方悪かったけども。そんなことさせるわけないだろ。

「一度TVで枕のオーダーメイドを作る企画で協力してくれた会社だよ。あそこの社長が杏を気に入って、次はベッドのCMに起用したいんだと」

「ああ…あそこの社長かあ…」

杏はあいつの事を思い出しているようで、すこし顔を歪めた。

「…今回はCMの撮影だけだからすぐに終わる。諸星はいないがアイドルだけで現場に行くことはないぞ」

「…それって八幡がついてきてくれるってことでしょ？なんでそう言わないのさ」

「…別に俺が行くとは言っていないだろ」

そんなことを言うと杏は寝ていた体を起こし、

「え？八幡こないの？」

信じられないという目でこちらを見ていた。そんな目で見ないでくれ。

超心が痛い。

「…いやいくけど」

「…馬鹿なこと言わないでよねー八幡。杏、八幡の送り迎えなきや仕事なんてしないから」

いいつつまたソファへ身を任せる杏を見ながら、手が掛かるななんて思っていた。

「てかさー、いい加減諸星じゃなくてきらりって呼んであげなよー。嫌われてる？ってきにしてるよ？」

「自分の専属アイドルでもないのに名前前で呼べるわけないだろ」

「専属みたいなもんじゃん。最近はほとんどユニットで動いてるんだし。杏の親友悲しませたら怒るからね」

「…考えとく」

話をしつつ資料作りを終わらせた俺は空いているソファへとダイブする。

「このソファはとて心地良い。なにしろ良いものを使っている気がするので、寝心地は最高だ。」

「あああ〜」

「おっさんみたい」

「いいだろ、別に…」

そんな言葉をかかわして、暫くは無言のまま時が過ぎる。

こんな時間も嫌いじゃなかった。なにしろ横に人がいて気にしないなんて小町ぐらいいしかなかったし。

心地の良い時間を過ごしているとふいに横から可愛い音がなった。

「昼飯食べてないのか？」

「うん。お菓子しか食べてなかったことを今思い出したよ…」

「じゃあ食べに行くか。なにがいい？」

杏はすこし考えた後、

「久しぶりに小町ちゃんのご飯が食べたいな。いいかな？」

「ああ、良いんじゃないか？小町も喜ぶしな」

小町は杏のことをお姉ちゃんと持ち上げるもんだから、普段なかなかされない扱いに気を良くしている。小町ちゃん、他意はないよね？アイドルは恋愛禁止だよ？

でも確かに実家へ帰るのは久しぶりだな。最近は忙しかったから実家には帰れてないし。

「じゃ、今から出るか。千葉だから早めに出ないと。それまでは飽で我慢しろよ？」

「んー」

俺が差し出す飴に口を開けて応じた杏は、

「車まで連れて行って。今日は疲れちゃった」

両手を広げてそういった。

…まあ全部面倒見るっていったのは俺だしな。これはしようがないよな。

自分の担当アイドルが疲れているのだ。だったら助けるのはプロデューサーの役目だよな。

研修でもアイドルを手助けするべしって言ってたし。

しようがない、よな？うん、しようがない。

「ほら、乗れ」

杏に背を向けて腰を屈めると、背中に人一人を背負ったと思えない重量がのし掛かった。

「じゃ、よろしくー」

「はいはい」

そういうえばこんなことをしたのは妹以来だな、なんて思いながら背中から伝わる体温の心地よさに鍵を掛けて封印している、パンドラの箱が開きそうになるのを必死で抑えながら車へと向かった。

考えるな。俺はプロデューサーなんだから。

そんなことを考えた時点で鍵を掛けた思いに気がついているのを認めたと云っているようなものだった。

ようするにおれは、

どうしようもなく双葉杏に惹かれていた。

「いやだ」

「おじやましませ〜す…」

「おう。入れ入れ」

同時に家に入ったくせに偉そうに言う。

まあ俺の家だし。

東京から大体一時間ほどかかって、着いたのが午後三時頃。その間は杏は寝ていたため今も寝ぼけている。

俺の背中で。

「あ！おねーちゃん、おかえりなさい！」

「うーん…あ、ただいま、小町ちゃん」

「小町ちゃん小町ちゃん、お兄ちゃんが見えてないの？愛しのお兄ちゃんも帰ってきてるよ？」

「自分で愛しのとか言っちゃうのは気持ち悪いよ…。でもお姉ちゃんを連れてきたことは誉めてあげるよ！出来るお兄ちゃんだね！今の小町的にポイント高い！」

小町、そのポイント杏に加算されてないか？八幡ポイントついに廃止されちゃったの

ん？

やだ、妹の兄に対する扱いが暴落中。

そのうち、お兄ちゃんじゃなくてお姉ちゃんがよかつたなーなんていわれるのかしらん。

千葉の兄妹は仲良いけど、姉妹は未知数だぞ、妹よ。

「杏、着いたから降りろ。んで、飯にするか」

「んー、昼御飯って時間じゃないし、もういいよ。寝たら食欲消えちゃった」

まあ確かにアイドルが食のリズムを狂わせると色々と良くないのかもな。ふとったり。

いやでも、杏の場合もうちよつと体重つけた方がいいのか？こいつをおんぶしたとき思ったが、どうにも軽すぎる気がする。

なんでもダイエツトしすぎで、貧血を起こしたりする女性がいるらしい。それが痩せているから起きるといふのかどうかは知らないが、痩せすぎていて良いことはないだろう。

水着で注目を集めるくらいか？…杏は水着でなくても注目を集める存在だから、必要ないな。

「そうか。せめて飴食べとけ」

杏に飴を差し出すと、口を開けて応じる。

それを見た小町が、

「わあー！お兄ちゃんアイドルにあーんしてる！すごいよ、お兄ちゃん！」

その言葉に杏は吹き出し、その空気と共に外に飛び出た飴玉。

ころころと廊下を転がる音だけがBGMになり、場が静寂に包まれた。

あーん…だど!?あのリア充のみに許された奥義…！これがそうだったのか！

「ん？どしたの、二人とも」

「こ、小町ちゃん…。これはそういうんじゃないんだよ…。ただ、八幡があめを差し出すからそのままただでであって…あーんとかいってないし…」

「お姉ちゃん、言葉に出さなくても心が繋がっていけば、それはあーんなのですよ！」

ああもう、何をいつてるのかわからなくなってきた。あーんって何？べ、べつに皆でえろいこえ上げてるわけじゃないんだからねっ！

「ごみいちゃん、きもい。すごいにやけてる」

「酷いこと言うね、小町。俺一応君のお兄ちゃんなんだけど」

「知ってるよ、なに言ってるの」

ああ、知ってて言ってるわけね。

まあでも、そんな会話も楽しい。小町と会うのも久しぶりだし。

そんな事を考えつつ、俺はティッシュを手に取り、ころころと転がっていった飴を包む。

もったいないな。まあ俺もお茶でも含んでたら吹き出してたけど。

「ほら、新しい飴」

しかし差し出した飴は一向に無くならず、杏を見てみると少し顔が赤くなっているようだった。

やめて、期待しちゃうから。

杏は少し迷った後に、結局口を開けて応じた。

「ねえーお兄ちゃん、せっかくこっち帰ってきたんだし三人で買い物行こうよ」

杏と二人でソファで寛いでいると、小町がそんな事を言い出す。

この子は何を言ってるのかな。そんなの答えは決まってるだろう。

「いやだ」

ハモった。まあそうだよな、杏も俺も基本的には外に出ない人間だし、もし外で杏の正体がばれれば面倒だし。

人が多い所にいけばばれる可能性は高い。今の杏はそれほどに有名なのだ。

「ええー、お姉ちゃんも？小町はもつとお姉ちゃんと仲良くなりたいたいのです」

「だいじよぶだよ、小町ちゃん。一緒に寝てればなかよくなれるよ」

「そうだな、争いも起こらないし喧嘩も起きない。人と仲良くなるのにこんな好条件はないぞー」

「寝てるだけで仲良くなれるとは思えないんだけど…。まあいいや。ほいじや小町ちよつと買い物行つてくるねー」

せめてその服は着替えてね。そんな格好で出られちやお兄ちゃん、道行く男共に目潰ししなくちやならない。

「小町、車だそうか？」

親切で言った言葉だったのに、

「もう、ごみいちゃんなんだから…。小町いたらお姉ちゃんといチャイチャできないでしよっ。」

しないから。ファンに殺されちやう。

俺はプロデューサーなんだから、ファンクラブの会員の数覚えてるよ？そんな人たちに狙われたら外国へ高跳びしても殺されちやう。

あれ、おんぶもアウトか？いやあれはしようがないよな。

「まあイチャイチャしなくても折角の二人の休日なんでしょ？たまにはゆつくりしてなよ」

本当にうちの妹は良くできた子だなー。俺に似なくて本当によかったよ。

でも捻くれた小町も可愛いかな？…可愛いな。

小町まじ天使。てか俺別に捻くれてないし。

でもまあ、

「…ありがとな」

小町が出ていった後も二人でソファでゆっくりしていた。

「ねー八幡、小町ちゃんについていかなくてよかったの？」

「ゆっくりしてていいって。小町なりに気を使ってくれたんだろ」

まったく、うちの妹は世界一だな！

世界戦争も小町がやめて？…って涙目＋上目使いでお願いすれば終戦するまである。

…杏でもいけるな。

「ほんとに小町ちゃんって八幡の妹とは思えないよね。目が腐ってないし」

まあ、自分でも時々思うが。

「杏の妹に欲しいね。それでー杏の世話をしてもらうんだー。お姉ちゃんって呼んでくれるし」

そんなにお姉ちゃんって呼ばれるのが嬉しいのか。

だがな、

「小町はやらんぞ。小町は俺の妹だ」

「なんだよーけちー。…あ、でもさ、もしはちま…い、いややっぱいいや」
急にそっぽ向く。なんでうさぎで顔隠してんの？

「途中まで言つてやめるなよ。気になるだろ」

「いや、なんでもないから。ちよつと間違えちゃった、てへ☆」

「……」

杏よ、顔の見えない、てへ☆は可愛くないぞ。

どうせやるなら顔を見せ…いやいやなに考えてんの。

おっと。

「すまん、電話だ」

「んー。いつてらっしやーい」

いつだつて本気で何かを成し遂げることにはなかつた。

私は楽しんで生きていたいし、本気を出すのは疲れる。

本気を出せばそれに驚いた大人たちがもつともつととねだるのだ。

勉強で良い成績を出せば、もつと勉強してもつと高みへと言う。

少し動けるところを見せれば、もつと体力つけて頑張ろうと言う。
止めてほしい。

私は楽しく楽して生きていたい。

べつに高学歴もほしくないし、スポーツ選手にもなりたいわけじゃないんだーい。
そんな日々のなかでスカウトされたアイドルと言う仕事。

聞くところによると売れさえすれば印税で生活できるらしい！

話を聞いてとりあえず合格はしたけど…。私は数カ月経っても売れなかった。

そもそも売れるのってぜんぜんらくじゃなーい！

毎日レッスンスタジオに顔出してレッスンだし、そこまで歩いて行かなくやいけないんだよ!? スタジオについた時点でくたくただよ…。帰りもあるだなんて考えるともう一歩も家を出たくないって思った。

大体プロデューサーはなんでレッスンを見に来ないんだろう。自分の担当アイドルがどこまで動けるかわかんなくや困るんじゃないの? 売れないのをプロデューサーのせいにする訳じゃないけど、それでもその時のプロデューサーは嫌だったなー。

その時は武内プロデューサーに変わってくれないかなーってずっと思ってた。

まあでもあの人は担当しているアイドルの数が凄いらしいから諦めてた。

そんなこんなが積み重なって、私は逃げたくなってた。

でも同期のきらりとは仲良くなっちゃったし…やめづらいよね。
そんな時。

武内プロデューサーから呼び出され事務所の一室に待たされたた。
なんだろ？武内さんになるとかだったら嬉しいな！。

「失礼します」

そんなことを考えているとドアがノックされ、武内さんが入ってきた。
「突然ですが、双葉さんのプロデューサーが変わることになりました…」
へー、本当にプロデューサー変わるんだ。

うん、うれしいかも。あの人じゃ印税生活なんてできそうにないし。
「比企谷くん、入ってきてください」

…え？

もしかしてまた新人プロデューサーなのかなあ。
まあランクの低いアイドルだし仕方ないのかなあ。

「しつれいしましゅ…」

嘩んだ。嘩んだこの人。

てか目が、目が腐ってる。

「え、ええと、この人が引き継ぎのプロデューサーになります」

「ん、んん。比企谷八幡です。よろしくお願ひします」

照れてる。かわいいなあ。

でもなんだろう、この人に何かを感じるような…。

よくわからなかったけど、私はとりあえず先制攻撃することにした。

そして杏の言葉を聞いたこの人は少し笑ったんだ。

それからのアイドル生活は変わった。

今まではレッススに遅れたりして、プロデューサーに怒られてた。自分は見にも来ないくせに。

でも八幡は違った。

どうやら最初に宣言した通り、送り迎えはもちろん、ドリンクの差し入れ、スケジュールの調整、全部を面倒見てくれた。

ドリンクとかご飯は、経費もでないのに。

そしてレッススはこれまでと全然違っていった。

とりあえず今の私の状況が知りたいって言った八幡に、少し全力のパフォーマンスを見せてあげた。

そしたら、

「…今日は体の調整だけでいい。少し流す程度の練習でいい。トレーナーさんには俺か

ら話しく」

あれ？失望されちゃったかな？

うーん、なにがいけないかったんだろ。結構本気でやったのに。

そんな考えは三日後、崩された。

「TV出演が決まった」

え？

「TVって言ったって地上波じゃないけどな。小さな番組でアイドルの紹介コーナーに出る。そこで一曲歌う」

「こんな短期間に？どうやって売り込んだの？」

「武内さんに協力してもらった。欠員の出てる番組を探してノーギャラででるって言うてな」

ええー。ノーギャラかー。

印税生活っていつ出来るんだろう。

印税どころかお金がでないじゃーん。

「…安心しろ。お前にはでるから」

「あ、そうなの？んじゃーべつにいいかなー」

会社も太っ腹だね。なんてその時は思っていたけど、後になって武内さんに確認して

みると、八幡が自腹で出してきてくれたんだよね。

「じゃー今から猛特訓？杏、スポコンはきらいだなー」

まあ初めての仕事だし仕方ないか。

最初くらいはキチツとやらないとね。この人も期待してくれてるんだし。

「いや、そこまでしなくていい。見たところ、その、良かった、から仕事も入れた。レッ

スンに關しちや体を慣らして、鈍らないようにだけしてくれればいい」

んー？褒めてくれる。

あのとときのパフォーマンスを見てそう思ってくれてたんだ。

ふふふ。

その頃にはもう初のTVが決まった事への余裕が出来ていて、

「えーでもさあ、杏働きたくないんだけどなー。印税生活まだー？」

八幡に悪態をついていた。

「その一步だろうが。双葉が頑張れば俺の夢にも近づくな」

あ、あれ諦めてなかったんだ。

ふふふ。

この人おもしろい。

そんなこんなで色々あって、色々あって。

最近おかしい。

なんか、八幡が気になって…ちがうような…んー、そう。

側に居るのが当たり前になってる。

家で寝ても今までは惰眠を貪りたい、つてだけだったのに、最近八幡と惰眠を貪りたいって思ってる。

二人で、仕事したくないーなんて言いながら、ソファで寝てたい。

二人でするとなんでも楽しく思える。ふしぎー。

でも、八幡はプロデューサー。

印税生活出来るようになれば私はアイドルやめるのかな？

そしたら八幡とはもう。

んーでも、頼めば今までみたいにくるま…で…。

してくれるわけないよね。

八幡なら新しいアイドルを任せられて、今度はその子に私と同じように接するんだから。

何がはたらきたくないだよー！杏のためにめっちゃ働いてるじゃん！

はあ…

さつき言いそびれた不意に出そうになった言葉。

もし八幡と結婚したら小町ちゃん、義妹じゃん！
危なかった…。

何がって、その言葉が自然に出そうになったから。

そもそも専業主婦の旦那はいやだし。

やつぱり養ってくれる人がいいよね。

でも、八幡のいまの稼ぎなら…。

いやいやいや。

考えたら駄目だつてば…。

「杏ー」

突然居間の扉が勢いよく開き、八幡が大きな声で杏を呼んだ。

「うえ!? な、なに?」

ああもう、びっくりしたなー。というか八幡大声出すの珍しいね。

「杏、落ちて着いて聞いてくれ」

「うん、えつとどうかした?」

八幡に肩を掴まれる。ちよつとこわいなー。

もしかしてなにか仕事のトラブルかな? ううーん、面倒がなきやいいけど…

「売れたんだ」

「ん？なにが？」

「杏と諸星の曲が！80万枚売れてる！ミリオンも夢じゃないぞ！」

え？私達の曲が？

「おい、早く諸星にも伝えてやれ。これで杏の印税生活も夢じゃなくなったな」

そんな嬉しい報告を、戸惑いながら聞いていた。

なんでかな。夢だったはずなのに。

手が届く位置に夢があるのに。

どうしてこんなにも不安になるんだろう。

「おい、杏、はやく諸星にいつ！」

因みにこれは八幡がきらりの真似をしたわけじゃなくて。

杏が八幡に抱きついたせいだった。

「お、おい、杏、嬉しいのはわかるが…は、離れてくえい！」

語尾がおかしいのはもつと強く抱き締めたせい。

「た、頼むから、どいて…っ！」

八幡が言葉を失ったのは、私が泣きながら顔を上げたせい。

「お、おい、どうした」

八幡は困惑している。

いままでの双葉杏なら、ここで大いに喜ぶはずだったから。

じゃあ今すぐにでもアイドルをやめると言う私の言葉を、嗜める準備でもしていたかもしれない。

でも、でも、私は。

「どうしたら…いいのかなあ…はちまん…」

離れたくなかった。

ただそれだけ。

好き合つて、キスをしてとか、そんな綺麗なものじゃなかった。

ただ八幡と一緒にいたい。

それが終わる日が見えてしまったから。

今は絶対に離したくない。

「な、なにが？」

「はちまんと一緒に仕事したくないって愚痴りたい…」

結局仕事をする八幡はかっこよかった。

「休みの日もはちまんとただの足として使いたい…」

八幡の車に、いつの間にかかわいいクッションが置かれてて、私の私物が増えていっ

た。

「はちまんに見てもらいながら…ステージで輝きたい！」

太陽と言ってくれた。

Eランクアイドルに堂々と太陽と、言ってくれた。休む時間もあるし杏にはちようどいいだろ？つて。

「…はなれたく…ない」

そんな気持ちを吐き出した。

正直自分でもわからない。

恋人みたいなデートがしたいか？

したくない。家でごろごろしたい。

恋人みたいなキスがしたいか？

したくない。八幡のそんな顔笑つちやう。

夫婦みたいな結婚がしたいか？

したくない。八幡と甘い生活なんてファンタジー。

自分で自問自答してみてもこんな答え。

それならこの気持ちはおかしい、はずなのに。

あ。そっか。

楽しく楽しんで生きていたい。それが杏の夢。

その夢に八幡が入ってきただけなんだ。

私にとって、八幡といえることが、一番楽しいから。

「杏」

私を見る八幡の目は真剣だった。

「俺はプロデューサーだ。だから、その、アイドルがアイドルである限り一生プロデューサーし続ける」

「え？」

「前からわかってた。俺が専業主夫になんてなれるわけがない。相手がいないからな」

「…」

「だから働き続けるんじゃないか？定年までは。…そして俺のアイドルは双葉杏だ」

「…うん」

「俺はずっと、双葉杏のプロデューサーだ。だから、離れることはない」

お前が、俺に、愛想尽かすまでは。

ふふふ。それってぶろぼーずみたい。

にあわなーい！

でもさ、やっぱり八幡は八幡だよな。

似合わない言葉。

無理して言ってるんだろ？

顔が真っ赤だし。

うん、きまつた。

八幡、杏はさ、夢、変わったよ。

八幡がいつまでも誇らしげに見上げる太陽であり続けたい。
だから、ずっと、杏を見上げてて。

何の為に輝くのか

「…笑顔が固いぞ」『ハチ君、お願いがあるの』

どうしてこうなった。

俺が知りたい。

「それじゃ、アタシは、はっちゃんって呼ぶね！」

「わーい、はっちゃんだー！みりあも、みりあって呼んでね！」

「ハチ君もてもてだにー☆きらりも、きらりって呼んでね？」

許してください、お願いします。

「今日はお二人に重要な話がありますので、後で事務室に来てください」

「はあ、わかりました」

そんなことを言われたのが30分前。今は杏と移動中だった。

「なんだろうね、重要な話って」

「さあ。でも武内さんが重要って言うんだから重要なんだろ」

今日も今日とて仕事中に電話がかかってきて言われた言葉。そもそも武内さんが俺

に連絡してくること事態が珍しく、それであんな言い方されてしまえば自然に構えてしまう。

さあ、とは言ったがなんとなく身に覚えがあった。ちよつと前にあつた出来事。

あの日から杏はちよつとだけ変わった。

なんとなく目が優しくなつた気がするし、笑顔になるたびドキツとするような顔を見せてくる。

あれ、俺が惚れてるだけ？

いやいや、あの笑顔を見れば画面の向こうしか愛せない男でも惚れるまでである。

たぶん。きつと。

そんな仕草を見られたのではないだろうか。

あの人はアイドルを何人も成功に導いた人だ。そんな人が見れば杏の些細な違いなど一目で気づくかもしれない。

やばい。

アイドルは恋愛禁止だ。勿論俺たちは付き合っているわけではないが、それでもお互いが必要としていて、アイドルとプロデューサー以上の気持ちを持っている。

それがばれたか？

最悪俺はプロデューサーを下ろされるのか。

いやでも待てよ？下ろされたら下ろされたで杏に堂々と養ってもらえるのでは？
やだ、八幡天才。

「もしかしてさ、八幡が杏にイヤらしい目線送ってるからそれがばれたんじゃない？」
「送ってねえ。むしろお前の目線の方が怪しいぞ」

「…八幡なんて見てないし」

「見てる、超見てるから。自分の事だから気づいてないだけだろ」

「八幡だつてずっとみてんじゃん！」

「ばっか、俺はプロデューサーだぞ？見るのは当たり前だろ」

「ですよ？今さら見ないで気持ち悪いかいませんよ？

「ならきりも見るべきじゃん！杏とばっか目が合うのはおかしい！」

「ぐっ！」

いやまあ見てたけど？そりや目の前に天使がいたら見るでしょう。

しょうがないじゃん、他とは比べ物にならないほど輝いてんだから。

「ま、まあ、とにかく呼ばれてんだから行くこうぜ。じゃないと話が進まん」

「自分の事わかってないのはそっちじゃん。あの日からちらちらこっちみてさー」

まじか…。どうりでよく目が合うと思った。

べ、べつにあんずばつかみてないんだからね！
ただ、杏の頭に輪っかないかなーとか探したり、
違うか。違うな。

「あ、それと」

そんな風に声を掛けてきて足を止める。

自然、前を歩いていたので俺の足も止まった。

「プロデューサー止めても専業主夫とかさせないから」
ばれてら。

胃が痛い。

先ほど比企谷君と双葉さんと呼んで、お二人が事務所に着き次第ここに来るように言
いました。

それは二人に辞令、というか報告があるため。

もう決まったことを伝えるためです。

胃が痛い。

なにしろ二人の関係はちよつと特別で、今から伝えなければいけないことは二人の関
係を崩すものだから。

…比企谷君、怒りますかね？

少々怖いです。

双葉さんは怒りはしないでしようが悲しむでしょう。

…仕事してくれませんか？あまり自信がありません。

お二人は最初から一緒に、ずっと一緒にでした。双葉さんのプロデューサーは間違いなく比企谷君です。プロデューサーとアイドルの関係は特別。

お互いがお互いを必要とし、支え、支えられる関係。

支えられるのは誰だって良いわけではありません。それを真に許されるのはアイドルに認められたプロデューサーのみ。

それを一時的にとはいえ、引き裂こうとしている。

こんなこと、例えば渋谷さんにも同様の事を言えと言われても言いたくありません。その時の顔が想像できますので。

ああ、胃が痛い。

やっと事務所に着いた俺たちは、多少の緊張感を持ちながら事務室の前まで来ていた。

「失礼します」

中からどうぞと言う声が聞こえ、扉を開ける。

そこには武内さんが椅子に座っていて、こちらを険しい顔で見ている。

なんでそんな顔してるんですかね。そんなに深刻な話なのか？

やばい、聞きたくなくなってきた。

あれー、真面目にプロデューサー生命終わっちゃう？

「とりあえず座ってください」

「はい」

間にテーブルがある二つのソファを薦められ、そこに座る。

難しい顔をしたままの武内さんも正面へと座った。

そして、

…なかなか話を切り出さない武内さん。

ちらりと横を見ると、いつもは気楽そうな顔をしている杏もすこし緊張しているようだった。

「あ、あの？」

「えっと、すみません、少々話を整理しました」

では、と武内さんが口を開く。

「本日付で双葉さんのプロデューサーは私となります。そして比企谷君は新しいユニッ

トのプロデュースをお願いしたいのです」

「え？」

二人の顔が疑問に包まれていきます。

それはそうでしょう、突然こんなことを言われては。

「比企谷君は双葉さんの、私への仕事の引き継ぎが終わったあとから本格的に動いていただきます。城ヶ崎莉嘉さん、赤城みりあさん、そして諸星きらりさんの新ユニット、凸レーションです」

「ちよ、ちよつと待つてください。いきなりすぎです。俺なんも聞いてませんけど」

「上で決まったことですので。比企谷君は一年足らずで二人のアイドルをAランクまでプロデュースしました。ならばと上が決定したことです」

言ってて辛くなります。比企谷君は隠してはいますが相当動揺しているようで、何か打開策はないかと考えています。

そして双葉さんを見ると。

彼女は口を開けたまま固まっています。その顔を見たとき、私は渋谷さんに話したときに想像できる顔、を思い出しました。きっと彼女もおんなじ顔をするのでしょう。

そこで比企谷君が勢いよく立ち上がり、

「ちよつと待つてください、杏も俺がプロデュースすれば問題ないはずです。それでもプロデュースするアイドルは4人。たかが二人増えるだけなら俺にもできます。現に武内さんはもつと付いてるはずです」

「二人増えるだけではありません。ユニットが一組増えるんです。この違いは大きいですよ？上はまだ比企谷君にはそこまでの力はないと判断しました。それゆえの処置です」

立ち上がったて吐いた言葉は、私が一蹴したことで行き場をなくし、比企谷君はソファへ倒れこみます。

出来ることなら私も比企谷君の意見に賛成です。しかし上は若い比企谷君に対してすこし慎重になっています。だからこそその処置で、少なくとも多少は分かる言い分を前に、私も完全には否定に回れませんでした。

「で、でも、いくら武内さんでもAランクアイドルが一人増えたら、きついんじゃないか？」

すこし言葉が崩れてきましたね。

「比企谷君も理解しているはずです。Aランクをみるよりも、Cランク以下をプロデュースする方が難しいと。調整と売り込みの難しさの違いです」

彼なら解るはず。それを体験してきたことで認められたのだから。

「…わ、かりまし、た」

そこでこの話は終わった。

最後まで、双葉さんが喋ることはなかった。

「杏」

「…なに？」

「その、大丈夫か？」

二人で事務室から出た後、いやその前から杏が喋ることはなかった。その気持ち解るとは言え、俺自身掛ける言葉が見つからなかった。

「…だいたいじよばない」

わかってる、そんなこと。

「約束、」

「え？」

「約束、破ってんじゃん」

ずっと一緒にいる。

そんなことばずかしい言葉を思い出しながらも、胸の内は罪悪感で埋もれていった。

「…」

俺が破った訳じゃない。

俺のせいじゃない。

俺は悪くない。

そんな言葉が浮かんできて、そしてすぐに否定した。

俺のせいなんだ。

何故ならもつと実力があると判断されれば杏も任されていたはずだ。武内さんほどの実力があれば。

「すまん……」

「なーんちやって!」

……はあ?」

「いやー最初は戸惑ったけど、よくよく考えてみたら八幡いなかったら仕事しなくていいんだよね? ちようらつきー!」

「何言ってるんだ、俺より武内さんの管理の方が厳しいに決まってるんだろ」

「うげー。でもさーどうせ八幡が見てないんなら、手を抜いたってわかんないしー」

「全部チェックするに決まってるんだろ」

「やだーストーリーカードー」

……

「もういい、俺は引き継ぎの書類作んなきゃいけないから先いくぞ」
「…うん」

俺は足早に廊下を歩いていく。

だって、

あんな必死に笑顔を作る杏は見たくなかった。

そして現在。

「はっちゃん！アタシのセクシーなダンスみてくれた!？」

「あー、見た見た。超セクシーだった」

ビッチっぽいわ見た目をしている城ヶ崎莉嘉。しかし趣味はシール集めと言うかわい
い子供。

姉を大好きなせい、カリスマギャルを目指しているのだと言う。

難しいな、モデルとすれば姉の後を追うのが正解だろうが、アイドルとした時どうな
のか。

「なんかテキトー！はっちゃん、見てくれなきゃわかんないじゃん！」

「トレーナーさんの方が詳しいぞ。でもセクシー路線はやめとけ」

まだまだ子供なのだ。セクシー路線を求めるファンなら姉の方に流れる。

まあそんな理屈を考えたところで意味はないが。

「はっちゃん！わたしはわたしはー？」

「元気がよくて良いな。後は完成度と、その笑顔を終わりまで持たせる体力だな」

赤城みりあ。純真無垢で、まだ何も色がついていないシーツ。

でもそのシーツは高級品で、敷くよりも包まれたい。そんな思いが頭をよぎる。

あ、ろりこんっぽい。いやでも杏が有りなら俺は…いやいや考えないようにしよう。

ともかく、この子はアイドルとして天性の何かを持つてる。何故なら自然と応援したくなる子だからだ。

自然と応援したくなるような子が、目の前で頑張っていればどうしても目に留まってしまう。

そしてそれがアイドルとして輝いているなら尚更。

「みりあちゃんと扱いちがくなーい？はっちゃんひどーい！」

「…莉嘉はみりあと一緒に心から楽しめ。お前たちの場合、それが一番応援したくなる」
「によわー☆ハチ君、きらりにも教えて？」

なんで俺に聞くのん？

トレーナーさんがあるのに俺にばっか聞いてちゃ可哀想でしょうが。

「私は技術的なことは教えられますが、アイドルとしてなら専門外ですからね。そっち

方面なら貴方の方が詳しいでしょう?」

「…きらりは流石に経験があるから安定してる。後は二人を自由にさせてそれをまとめてやれ」

「うーれしい! きらりはおねーさんだから、がんばるにい☆」

まあこの三人に関して言えば俺が下手に口を出すより、自由にさせた方がいいだろう。

後はこいつらが立つべき場所を考えるだけだ。

どうすべきか。

今回は杏たちの時みたいにTVでいくというのはなしだな。

恐らく肌に合わないだろう。彼女たちを一番生かせるのはもつと自然な場所。

彼女らが自然に笑える場所。

……ま、おいおい考えるか。

「すまん、ちよつと出てくる。今日はスケジュール通りにレッスンしてくれ」

「はっちゃん、ばーいばーい!」

「はっちゃん! 次はもつとせくしーなダンス見せてあ・げ・る☆」

「おつっおつっ!」

私の前にはデスクトップに写った資料が沢山。
思わず手を頭の後ろへ。

ここに書かれている資料にはアイドルへの仕事の詳細。

それは全て私が担当しているアイドル。しかしそれではなぜ困っているかと言えば、それが全て比企谷君がとってきた仕事ということ。

しかも自分の担当ではないアイドルのスケジュールを把握し、無理の無いように組んである。

そして私が、はっとするような仕事を取ってきている。例えば渋谷さんには動物番組の仕事。

これはゴールデンの番組なのでブックイングするのは難しい。いきなり頼み込んでもまず受けてもらえないでしょう。それこそプロデューサー等、番組側のコネがないと厳しい。

それがたとえば渋谷さんほどのアイドルでも。

それを取ってくるというのは相当に凄いこと。

しかもアイドルと動物と言う最強のコラボ。さらに渋谷さんは犬を飼っていて、好きな部類に入るとしようし。

ここまで考えられた仕事の資料が数件。

これに関して凄いの一言に尽きますが、これはきつと彼の叫びでしょうね。

上はこの叫びをどう捉えるのか。私としてはすぐにでも答えてやりたいところですが、それをするほどこの状況に楽観視していません。

内容を考えるに私よりも仕事量が多いのでは？

全てを電話で出来る事ではないですし、それならば自然、自分の足で稼いでいることになる。

それをスケジュール調整しながら、アイドルの適正を考えながら。

これは、私のせいですかね…。

一度、彼と話をしなければ。

もうひとつ、気になることがありますし。

「…笑顔が固いぞ」

録画したTVを見ながらそんなことを呟く。

そこには背の高いアイドルと、対照的に低いアイドルが歌っていた。

あの日からプライベートの送り迎えすらしてない。一緒に動くわけではないので、時間が合うことはなかった。

それがどうにも寂しくなっていた。

俺はこんなにも弱かったんだな。そして杏。

そんな顔をしてるってことは自惚れてもいいんだよな？

それなら頑張らなくちやな。俺に出来る事はやる。約束だからな。

そんなことを考えているとプライベート用のスマホが鳴る。

一瞬期待してしまっただが、相手は期待とは違っていて、こんなんじゃないだめだなど思い

ながらそれにでた。

『どうした、きらり』

『ハチ君、お願いがあるの』

「お久しぶりです、平塚先生」「君は自分のために行動したことなど一度もない」

自分を形成するものがある。俺の場合ボツチであると言うこと。

自分が一人であるならば、誰の迷惑にもならないし、誰に迷惑をかけられることはない。

他人なんて俺に害しか与えないし、他人は俺を害としか見ない。それがはつきりしたのは中学の時。

あの出来事のお陰で俺は本物のボツチになることができた。

その考えは今でも変わらない。大勢とはぐれている俺だからこそ出来る事、出来ないこと。

最終的に俺が泥を被れば、事は全て丸く収まる。

内側にいない人間など結局はどうでも良いのだから。

でもそんな生き方は終わりを迎えた。

なぜなら俺は一人ではなくなつたからだ。人は自分が大切だと思う人が傷つければ、自

分も傷つくという。

俺が知ってるやり方は自分を傷つける。それでは俺の内側の人間は傷ついてしまうのか。

内側の人間、それは武内さんであり、きらりであり、凸レーションの二人であり、杏である。

だからこそ、もうすでに傷ついている人に対してはどうすれば良いのか。

答え、四の五の言ってられるか。

比企谷君が捕まりません。

あれから私に流された仕事をし、アイドルの付き添い、それから本来の仕事をしていれば、私にも自由な時間は少ない。

その中でなんとかコンタクトをとろうとしますが、電話しても話し中、でられない、メールを送っても重要な話でないなら今度聞きます、という返信。

恐らく私が話したい内容も理解しているのでしょう。

そして今日、彼から送られてきた資料。凸レーションのデビュー企画。

これを皮切りに、彼は本格的に動き出す。

『努力しなきゃ、夢なんて願うべきじゃないっすからね』

それが出来る人なんです。それが出来なくて言い訳をしながら逃げていく人を何人も見ました。

夢は叶わないもんだからと。

そんな気持ちで目指している人間が、本気の人間に勝てないのは当たり前です。言い訳が出る時点で負けているのだから。

貴方の夢はなんですか？ 専業主夫？

彼はきつとそう言うでしょう。でも、いい加減気付いても良いはずですよ。

貴方はプロデューサーなんですよ。どう足掻いても、もうプロデューサーなんです。プロデューサーの夢なんて一つでしょう。

きつと解っているはず。

企画は決まった。後は当日に成功させるだけ。

しかし心配する必要はない。あいつらは完璧に決めてくれるはず。そう信じる。そして目下、するべきことが一つ。

「やあ、久しぶりだな、比企谷」

「お久しぶりです、平塚先生」

「君にご飯を誘われるとは思わなかったよ。一年ぶりかな」

「そうすね。俺も平塚先生を誘うとは思ってもなかったす」
なんか引つ掛かる言い方だな。

そんなことを言いながら、先生はジョッキを飲み干す。

「それで、いきなりなんすけど、相談してもいいですか？」

そんな言葉を前に、先生は笑顔で答えた。

「卒業したとしても私は君の先生だ。相談を聞くのは当たり前だろう？」

「ほう、君はプロデューサーなんてしてたのか。まあ話は大体解った」

大体の事を包み隠さず俺は話した。

この人は高校時代、俺の事を気にかけてくれていた。卒業式には少し泣いてくれていた。

だからこそ話をしてみようと思った。少しで良い、何か、何か打開出来るものが欲しかった。

「それで、俺はどうすればいいんすかね？出来ることはやってるつもりです。でもそれだけじゃあいつに届かない気がするんです」

俺はここ最近無茶をして功績をあげていった。

まずするべきは、自分の担当アイドル以外の仕事を調整すること。

これは本来なら、勝手に仕事取ってくんなど他のプロデューサーに怒られるが、武内

さんなら俺が甘えても受け止めてくれると思っていた。

これが出来れば俺は複数のアイドルを任せられるとして、また杏のプロデューサーになれると思っただからだ。そして今の担当アイドルを完璧にプロデュースすること。

これが出来なければただただ本来の仕事をサボって関係のないことをやる馬鹿になるから。

それでも、そこまでしても、不安は消えなかった。いや、強くなった。

なぜなら、杏は笑顔を曇らせたからだ。

そこから先はもうわからなかった。わからないなら頼るしかない。

「…君を一度、部活に誘おうとしたことがある」

「え？」

「一度じゃないな。何度か考えたよ。でも私は誘わなかった」

「部活って、運動部で性根を鍛えるとか？」

聞くと先生は少し笑った。

「君が運動ごときで性根を変えるタマかね。ある女生徒が一人でやっていた部活だよ」

ひとりで？

「それって部活なんすか？」

「どうだろうね。それを私の口から話すのは間違いだよ」

そうして、先生は煙草に火を着け、

「私は今でも考える。あの時君を誘ってれば、君達の人生は大きく変わっていたんじゃないかと」

そう言つて煙を吐き出す。その話がなにか関係あるのだろうか。

「言いたいことがわからんようだな。私は君達の人生を大きく変えることが出来ただろう、という話だよ」

「…それが？」

「わからんかね？君も一緒なんだよ比企谷。君は彼女の、彼女達アイドルの人生を大きく変えることが出来る人間なんだよ。双葉さんに関してはまだ変えてしまっているだろう？」

俺は思わず息を飲む。

ずつとボツチだった俺が、他人の人生に大きく関わっていることを今、少しだけ理解したからだ。

「そこで問題だ。先生とは、何を教えるべきかね？」

「…勉強じゃないんすか？」

「そんなものは勝手にやりたまえ。勉強を教えられるのは誰でも良い。それしか出来ない先生ならいてもいなくても変わらんよ。…私は、生徒達自分自身の事を教えるべきだ

「思っているよ」

「自分自身？」

「そうだ。子供達は自分自身を理解できないものさ。解っているつもりでも間違っていることが多いのだよ」

「そうなのだろうか。そうだとしても、自分自身に理解できないことを、他人が理解できるのだろうか。」

「もちろん完全には無理だがね。それでも間違いには気づいてやれるものだよ。例えば比企谷は間違っていた。君はよく泥を被って全てを自分一人で受け止めていた」

「あれはそういうんじゃないですよ。ただ俺が俺のために……」

「それだよ」

「どれ？」

「君は自分のために行動したことなど一度もない」

「え？」

「いやいや、そんなことないでしょ。全部俺がやるべきだったから……」

「違う。比企谷、君は優しいんだよ。自分が嫌なことは相手にさせない。だからこそ、その矛先を自分に向けさせているんだよ。君の行動は全て優しさからだ」

「そ、んなことは、ないはず、だが。」

「君の間違いは、自分の優しさに気づかないこと、だよ」
そんなことまで見ていてくれたのだろうか。

そんな風に言われたところで自分では全然理解できないが、でもこの人はそんな嘘をつくような人でもない。

「さて、そこで質問だ。私は先生だがプロデューサーではない。ではプロデューサーとは何をするべきなんだ？」

プロデューサーがするべき事？

研修ではアイドルを輝かせることだと言っていた。

でも杏にはそれは合わなくて、ただただみんなから見える位置に送り出せばよかった。

「君はすでにアイドルをプロデュースしている。双葉さんの顔は私でもよく見るよ。じゃあそんな結果を残した君は、比企谷プロデューサーは彼女達アイドルに対して、何をするべきなんだ」

何をするべきか。考えてもわからない。アイドルを成功させる、それじゃ違う気がする。

そんなプロデューサーならいてもいなくても変わらんとかいわれそうだ。

じゃあ逆に考えたら？

俺は杏に何をしたのだろう。

考え込む。その間も平塚先生は俺をじっと見ていた。

双葉杏は俺の初めてのアイドルだ。

途中でできらりも受け持つようになったがそれでも最初からいたのは杏。

俺が杏にしてやれたこと……あ。

そうか。そうなんだ。俺が彼女達にするべき事。

「プロデューサーは、アイドルと共に歩くべきです」

自信満々に言い切った。

「ほう？」

「シンデレラを城に運ぶ馬車になるわけではなく、シンデレラと共に歩き、共に壁を見上げ、乗り越え、そして最後まで見続ける。それがプロデューサーです」

これが俺の答え。

「ここまで恥ずかしいことを言いのけたんだ、合格点貰えなきや恥ずか死ぬ。

「くつく。いやあ、教え子の恥ずかしい言葉は私まで恥ずかしくなってくるな」

「ちよつ、ちよつと先生、ここまで言ったんですから点数くださいよ！」

「知らんよ。私はプロデューサーじゃないと言ったじゃないか」

ぐっ！くそっ！人がここまで恥ずかしいこと言ったのに！

「だが、今の言葉が君のプロデューサーとしての答えなんだろう？ それなら採点はアイドルにしても良かったまえ。そうだろう？」

本当にこの人は。

俺は立ち上がり、頭を下げた。

本当に、足を向けて寝られないな。

…なんで結婚できないんだろ。

疲れた。

自宅のベッドに体を預けて目を閉じる。

そうして過去に思いを馳せると、私はどんなに幸せだっただろうと思う。

八幡が隣にいて、一緒に寝る。

八幡が隣にいて、一緒に歩く。

ただそれだけの事がとても幸せだった。

でも今、八幡のとなりにいるのは…。

「わたし、さいあくだあ…」

凸レーション三人に嫉妬した。その人の隣を歩く幸せは私のものだ。

嫌な子になつてる。

頭の中はぐちゃぐちゃで、それでも八幡に心配かけたくなかったから一生懸命笑った。

でもきつとばれてるんだろなあ。

だってわたしのプロデューサーだから。

もう本当にぐちゃぐちゃだ。

私にとつてきらりと八幡はおんなじくらい大事。

きらりも大好きで、八幡も大好き。恋心？とは違うと思うけど。

それなのに私はきらりに嫉妬した。

もう、本当に、いやなこたあ…。

私が悩みのループに陥っていると、目の端にチカチカと光が見えた。

それはメールを知らせるもので、相手はきらり。

『今家の近くに来てるから入っていいかにい？』

「こんな時間にどうしたの？」

「ちよーつとお話したいなーって」

現在午後7時。

確かにきらりはよくうちに来るけど、こんな時間に来るのは初めてだった。

「今度ね、凸レーションのデビュー企画があるんだよ！パチパチ☆」

「へー、そなんだ。ついにあの二人もデビューできるんだね」

流石八幡だね。今回はきらりがいるからユニットとして力がない訳じゃないけど、それでも2ヶ月以内つてのは速いと思う。

「うん！楽しみだに☆」

きらりは本当に楽しそう。親友の嬉しそうな顔はこつちまで嬉しいな。

「でもね、杏ちゃんが楽しそうじゃないから、私はシユンとしちゃう…」

私は息を飲んだ。

きらりには気付かれてた。

もしかして嫉妬してたことにも…。

「ぜ、ぜんぜんそんなことないと思うけど。杏、いつもだるーくしてるしー」

「わかるよ、杏ちゃん。ハチ君の事だよね？」

ばれてる。

そんなにわかりやすいのか、それともきらりがすごいのかな。

「悩んでるのはわかるんだよ？でもね、どうしてなのかがわからないんだー…」

そこまですばれてたら本当に怖いよ。

「だからね、杏ちゃんの口から聞きたくて、ハチ君にスケジュール合わせてもらっちゃった☆それでも遅くなっちゃったけど…」

きらりはここまでしてくれる。

それなら話すべきだよ。だって親友だと思ってるから。

ここで怖がつちや、前に進めないもんね。

「ごめんね…。聞いてほしい。嫌われちゃうかもしれないけど、それでも」

「嫉妬かあ。あ！でもきらりも嫉妬したよ？」

「え？」

まさかきらりも八幡にわたしと同じ想いを!?

でも確かにそうでもおかしくないのかあ。

私の次に八幡の近くにいたんだし…。

「きらりね、杏ちゃんやハチ君と一緒にいるようになってね、杏ちゃんをはぐはぐ出来る時間減ったな〜って思ってた…」

「え？そつち？」

「によわー！きらりにとつては大事なことなんだよ？」

「で、でもさ、杏のはちよつと違って、なんていうかもつと暗いつていうか…」

きらりのは本質が違う気がする。

私のは友達に向けるべきじゃない気持ちというか…。

「うゆ？う〜ん、難しく考えすぎない気がするよ？」

「い、いや、だけど…」

そもそも私にとつてきらりは特別。

だつてきらりがいなかったらもうアイドルやつてないと思うし、そうなつてたらこんな世界も知ることはなかったし。

輝く世界。大好きな人と、一緒にステージにたつて輝く。輝かせてくれる人がいる。

八幡がいる。

「うーん…あ！それならこうすればいいよ！」

「え？」

「ハチ君がプロデューサーできらり達はアイドル、ずーっと、ずーっとお仕事続けていけばいつまでも一緒にい☆三人一緒にいれば嫉妬しなくて良いかも？」

あ。

「今は離ればなれだけど、ハチ君はきつと帰ってくるから心配ナツシン！」

重なつた。

「だからね、きらりの大切な杏ちゃんには笑つてほしくないな〜」

『俺はずつと、双葉杏のプロデューサーだ。だから、離れることはない』

「くふっ！あは！はははは！」

「によわー☆杏ちゃんが笑つてる！なんだかわかんないけどはびはびするにいー！」

なに悩んでるんだろう。

杏ってばおつちよこちよいだなー。

嫉妬なんかする必要ないんだよね。

だって親友はいつも隣にいる。

大好き。きらり。

八幡は約束した。

最初から八幡が約束を破ることはなかったのに。

心配する必要ないんだよね？

大好き。八幡。

ふたりともだいすき。

だから、言葉にして伝えよう。

「きらり、大好きだよ」

「きらりもだー！杏ちゃんだいすきー！」

待ってるからね、はやく迎えに来てね。

「やしなうから」

例えばそれは童話。

その世界では主人公とヒロインだけは、確実に幸せなハッピーエンドを迎える。

その影には多数の悲しみや犠牲があったりするのだが、それは触れられぬままに。ではなぜ触れられないのか。見えないからだ。

表からは見えない。なら触れることはできない。

その触れられない影には悲しみだけじゃなく、色々なものがあるだろう。

ともかく、見える場所が幸せなら、見ている人は幸せになれるのだ。

プロデューサーは世間に見えることは無い。

だからアイドルのために自分を殺して良いのか。違う。

なぜならアイドルにはプロデューサーが見えているからだ。見えるものが悲しいも

のならば、悲しくなってしまう。

自分を殺して、ただ仕事として接してくるプロデューサーを、アイドルは認めない。

共に生きるからこそ、アイドルは一度きりのステージを輝くことが出来る。

一緒に生きてくれる人は、ただそれだけでも力になるから。だから俺は生きようと思う。アイドルと一緒に。

「い、今から、恥ずかしい話をしゆる…」

なんでこんなこと宣言してるのん。囁んじやつたし。

ほらみて、三人とも、は？みたいな顔してるよ。あまりの突然さに皆絶句じゃん。

今は凸レーションのデビューイベント前。正確に言えば、38分前。

そんなタイミングで意味のわからない宣言。そりゃ絶句する。

やばい、恥ずかしい話する前にもう恥ずかしい。

あー、槍とか降ってこないかなー。恥ずか死ぬ。

「ん、んん！あー、その…」

「はっちゃん…最近働きすぎて疲れちゃった？アタシがかんびようしてあげよつか？」

「えー！だいじようぶ？私もかんびようするよ？」

良い子達だなー。その優しさが身に染みる。

「二人とも、ハチ君の話を聞いてあげよ？きらりは最後まで聞くよ？」

きらりは俺を見る。とても優しい顔で。

嬉しいけど恥ずかしい。今すぐ布団に潜って叫びたい。

でもきらりのそんなお姉さんオーラを前に二人も聞く体制になった。

話さなくちやいけない。

俺が、プロデューサーであるために。

「…俺は、お前達のプロデューサーだ。だからお前達の隣を歩く」

俺は宣言するんだ。

「道の先を決めるのはお前達だ。それがどんなゴールであれ、アイドルとして目指す場所なら俺が連れて行ってやる」

アイドルのプロデューサーに、本当の意味でなるために。

「どんな道でも付いていく。連れていく。だから一緒に歩いてほしい。そして…」

俺の気持ちはもう決まった。

この思いは、本物だ。

「そして、見せて欲しい。お前達が最高の笑顔で、最高のステージで、最高のアイドルとして輝く姿を」

いつている間三人の顔を見ていた。

それは話し終わったあとも変わることなく、三人は驚いたような、びっくりしたような顔をしたまま固まっていた。

あれ？引かれちゃった？

やばいやばい。ここで引かれちゃったらもう八幡、生きていけない。

そんな顔を見ているうちに、俺は怖くなって顔を伏せてしまった。

やっぱり全部勘違いだったか？結局昔のように、本物っていう理想を求めすぎて離れていくのか？

そんな思いは、俺の手を震えさせていた。

そして、そんな手を包む暖かさ。

「ハチ君」

きりりだった。両手で俺の震える手を握って、目を合わせる。

「ううん、違うね。：プロデューサー」

言われた瞬間背筋がぞくぞくとした。

今までずっと言われたことのなかった名前。

俺のもうひとつの名前。

「一緒に歩こう？きりりはねー、みんなときらきら衣装を着てー、きらきらしたステージにたてると、はぴはぴするにー☆」

きりりは飛びっきりの笑顔を見せてくれる。

最高の笑顔だ。見れば、ただそれだけで楽しくなる、嬉しくなる笑顔。

「一緒。みんなでこうやって手を繋いで、きらりは幸せー！」

「いいよ、プロデューサー！アタシきつとお姉ちゃんみたいに…ううん、お姉ちゃん以上のセクシーアイドルになるから！見せてあげる、アタシのちようせくしいなステージ！」

こうやって笑ってくれる。セクシーとは程遠いが、莉嘉の笑顔はそれ以上の価値がある。

「私もだよ！妹がね、お姉ちゃんきれー！っていつてくれるようにがんばるからね！だから、手伝ってね、プロデューサー！」

ああ、手伝うぞ。でも、もうすでにお姉ちゃんオーラ全開だぞ、みりあ。

「あ、ああ。でもあんまり頼りすぎるなよ？俺は基本働きたくないんだ」

そんな俺の強がりには、

「はっちゃん、泣いてる？だいじょうぶ？」

すぐにばれた。

「ば、ないてねえ。ちよつと目にゴミが…」

「しようがないにー☆きらりがいいこいいこしてあげゆー！」

「あはは！はっちゃんダサーい！」

うるせえ。

仕方ないだろ。

初めて本物を見つけたんだから。

「久しぶりな気がしますね、比企谷君」

「すみません、色々と御迷惑をおかけしました」

やっと比企谷くんを捕まえた、というより自らやって来てくれました。

少し話がしたいですと言った彼を、とりあえず飲食店に誘い、顔を合わせる。

「いえ、迷惑なんて事は。ただもう少し『ほうれんそう』を、大切にして欲しかったです」

「いや、ほんとすいません…」

しかし久しぶりに会った比企谷君は一皮むけたよう。

相変わらず目は腐ってますが、その奥になにかを感じる。

「別に怒りたい訳ではないのですが、色々と話は聞きたいですね」

少し前は話を、したかった、のですが、それは顔を見る限り必要なさそう。

「えっと、まあ気持ちの整理はつきました。それとすべきことも決まりました」

「するべきこと？それは凸レーションが成功した今、もう終わったのでは？」

比企谷君の目的は、自分の担当を完璧にプロデュースした上で他にも手を出し、それを上に認めさせ、双葉さんのプロデューサーに戻ること。

ならば後は結果待ちのはず。

「それだけじゃ認めてもらえないかもしれないじゃないですか。それに複数出来るってなっても、杏のプロデューサーじゃなくて他のアイドルを任せられるかもしれないし」
確かに、それはそうだろう。

比企谷くんがその可能性を考えないわけがなかった。

「だから確実に杏のプロデューサーに戻れるように、直接交渉します」

「…上がまともに取り合ってくれるとは思えません」

「これでも舌論は得意なんすよ。なんとかかしてみせます」

…彼なら出来るのでしょうか。

いや、するのでしょうか。しかし、やっぱり比企谷君にとつての双葉さんは…。

それを見て見ぬふりするのか、それとも先輩として、社員としてそれを咎めるべきなのか。

じゃあ私個人としては？

どうすれば良いのかはわかりませんが、私は今そうしたいようにすることにします。

「…比企谷君の夢は専業主夫だと言っていましたね。それでもう一度聞きたいんです。貴方の夢はなんですか？」

「俺の夢は、」

答えてください。プロデューサーとしてアイドルを導いた貴方は何処にたどり着いたのか。

「俺の夢は、担当したアイドルが、最高の笑顔で、最高のステージで、最高に楽しく、輝き続けることですな」

きつと全てのプロデューサーはそこへたどり着く。

何故なら私たちは、彼女達の自然な笑顔も、楽しんでいる姿も、輝きにも、一番最初に触れるのだから。

ふとした拍子に聞いた話。

彼女達はとても楽しそうに話をしていた。

「それでね、はっちゃんがどんなゴールにもつれていってくれるって言ったんだー！」

「そうそう、アタシ達と一緒に歩くなって！ちよーかつこよかつたよ！」

そして周りのアイドルも騒ぐ。

八幡はたぶん、この話を広められたって知ると、頭を抱えるんだろうなあ。

でもそんなことよりも。

私はちよつと落ち込んでいた。

だって、それだけは私の特別だと思ってたのに。

確かにかっこいいよ？うん、さすが八幡。

決めるとこは決めるんだよね。

でもさ、どんどん私の特別が無くなっちゃう。

今はきらりのお陰で、もう深く落ち込むことはないけどさあー。

それでもくやしきもんはくやしき。

今度八幡に会ったら脛蹴ってやる。

私の特別、なんだろう。

飽かれること、車に私物があること？実家に行ったことあること？

こーやって並べるとなんかものたんない。

あーあ。

…八幡に会いたいな。

「双葉さん、いますか？」

扉を開けて入ってきたのは武内プロデューサーだった。

「杏ちゃん？そのソファで寝てるよ」

誰かが答え、そして向かいのソファへ座ったプロデューサー。

「お話があります。大事な話です」

なんだろう。周りのアイドルも空気を読んで静かになる。

このままで聞くのも悪いなと思って私は体を起こす。

「どしたの、プロデューサー」

真剣な顔。やだなあ、なんか前の事を思い出す。

八幡が離れていった日。

「担当プロデューサーが変わります」

「え？」

まさか、それって。

「引き継ぐのは、比企谷君です。良かったですね」

あはは。

ほらね、やっぱり。

ちゃんと帰ってきてくれた。

約束したもんね。信じてたよ。

ほんとだよ？

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「え？」

言われて気付く。私は泣いてた。

あちやー。はずかしいなー。

すると回りに居た子達が一斉に飛びかかってきた。

もうもみくちやだ。プロデューサーも困ってる。

でもどうしてだろ。

ものすごく嬉しい。

みんなありがとね。

「……こんな時間に連れ出してどしたの?」

私は八幡に車で夜景の見える場所まで連れ出されていた。

なんでも話したいことがあるらしい。

それにしてもすっごく久しぶりに会う気がする。

実際に久しぶりだしね。

「その、なんだ、実はな……」

ふっふっふ。

八幡はそわそわしながらどう話そうかと考えているみたいだけど、私にはお見通しだよ?」

「杏のプロデュース、してくれるんでしょ?」

「なっ、お前しってたのか……」

「八幡がサプライズなんて10年早いよ。杏を出し抜こうたってそうはいかないから」

実際は武内プロデューサーのお陰だけど。

「それに八幡にこの夜景は似合わないよ。キザすぎー」

まるでイタリア人。八幡とは対極だね。

「まあ、な。でもそれだけじゃないんだよ」

「ん？」

「俺はやつとプロデューサーになれたよ。あの三人のお陰で」

「うん、聞いたよ。でもさーそれって杏の時はなんだったのさー」

ちよつとした意地悪。杏を放っておいた罰だよ。

私がどれだけ悩んだと思ってるの？

八幡のせいであれだけ苦しんで悩んだんだから少し位は意地悪してもいいよね。

「…俺は杏に惚れてた」

…ん？え？

「ええー！なにいつてんの!？」

「そんなときは気づいてなかったけどな。多分一目で惚れたんだろ」

ひ、ひとめぼれ!？」

そんなこと鼻で笑いそうな八幡が!?

「だから、杏をプロデュースできたのはただ、好きな子のために頑張っただけなんだろう」
八幡が恥ずかしい事言ってる…。

ていうか私も恥ずかしい…。

「な、なに、さつきからどしたの、八幡」

「プロデューサーはアイドルと一緒に歩く。それが俺の答え。最近やつとこたえられたんだが…」

言いながら八幡は頭をかく。

今の八幡の言葉に口を挟むのは違う気がして、私は黙った。

「それなら杏の時はなんで、成功できたのか考えたんだ。それで気づいた気がする。多分俺はただお前が好きで、好きな子のために一生懸命だっただけじゃないかって」

顔が赤くなる。

今までもそれっぽい話しはしたことあったが、それでもこんなに直接的な表現を使うことはなかったのに。

「だからずっとプロデュースするとか、離れることはないとか言ったが、たぶんあれ違う」

え? どうして。

そこまで否定しなくて良いじゃん。それは私の特別なんだよ？

「違うんだよ。アイドルとプロデューサーじゃない、双葉杏と比企谷八幡。俺はアイドルじゃなくても良い、ただ双葉杏と一緒に歩きたい」

私は今どんな顔をしているのかな。

赤くなってる？困ってる？笑ってる？それとも全部？

「ずっと一緒にいたい。隣を歩いていたい」

私にとってのファンタジーが一瞬で現実になつていく。

恋心なんてわからないなんていつておきながら、なんて手のひら返しだ。

「やしなうから」

うん。やしなつて。

「だから、一緒に歩いていこう」

「うん！」

私は我慢できずに八幡の胸へとダイブする。

これから、一瞬たりとも離れないぞつて、気持ちを込めて。

おかえり、八幡。

やっぱり大好き。

「もういい、返せ」

「やーだよーこれはもう杏のだからねー!」

言いながら舌を出す杏。

そんな杏を最高にかわいいと思ってしまっている時点で俺はもう負けている。

結局のところ、俺が求めた本物はずっとそばに居た。

プロデューサーとしての本物。

比企谷八幡としての本物。

二つも手に入れてしまった俺は何て幸せものなんだろうと思う。

が、結局のところ人が変わるにはそれなりの日にちを要するようで、どんなに幸せだと思ってもその気持ちだけを伝えるなんて俺には無理だ。恥ずかしいからな。

告白でそんな思いはお腹一杯だし、もう体験したくない。

こっちは嘸まなないようにするので精一杯だったのだ。これ以上は御免である。

「ねえ、八幡」

「あ?」

「着けて」

「…おう」

「…どう? 似合ってる?」

「…似合ってなかったらそう言えたんだけどな」

「そんなときは八幡の見る目がなかったんでしょ。ありがとう、はちまん。大事にするよ」

「ああ」

俺も、大事にするよ。

日常の果て

雪に頼まれたモノが日常を運べたら

「ただいま」

「おじゃまします」

「おっじゃましまーす☆」

三人で我が家の玄関を潜る。

きらりと杏と俺。

今日は滅多にとれない三人の休みを利用して、何処かへ行こうときらりが言い出したのだが、なぜだ。

なぜそれが我が家なんだ。

「わあー！きらりちゃんだー！おおきい！可愛い！すごーい！」

ああ、きらりは連れてくるの初めてだったしな。

よくよく考えてみれば割りと凄い光景だな。ここに並んでいる二人は世間を沸かす、トツプアイドルだ。

そんな子が我が家にいると考えればそりゃテンション上がるよな。二人がいる風景が当たり前だと思うのは、俺の感覚が間違ってるんだらうし。

「はじめましてだにいい、小町ちゃんだよな?」

「そうです!比企谷小町です!いつも兄がお世話になってます!」

小町ちゃん小町ちゃん、世話してるのはお兄ちゃんの方だよ?

なんでプロデューサーがアイドルに世話されてると思ったの?そんなに頼りなく見えるのかな?

「うんうん、でもね、お世話になってるのはきらり達の方だよ?いっつも助けてもらってるの。ハチ君がいるからきらりは、はびはび出来るよ!」

きらりってば良い子…!

「へー、お兄ちゃんも役に立つんだね。それはそうと、お義姉ちゃん」

あれー?なんか字が違って見えるぞ?何この子、もしかしてもう気づいてるのん?

「へ?どしたの」

「家に入ってくるときは、ただいま、ですよね?」

因みに今、杏はきらりにだっこされている。きらりには全てを話しているらしいが、三人でいるときはきらりが杏を独占するようになった。

…別に寂しくなんて無い。

にしても家に入ってから今までと変わったような仕草もしてないのになぜ気づいた、小町よ。エスパーかな？

「あ、えと……ただい、ま」

「によわー☆きやわいいー！」

顔を真っ赤にして言った杏がよつぽど可愛いかつたらしく、きらりは抱き締めたまま頬をすりすりしている。

ただいまを聞いた小町はなにやら納得している様子で頷いている。小町、何がしたいんだよ。

「もういいだろ。早く上がってくれ」

以上が玄関での出来事で、これから我が家での長い休日が始まるのだ。

あれ、俺休めてない気がする。精神的に。

「そもそもなんで実家なんだ……」

三人で遊びに行こうと聞いたときは、二人のためと思ひ多少の覚悟をして、人の多いシヨツピングやらなんやらを想像していたのに。

まさか実家に行こうと言い出すとは、全く想像できなかった。まあでも、二人が行きたいと言った以上、拒否権は俺に無いですよ。知ってる。

「きらりはねー、杏ちゃんから聞いていたのです。ハチ君にとつてもかわゆい妹がいて、仲良しだった。それならきらりも仲良くなりたいたい☆」

「小町もです！まさかきらりちゃんにも会えるとは思ってなかったです！」

ちよつとうちの妹のテンションがあれだな。まあ気持ちはわからんでもないが、そのうち落ち着くだろう。それにしても小町ってこんなにアイドルに興味があつたのか？今まではそんなことなかつた気がするんだが。

「お兄ちゃんに感謝するんだぞ、小町。俺は使える権限は使い潰すんだ。小町のためなら越権行為もなんのそのだ」

「はあ？何言つてんの、ごみいちゃん。そもそも今日家まで来てくれたのつてきらりさんのお陰じゃん。どうせ、休みだからつてごろごろしようと思つてたんでしょ？」

うぐ。ばれてる。

い、いや、小町のためならつてところはホントだよ？

「まあ、八幡だし、しようがないよね。そういうの期待する方が無駄だもんね」

あれ、今日はなんだか冷たくないですかね。いつもはもう少しだけ優しい気がするんですが。

「それにしても小町ちゃんはかわゆいねえ。そだ！せつかくハチ君がプロデューサーなんだし、アイドルやってみゆ？」

「ばっか、小町にアイドルなんてさせられるか。小町がアイドルになったら小町教が出来るまであるぞ」

もちろん教祖は俺。

「それに大勢の男に晒すのはいただけん」

少し考えればわかるはずだろ。あの顔で、あの声で、見つめられ、お兄ちゃん？なんて首をかしげて言われれば、全国の大きいお友だちはズキユンされてしまう。

大量シスコン兵器だ。俺はシスコンじゃないが。

「そのシスコンっぷりは引くねー。腐った目だから余計に」

杏ちゃん、今日は本当に厳しいね。

「小町的にもポイント低いかなー。まあでも小町はアイドルはしませんよ。お兄ちゃんとは兄妹のままでもいいですから。今の小町のポイント高い！」

まあな。でもさつき減点されたからとんとんだな。

「うーん、残念だにいい。一緒にきらきら出来たら楽しいと思っただのに」

「まあまあ。きらりが個人的に遊びに来ればいいんじゃない？八幡に頼めば連れてきてくれるし」

「暇があればな」

全くいつまで働けばいいんだ。許容したとはいえ、50、60になるまで働くとか気

が遠くなってしまう。いやよそう、考えれば働きたくなくなる。ほら、言った傍からこれだ。

「すまん、電話だ」

言つて部屋から出てディスプレイの表示を見る。

そこには前に大手の番組に、無理言つてだして貰った番組プロデューサーの名前が表示されていた。

どうもこの人に入られたようだ。あれからちよくちよく誘われては飲みに行く。俺も二十歳になったことだし、遠慮がなくなった。

「お疲れさまです」

『お疲れ。聞いたよ、今日君休みなんだつて?』

なんで知ってるんだよ。連絡網とか回ってるのか?いつかは望んだことだが、実際回ると相当面倒だな。やっぱボツチ最強。

「知ってるなんて驚きです」

『いやなに、たまたま局で城ヶ崎ちゃんと赤城ちゃんに会つてね。そこで当然僕のお気に入りです。彼女達のお気に入りになったわけだよ』

当然つて。あれ、この人ガチなの?俺の事気に入ったとか言つてたけどソツチの人?

「はあ、そうですか」

『最近冷たくないかい？まあいいや。それでね、これから飲みに行かないかい？もちろん僕持ちで良いよ』

そんなことを聞いておいて断れるわけがない。これは罠だな。

きつと今度の企画で俺のアイドルの誰かを使いたいんだろう。まあ悪い話じゃないはずだろうし、一応それなりにはこの人を信用しているから問題はない。

「いいですよ、ただ運転しなきゃいけないんでアルコールは無しで」
『いいよいいよ。じゃいつものところで待つてるから』

はあ。折角の休みなんだが仕方ないな。

部屋のドアを開けると、なぜかきらりが小町を抱っこしていた。

「…何してんだ」

「小町ちゃんもかわゆいから抱っこしたいなあつて。いいでしょう」

ああまあ気持ちは分かるぞ。俺には最近ベタバタしてくれないからな。羨ましい。

「…悪い、二人とも。ちよつと呼び出されて出なきゃいけないくなった。夜には帰れるからここで待つててくれ」

「ん。仕事？」

少し寂しそうにする。ちくしよう、可愛いな。

「ああ、あのいつものプロデューサーだ」

「ああ、あの。てことはまた昼間っから飲むんだね」

「飲んだら運転出来んだろ。アルコールは無した」

言いながらジャケツトを羽織り、車のキーを取り出す。

「じゃ、行つてくる。小町、後頼むな」

「あいあいさー。いつてらっしやい」

「いつてらー」

「八千君またねー」

玄関から出る。そこでため息が出た。

ああ、それなりに楽しみにしていたんだけどな、三人の休み。

「やあやあ、比企谷君、遅かったじゃないか」

「すみません、つて遅くなるつて言つたじゃないですか」

「そうだっけ？まあいいや、座りなよ」

「うす」

小さな料亭。ここに出す飯は旨く、酒は地方の良い酒を仕入れている。

もちろん値段は相応に高い。ちくしょう、成功者め。

「それにしても君は本当に面白いよね。正直ここまで上がつてくるとは思わなかった

よ」

そんなの俺だって思ってなかった。というより、その時その時を考えるのに必死で、上なんて目に入らなかったと言った方が正しいのか。

「いつもその話しますね。もう飲んでますか？」

「だから言ったじゃないか、遅かったねって。それともう一人呼んだだけどなー」

もう一人？だれだ？

「まあ来るまで君の話を聞きたいな。どうだい、上手くいつてるかい？」

色々な話をした。

この人とはプロデューサーになりたての頃からの知り合いだから、砕けて話をする。

もちろん仕事中はちゃんとしてるが。

「しかし、君にはやっぱり才能あるよ。新しく作ったユニットも好評じゃないか」

凸レーションもAランクまでとはいかなかったが、中高生を筆頭に確実にファンを増やしている。そう遠くないうちにAランクに上がるだろう。

「お陰さまで。杏の時みたいに協力してくれれば、もつと上にいけると思うんですけど」

「その話か。したいんだけどね、もう一人が来てからかな」

てことはもう一人は業界関係者か。

その時、個室に仲居さんが入ってきてきてお連れ様が来ましたと伝える。ここだけ見ると

なんか悪事を企む野郎のワンシーンだな。

「失礼します」

「え」

「待ってたよ。じゃあ仕事の話をしようか。まあこの面子だし、気軽にね」

個室に入ってきたのは目付きが鋭く、大柄で、人でも殺してそうな顔のプロデューサーだった。というか武内さんだった。

そんなこんながありつつも、仕事をするときには三人とも真面目である。

いや武内さんはいつも真面目だけでも。

結局この人が提案したのは346プロ特集の歌番組だった。それには346のアイドルだけが出演するというなんとも冒険のような計画。

そんな番組の演出をどうするか、アイドルを知り尽くしているプロデューサーに意見を聞いたかったよう。

「いやあ、ようやく決まったよ。ありがとう二人とも。流石は有名なプロデューサーたちだね」

「いえ、ありがとうございます」

「でも」

有名ね。武内さんは文字通り敏腕プロデューサー。

そして俺は腐った目のプロデューサーとかだろ。

しってる。はちまんきずつかない。

「それにしてもき、ずっと気になってたんだよね。本当は会った時すぐにも聞きたかったんだけど、仕事終わってからの方がいいかなーってね」

「?はあ」

「なにもつたいぶってるんですか?」

「いやいやそれこそ驚天動地って感じだね。今年一番まさかと思ったよ。正直仕事上
の空だった」

いやそれは駄目だろう。こっちが真剣にやってるのに何してんだこの人。

「比企谷君、その指、その左手薬指にはまっている、輪っかはなんだい?」

……あ。やらかした。

「…気づいてなかったのですね」

武内さん、気づいたなら教えてください。

「あ、いや、これはでしゆね、しよの、妹に…」

「妹に貰った指輪を左手薬指に? いやあ、仲が良いとはいってもその指には、はめないんじゃないかな?」

やばい。最近これがあるのが当たり前前すぎて、忘れてた。そうだ、今指輪がはまって

いる。

「とうとう君にも春が来たんだろ？ いやあめでたいよ。それなのに話してくれないし、隠そうとするし。…そんなにいけない恋なのかな？」

「そんなわけないじゃないでしゅか！」

「すみません。もうこれ人生で一番噛んでるよ。」

「なら話してくれてもいいんじゃないでしゅか？」

「ぐっ！ 意地が悪い！ この人絶対に許さない。絶対に許さないノートに二回も名前を刻んだのはこの人が初めてだ。」

「こ、これは彼女に貰ったんすよ。俺も最近一般の人と付き合うことになって…」

「なんてね。気づいていないとでも？ 僕はそこそこ君を、君たちを見てるんだよ。太陽と、それを見上げる君をね」

…やばい。

「双葉杏、彼女だろう？ 君にそれを送ったのは」
ばれてる。

「はあ…」

武内さん溜め息やめて！

「安心しなよ、僕は君を貶めたりしないよ」

「はあ、まあ……」

「僕相手に誤魔化せると思つてたのかい？僕は気づいてるよ。最近彼女の首にネックレスがつけられていることも、それが贈り物であることも」

全部ばれてるじゃん。まじか。いやでもこの人なら……

「リークしたりしませんよね……？」

そう聞くと笑いを堪えながら、

「するわけないじゃん。むしろ応援するよ。厳しいだろうけど、不可能な恋じゃない。君のデビューだつてそうだったろう？厳しい条件の仕事、それを君は獲つた。それと一緒じゃないかな」

いつも思う。不可能じゃないのだろうか。確かにアイドルが結婚するというのは聞いたことがあるが、それでも相手が俺で、トップアイドルの結婚は許されるのだろうか。「私としてはあまり外部に漏れることは避けたかったのですが……仕方ありませんね。この情報をリークした場合、こちらにも考えがありますよ？」

「怖いね。でもそれを守りきつた場合、結婚式には呼んでくれよ？」

勝手に話が進んでいる。そもそも俺が指輪を外し忘れたからいけないのか……

いつからだ？あ、実家でもそうだったのか？だから小町は気づいていたのか。

「よろしくお願ひします……本当に」

「うんうん。それで、彼女に指輪を貰ったのは何故かな？ こういうリスクもあるだろう？」

いやまあ…。

「…女避け、だそうです。目が腐ってるくせに意外にモテるから心配だって…」

それを聞いて今度こそ大笑いをした。

「いやまあ確かに、ぱつと見君と彼女が付き合っていると気づくのは無理だろうね。君たちを知っている人間ならともかく。彼女は指輪をしていないしね」

「しかし、うちのアイドル達は皆気づいています。その対応で最近困っています…」
知ってる。最近、渋谷がそれとなくアピールしているんだそうな。

あの二人いいね。アイドルとプロデューサーだって。凄いよね。そんな二人でも付き合えるんだね。

ご迷惑をお掛けしてすみません、武内さん。今度なんか奢ります。

あと有名な遊園地のペアチケットとかありますかね？

「ほんとすみません…。でもアイドルに関して言えば杏がネックレスをつけた時点で気づかれましたよ…」

なんで気づかれた。そしてなぜそのペンダントが贈り物だと気づいた。

杏が自分で買ってたかもしれないのに。本当に恐ろしい。

そしてあの二人の言葉がなにげに刺さる。

え? はっちゃん杏ちゃんと付き合ってるの? それなら杏ちゃんと並んでも恥ずかしくない格好しようね☆はい、これ見て!

とかいって雑誌渡してきたり、

え!?! そうなんだー! じゃあはっちゃんも指輪プレゼントしないとイケないね!... え? プレゼントしないの? どうして? かわいそうだよー!

なんて言われたり。

「まあ女の子は敏感だからね。そういうことにはすぐに気づくもんだよ。...ん、もうこんな時間か。そろそろ解散しようか」

もう16時か。四時間も話していたことになる。まあ仕事の話もあつたし、そんなものか。

「それでは私はこれで。代金は置いておきますね」

「いいよいよ。こっちは経費で落ちるから」

「そうですか。ではお言葉に甘えて。ありがとうございます」

「いえいえ。それと比企谷君」

「はい?」

「彼女、幸せにしなよ。勿論君も幸せにね」

「…はい。ありがとうございます」

雪に頼まれたモノが日常を運べたら2

「…はあ」

八幡は仕事に行つた。

仕事？まあ仕事だよ。飲むのも仕事つて聞いたことあるし。

寂しくないと言えば嘘になる。だって私はいつまでも八幡と一緒にいたいから。

「はあ、本当にお兄ちゃんは成長しないな。二人を置いていくなんて」

「まあまあ、仕事だから仕方ないに」

仕方ないって言つてるけどきりりもきつと寂しがってる。

私達は三人一緒に完成形。八幡には悪いけど、私には八幡もきりりも必要だから。

「それにしてもお義姉ちゃん、指輪送つてあげたつてことは、小町のお義姉ちゃんになつてくれるつて事ですよね？」

うう。恥ずかしいなあ。なんで実家にまで着けてくるかな。もしかして気づいてなかつた？

小町ちゃん八幡が家に入ってからガン見だったよ？

「ま、まあその、八幡がどうしてもつていうから…？」

「なんで疑問系…。でもそのネットクレスを着けてるから言い逃れは出来ませんよ？それ兄からですよね？」

ばれてるー。なんでみんなわかるかなー。きらりにもすぐばれたし。

「もう、杏ちゃん！恥ずかしがつてたらハチ君寂しがるよ？」

意外と寂しがりだしね、八幡。

「うう、そうだよ。八幡とずっと一緒にいるって約束したよ」

「…ありがとうございます、小町はとても嬉しいです」

そこで小町ちゃんの雰囲気が変わった。

「兄はですね、ずっと人と距離を置いていたんですよ。兄は何も悪くないのに目付きがきもいとか普通に気持ち悪いとか」

普通に気持ち悪いって酷いなあ。目はわかるけど。最初に会ったとき、少し思ったし。

でも今は割りと好きかなー。なんだろ、愛嬌あるきがする。ん？なんでも肯定してるだけ？

「ぼっちこそ最強とか言い出してですね、小町以外とは関わりがなくなっちゃって」

本当にそんなだったんだ。私は初めてあったときの印象が強すぎて小町ちゃんの言う八幡は想像できないかも。ときどき捻くれたこと言ってるけど、私たちには素直だし。

「小町はいつも寂しかったんですよ。兄の良いところをなぜ誰も気づいてあげないんだーって。本当に、悲しかったんです」

気持ちにはわかるかも。八幡は優しい。聞いた話じゃ学校ではいつも一人で、友達もいないくせに自分が出ることがあると、それを実行していたらしい。その結果自分が割り喰うのに。

小町ちゃんが怒りながら話してくれたっけ。優しすぎるって。

そして回りの人間に対して鈍感だって。

「だからちよつと心配だったんです。兄が知らない場所に行つて小町と離れることが。しかもアイドルの相手ですよ？正直兄に向いてないって思いましたよ」

確かに。そうだよね。

「でも久しぶりに帰つてきた兄は、お義姉ちゃんを連れてきて。小町本当にびっくりしたんです。あの兄が家に誰かを連れてきて、しかも楽しそうに話してるから。いやまあ顔はいつも通りでしたけど」

あの時の小町ちゃん固まっていたもんね。玄関で出迎えてくれて、私を見て、え？って

顔してそれから、どこからさらってきたの! って言ってたね。

「それで兄の態度を見ててもつとびつくりしたんです。捻くれてなかったから。別人かと思っっちゃいましたよ」

それは、確か…わ、わたしのことを…す、すきだからだよ。

すきになったからまつすぐだったのかな。

「兄はやつと見つけたんですよ。自分が信じられる人を。それが杏さんだったんです。だからお礼が言いたくて。本当にありがとうございます。お、お兄ちゃんを、見つけてくれてっ」

泣きながらお礼を言われる。私はお礼を言われるようなことはしてないのに。

だって私が八幡を見つけたんじゃないよ、八幡が私を見つけてくれたんだよ？

「小町ちゃん」

「…なんですか?」

「杏と小町ちゃんはもう姉妹みたいなものだよね。だつたらもつと砕けて話そうよ。ね、小町」

私は自分にできる最高の笑顔で言った。可愛い義妹に涙なんて似合わないから。

「…うん! ありがとう! お義姉ちゃん!」

小町が抱きついてくる。なるほど、八幡がシスコンなのわかったかも。

小町可愛いなあ。

「きらりも混ぜてー☆」

「くる、苦しいですよ、きらりさん」

「あははは！ぐえ」

ああ、本当に幸せだなあ。

「お義姉ちゃん、手伝ってよー」

「えーやだ。杏は基本的に働きたくないんだよー」

落差がひどい。自分でもそう思うけど嫌なものは嫌なのだ。

「それに小町の料理が食べたいからねー。杏が手伝うと違うと思うんだ」

「むう、嬉しいような。でもなんかお兄ちゃんみたい」

八幡みたい？それはなんかヤダ。

「小町ちゃん、きらりが手伝うよ？」

「はい、お願いします！でもお義姉ちゃんと一緒に料理したりするのは、夢だったんだけどなく」

うぐ。心が痛い。でもなー私も妹が世話してくれるの夢だったしなー。

「…小町、今日一緒に風呂入ろっか？」

「え!? 本当!? わーい! きらりさんも一緒ですよね?」

「もちろん! 小町ちゃんをぴかぴかしちゃうよ?」

女三人集まればなんとやら。どうも私の生活は一変したようだ。

たのしいなあ。小町と話をするのも、きらりと一緒にいるのも。

「ああそうだ。兄の話をしてあげるね。昔まだ中学生くらいの頃、世界には三人の神がいる、とか書いてるような中二病を患ってたんだ。あのノート見たとき、小町恥ずかしかったな」

ぷ。なにそれ。そういえば八幡神崎さんを見たとき、なんとも言えない顔してたな。

どうやら多少の会話も出て来てるみたいだったし。

全然内容わかんなかったけど。

「他には格好いい話もあるんだよ! 道路に飛び出た犬を庇って轢かれたりしてね。まあ犬を助けたとこまでは格好いいけど、轢かれて入院しちゃうのは小町的にポイント低いな」

小町ポイント。貯まったら良いことあるのかな?

それにしてもその頃からいざというときに行動できる性格だったんだね。

生まれ持ったものなんだろうね。生まれつき優しい。

「…その時八幡の怪我は大丈夫だったの？」

「うーん、まあそれなりに。事故つたのが高校の入学式で三週間も入院しちゃって。それで高校ぼつちが決定しちゃって。まあそれがなくてもぼつちだったんじゃないか？つて思うけど」

そっか。なら安心。傷跡とか残ってるのかと思っちゃった。

「でもハチ君スゴいね。流石はきらりのプロデューサーだね☆」

「そうですね。その時助けた犬の飼い主さんが兄に近づきかけたんですけど、どうも兄が拒絶しちゃったみたいで。兄の高校時代の知り合いって戸塚さんぐらいかな？」

へー。一応完全に一人って訳じゃなかったんだ。

「ただいまー」

「あ、帰ってきた」

八幡だね。

疲れてるだろうから、この杏ちゃんが笑顔で迎えてやろう！もちろん、寝転んで。

「ただいま」

色々と疲れた。精神的に。もう動きたくない。

「あ、お兄ちゃんお帰りー」

「…お疲れ、八幡」

「ハチ君おつとおつ！」

他にも声が二つ。なんだ親も帰ってきてたのか。

ん、それにしてもなんか小町達の雰囲気が違うような。特に杏。なんか椅子の上で正座してゐたみたいに姿勢がいいな。萎縮してないか？まあ親の前だから仕方ないのか。

「お兄ちゃん、ご飯食べる？」

「ああ。食つてないからな」

「ハチ君！きらり達ねー、ハチ君の昔の話いっぱい聞いちやつた☆面白かったよー」

おい。絶対録な話じゃないだろそれ。

「…小町ちゃん？」

「あーえつと…テへ☆」

はいデコピン。

「あうー。ひどいよお兄ちゃん」

本当にこの二人って仲良いよね。とても楽しそう。

悪態ついたりもするけど、それが仲の良いことの証明みたい。

…そんなことより、私には今直面している問題がある。重大な事だ。やーばーいー。

私は今椅子に座りながら、背を伸ばし、両の手を膝へ。つ、つかれる。精神的にも。

うーうーうーうー。どうしてこんなタイミングでやっちゃうかなあ!?

私達はあれからも他愛のない話をしていた。勿論私は寝転んで。

そしてその時が来た。

「ただいまー」

玄関からそう聞こえたから八幡が帰ってきたと思って、私はソファへ寝転んだまま、仰向けになりながら、両の手を広げ、言った。

「おかえりー。はちま、」

言えなかった。そう、そこには、

「あ、お父さんだったんだ。おかえりなさい」

比企谷家の大黒柱が立っていた。

うーわー。うそだー。

今まで遭遇したことなかったから完全に油断してた…。

そうだ、そうだよ、八幡にも親っていたんだよね…。やばいやばい。

第一印象最悪だ…。

うーうーう。

どうしよう。礼儀知らずな女だと思われた？絶対思われた…。
どうしようどうしよう。

やっぱきらりと一緒に料理手伝っておけば良かった…。

大事な大事な第一印象があ…。

「さてと。それじゃお兄ちゃん、小町達は風呂に入ってくるね」

「ん、三人で入るのか？」

「うん！はいはい、お義姉ちゃん、一緒にいこうね」

随分と仲良くなったみたいだな。小町も杏に敬語使ってないし。

それにしても杏、生きてるか？あれ。なんかあったのか？

八幡。

不意にそう呼ばれた。目の前には親父がいる。

珍しく俺に話があるようで、食べながらでもいいから聞けと言い出した。

お袋はどうも聞きに徹しているようだ。

「珍しいな。小町の進路の話か？」

違う。お前の今後の話だ。

俺の今後？

…ああ、杏の事か。そういうえば指輪まだつけっぱじゃん。

親父はこれまで見たことない真剣な顔をしていた。

今日初めてお前の恋人にあった。面白い子だな。

それを聞いてお袋は笑う。なんだ？杏は何をやらかしたんだ…。

親父は楽しそうに話をし始めた。

あんな可愛い子がお前に惚れるとは思えんとか、プロデューサー権限で無理矢理じゃないだろうとか。

失礼じゃないですかね。息子どんだけ信用ないんだよ。

でもあの子の顔に信頼を見た。だからこそお前に聞かなきゃいけない。

「なんだよ…」

俺はもう手を止めていた。食べながらで良いとか言つといて、食べながら聞くような話じゃないんですけど。さすが親父きたない。

お前は責任をもって、彼女を一生笑顔で居させることが出来るか？

少し詰まりながらも出来るかと答えようとした。だが、

いいか、笑顔で居ると言うことは、お前が彼女の生活を支え、子供が出来たら大人になるまで育て、いつまでも彼女を、家族を愛し続けるということだ。いつか言つてたな。

他人の優しさも好意も信用できないと。そんなお前が彼女の人生に責任を持つ覚悟は

あるのか？

確かに。そんな時期もあった。いや、人生の半分はそう思いながら生きていたかもしれない。

でも双葉杏に出会った。

一目でわかった。普通とは違う人間だと。

その目に、なにかを感じたとき、信じるとか信じないとか、どうでもいいと思った。その目の輝きには欺瞞が微塵もなかったのだから。曇りのない輝き。

ただ、こいつの輝きを皆に見て欲しかった。ここにいるアイドルは、一目で心を奪うほどの輝きを放っているんだと。

「当たり前だろ。俺はプロデューサーだぞ。あいつの面倒は俺以外には見られない。杏の側には俺が一生居続ける。俺の一生は杏の隣にある」

最近どうも頭のネジが飛んでいるらしい。

こんな言葉が出てくるようになったんじゃぼつちは失格だろうな。ぼつちを名のる気はもうないが。

ああ。それならいい。八幡、よかったな。

「…なんか杏の顔が真つ赤なんだが大丈夫か？」

「い、いやあー長風呂でのぼせちゃったかも？」

なんで疑問系なんだよ。

「ハチ君、杏ちゃんはきらりが車まで連れていくね？」

そろそろ帰らなきゃ時間が遅くなる。愛しい小町と離れるのは寂しいが、明日も仕事があるし仕方ないだろう。

社畜一直線。やだわらえない。

「じゃあな、小町。また来る」

「うん、またね、お兄ちゃん、お義姉ちゃん」

きらりは近所迷惑を考えているのか、声のポリウムを落として、しかし元気よく体を動かしながら手を降っていた。

いつの間にか杏を下ろしていて、下ろされた杏は玄関まで見送りに来ていた両親に頭を下げていた。

その間も顔を赤くしたまま。

車の中。

東京千葉間を、今日だけで三往復するという何とも言えないキツさ。

今日は相当運転している気がする。

「…今日はなんだか疲れた」

「…だな」

なんで休みの日なのにこんな疲れてるのか。

きりりはよつぽどはしゃいでいたのか後ろで寝ている。

助手席の杏は目が冴えているようで、うさぎを抱きながら顔を埋めている。

「…今日さ、失敗しちゃった」

「なにを」

「八幡の両親と、初めて会うときに…その、寝転んで、八幡と間違えた…」

なにそれ。間違えた瞬間を見たかった。絶対可愛い顔してたぞ。

「まあ、なんだ、気にすんな」

「そうはいつてもさ、気にするよ」

まあ気持ちにはわからんでもないな。もし俺がその立場だったら、もはや印象は底辺を

越えて墓場に埋もれるだろう。やだ、死ぬる。

「最後に親父も言ってたろ？俺をよろしくって」

「まあ、そだけけど…」

「気にしすぎなんだよ。どうせ親父の事だから杏の可愛さにやられてデレデレだろ」

何せ小町を溺愛しているくらいだし。新しい娘ができるとかって喜んでるだろ。

「てかさ、その、聞いちゃった」

「何を」

「八幡とおとう…八幡のお父さんの会話」

うわあー。まじかあ。

よし、死のう。

「なんで聞いてるんだよ…」

「小町が今からお父さんが大事な話をするから、風呂に行くふりして盗み聞きしようつて」

あー、あれ聞かれたから顔が赤かったのね。

それ聞いたあと風呂に入って二人に全力で可愛がられたと。

それできらりはあんなに疲れてるのか。

「…そうか」

「…八幡ってさ、最近恥ずかしい奴だよね」

「失礼だな。でも自覚はしてる」

自覚はしてる。だけど杏の事だから真剣に答えないわけにはいかんだろ。

「全然関係ないかもだけどさ、また三人で遊びにいきたいね」

「…だな」

どうも話が纏まってないな。まあ仕方ないかもな。

俺の両親にあつて、しかも失態を犯したんじやあな。

「ねえ、八幡」

「なんだ」

「今度は家に来てよ。北海道」

「ん。そのための休みをつくるか」

杏の実家か。よし、覚悟を決めよう。

大丈夫だ。俺は杏のように寝転ぶことはないし、そんな失態はしない。

目はどうする？どうもできん。

ああそれと大切なことがあるな。

絶対に嘸まない。

日常から脱線した先には果てが見える

「ねえ、プロデューサー」

ふとそんな声が聞こえる。ここは本社なのでプロデューサーなんて腐るほどいる、はず。

いるよね？そういうえば俺武内さん以外会ったことないぞ。あれえ？この会社二人しかいないのか？

だとしたらあの人だけアイドルの面倒見てるんだよ。いつか過労死しちゃう。

それともマネージャーはいるとか？見たことないが。

そもそもプロデューサーに見てもらっていたアイドルが、知らないマネージャーにいきなりバトンタッチされても嫌がるだろう。ソースは杏。俺も嫌だし。

「ねえ、聞いてる？」

まあ他の担当の子も嫌がるだろう。今では俺も少しずつ担当を増やされつつある。武内さんコースに足を突っ込み始めた。絶望するな。

あいつらもマネージャーなんて嫌だろう。それに手塩にかけてアイドル達を他の人

間に任せるつもりはない。信用できないしな。

しかしなぜ俺の担当アイドルが増えているのか。それはあのドS専務のせいだ。杏のプロデューサーに戻りたいと話をした時、あれだけ舌論に自信があると言っておきながら実際には負けたのだ。

しかし将来性を買われ、これからもアイドルを成功させ続ける事を条件に譲歩された。

忌々しい。

「ちよつと無視しないでよ!」

ずつと聞こえていた声の前から聞こえ、姿が見えた。それはニュージエネの一人。

「…渋谷か。俺を呼んでたのか?」

「そう。ちよつと話があるから」

話? そんなものは自分のプロデューサーにしてくれ。

「武内さんなら今デスクにいるぞ」

「知ってる。そうじゃなくて比企谷プロデューサーに話があるの」

まじか。絶対ろくでもない話だ。もうすでに嫌な予感がするし。

そうと決まれば撤退だ。

「すまん、ちよつと用事あるから…」

「今逃げたら、杏に比企谷君とデートしたって言うから」

怖いこの子怖いよ！

「…なんだよ」

「その、プロデューサーとの事で話があつて…」

今言ったプロデューサーとは武内さんの事だろう。

「あんま廊下で話す話題でもないな。場所を変えるぞ…俺のデスクでいいか？」

「うん」

「私、杏と比企谷君の事知ってるんだよね」

なんで知ってるんでしょね。ばれすぎだろ。なんならアイドルはほぼ知ってるまである。

「…それで？」

「いや、その、アイドルとプロデューサーって難しいでしょ？だから、どうなのかなって」

どうなのかなってなんだよ。

「どうもこうも…ん、どうだろうな」

「なにそれ」

やだこわい。

なんでこんなに睨まれるのん。それにあんまり可愛い女の子と話したくないんだが。

「なにそれとか言われても…。それに、少しは知ってるだろ」

「知ってるけど、そうじゃなくて本人達の気持ちを知りたくて…」

知ってるんですね。どんだけプライバシー漏れてんだよ。

それにちらちらと指輪を見てくる。…それもばれてるんですかねー。

「…気持ちも何も特別な話はないぞ。そもそも女の子と交わせるような話題すらない」

「はぐらかさないで」

やだー、この子の目怖い。

「知りたいんだってば。どうしてアイドルと付き合いおうと思ったのか」

こんな真っ直ぐな目は苦手だ。どうしてもプロデューサーとして何かを感じてしま
う。

なるほど。流石に346トップクラスのアイドルだ。さしずめ蛇に睨まれた、という
やつだろうか。

「…別にアイドルと付き合いおうとか考えてた訳じゃない。ただ杏がアイドルだっただけ
だ。あいつが何だろうと多分す…ほれ…惹かれてた」

「でも実際杏はアイドルでしょ？ダメだとか考えなかったの？」

「考えた。考えはしたが、」

言いたくないな。なんで担当でもないアイドルに恥ずかしい話をしなきゃいけないんだ。

それがなくても最近はそういったことが多かつたんだ。これ以上は精神的にきつい。

「…なに？なんで止めるの？」

…こういう目は嫌いだ。女の子にこういう目をされると、自分が悪いことをしている気分になる。俺が悪いのか？

「…考えはしたが、わからなかつた。でも最終的に気持ちを伝えた。明確な答えが出た訳じゃない、でもずっと隣を歩きたいと思った。ただそれだけだ。…もういいか？」

渋谷は少し考え、しかし、

「駄目。それじゃ私はどうすればいいと思う？お互いがそう思わなきゃいけないんですよ？あの人がそう思ってくれると思う？どうすればいいのかな…」

お、俺に言われても。別に俺は恋愛の達人じゃないぞ。むしろ初心者だ。

「わからん。ただあの人だつて男だろ、だから気持ちを伝えていけば少しは傾くんじゃないか？可愛い女の子に好かれて嫌な男はいないと思うぞ」

多分。

「そ、そうかな？うん、頑張つてみる。不可能じゃないんだよね？比企谷君達が証明してくれるんだし」

それ以上言わんでくれ。恥ずかしい。

「ああ、そうだ。渋谷の実家って花屋だよな？」

「ああうん。そうだけど」

「ならこういうのって作れるか？」

そういつてある資料を見せる。正直あまり相談したくない話だが、できれば内々で済ませたい話だった。

「…うん、お母さんに相談しなきゃだけど多分大丈夫じゃないかな。専門って訳じゃないけど。けどこれって…」

「あまり勘ぐるな。それじゃその内お願いする。…あ、それと」

「なに？」

「これやるよ。この前昔の担任に会ってな。友達の結婚式で当たったそうさ。誰と行くかは知らんがペアチケットだから一人しか誘えないからな」

そういつて渡したのは遊園地のチケット。平塚先生から杏とどうだと貰ったものだが、あまり力になってやれなかったし渋谷にやるほうがいいだろう。それに杏と行くならきりりも一緒だろうしな。

てかあの人ただけ当ててんだよ。在学中も当たってたな。その時もどうだと言われたが俺も行く相手がいらないし、先生にもいないしで二人して絶望した。

「これ…、ありがとう！今度誘ってみるね！それと花の事は任せて！」
「おう」

「だるい…」

「だな…」

「もう！二人とも、しっかりするにいい！きらりはきらきらした衣装を着れて、はぴはぴすゆよ？」

「ただいま式場。といつても二人の、というわけではない。」

「しかしきらりと杏は綺麗なウエディングドレスを身に纏っている。はずだ。」

「ソファへ横になりたい…」

「我慢しろ。それ着てちや無理だろ」

「八幡も着れば？もちろんスカート」

「きやはー☆ハチ君も着ゆ？一緒にきらきらしたい？」

「するわけないだろ…」

「今日は二人が揃ってウエディングドレスの特集だ。この二人が選ばれたのには理由があった。」

「もちろん今をときめくアイドルであるというのは一番の理由だが、それともうひと

つ。

二人のサイズでもドレスを用意できますよと言う宣伝目的でもある。

「失礼な話だよ。杏がちっちゃいって言いたいんだよ」

「杏ちゃんは小さくて可愛いよー?」

「きらりも大きくて可愛いよ」

「によわー☆杏ちゃん大好きー!」

仲良いな、おまえら。百合なのん?

まあ実際問題二人とも似合っていると、思う。思うだけだが。この仕事は間違いなく成功するだろう。

100万部売れる。…言い過ぎか?

しかし俺がそう考えるのとは裏腹に、杏の機嫌は悪くなっていく。

なぜだかはわからないが、この仕事を受けるのは嫌だったそうで、

「凸レーシヨンの方で受けられないの? 要するに身長の問題なんだよね?」

「悪いがあの人だと年齢的な事もあるし、ウエディングドレスならお前のほうが映える。ギャップとかな」

「…そっか。うん、わかった」

そんなことで結局杏に決まった。

でもここまで嫌がるなら他のアイドルを考えるべきだったか…。

「…それで、いつ俺はお前達の姿を見られるんだ？」

今は控え室にいるが、二人が着替え終わって入っていい許可を得たが、目に入ったのは部屋を仕切るカーテンだった。何故かドレス姿を見られたくないらしく、今だに二人の姿を想像することしか出来ない。べ、別に変な想像はしてないよ？はちまんうそつかない。

「…見られたくない」

「んー、杏ちゃんが見られたくないらしいからおあずけ、だよ。」

何故だ。しかし無理矢理にでも見ようとすれば嫌われそうだし、見ないことにする。

「どうせ撮影になったら見ることになるんだぞ？」

「…そうだけど」

あれえ？嫌われたわけじゃないですよ？小町、お兄ちゃん泣きそうだよ。

「そろそろ準備おねがいしまーす！」

スタツフの音がする。しかし杏は余程今の姿を見られたくないらしく、出てこようとはしない。カーテンの向こうできらりも困ったように動いている。

「…はあ。わかった。撮影が終わるまで外で待ってるから」

外へと歩き出す。が、どうにも残念な気持ちで一杯だった。

見たかったけどな、杏のドレス姿。

「よかったの？」

「うん。だって八幡にはまだ見られたくないし……」

こんな姿見られたくない。だってこの姿を見るときは本当の……の時に見るべきじゃないかなあ？

八幡はわかってないよね。まあ八幡に女心を分かれと言う方が無理あるのかな。

「うんうん、気持ちはわかるよ。ハチ君はわからないみたいだけどねー☆」

「はあ」

私は悪くないのに自己嫌悪。

でもさ、そういう気持ちって大事じゃないかな？

だって私は乙女なんだし。

どうにも居心地が悪い。

杏たちに外へ追い出され、式場の外で手持ち無沙汰だ。

なにかしたのか？今日の杏は機嫌が悪い。確かに杏は仕事が好きじゃないが、それでも最近結構真面目にやってくれていたんだが。

まあ考えていても答えはでないだろうし、あとで聞くことにしよう。

「君はプロデューサーだよな？彼女達の仕事を見てなくていいのかな？」

いきなり話しかけられ、後ろを見ると今回の仕事を頼んできた、衣装の会社の社員であろいう人が話しかけてきた。

「まあそうですね。貴方は？」

「すみません、名乗ってませんでしたね。『幸福の木』の清水といいます。この度は仕事を受けていただきありがとうございます」

そういえばそんな名前の会社だった。

「いえ、こちらこそ。今後ともよくしていただければ」

「ええ、もちろん。それよりも、見ていかないのですか？」

「うちのアイドルに扱られちゃったので。終わるまでは外で待機ですね」

なんかこの人距離感が近いな…。あまり近づかないでほしい。今さら勘違いも何もないが、それでも女の人が近づいてくると警戒してしまう。

「…失礼ですが、結婚なされてるのですか？」

「いえ、まあ彼女はいますね」

なんで女の人はこうも目ざといんだ。

「そうでしたか。…あの二人のどちらかでしょうか？」

「なっ！そ、そんなわけないでしょ。あいつらはアイドルですよ？」

「いやいや、まさか一目見てわかるなんてことはないはず。だよな？」

杏は今日の比じゃないほど機嫌悪かったし、それはまずい。

「それは失礼しました。いえ、見られたくないっていうのはそういう意味かと思いましたが、」

「そういう意味、ですか？」

「ふふ、男性はわかりづらいのですかね。もし結婚したい相手がいる、その人との結婚式以外でウエディングドレスを着るようなことがあった時、その相手には見られたくないものですかね。だって初めては本当の結婚式の日がいいでしょう？」

「なるほど。かわいいな、と思ってしまった。いや可愛いのだが、どうも照れ臭い。」

あれ、八幡、リア充過ぎ？

「なるほど。それで付き合つてると思ってたんですね。けど俺の相手は一般人ですよ。あいつらとは釣り合わないでしょう？」

あはは。とひきつった笑いを見せる。失礼じゃないですかね。

「でも好きになつたのなら釣り合うとか関係ないですよ？そう思いませんか？」

「まあそうですけどね。あいつらは恥ずかしいだけみたいですよ。あまり気の知れない

相手に見られたくないでしょ」

「気の知れない？少し話しましたがそうは感じませんでしたよ？」

「まあ少しは信用してもらってるようですね」

これ以上嘘をつくのはどうも気分が悪い。いや、この人は悪くないけど二人の関係が秘密にしないではいけないものなのでどうにも状況が悪い。

「…そういうえば、二人のサイズのドレスっていうのは珍しい気がするんですけど、普通なんでしょうかね？」

「そうですねー、普通にあると言えば語弊があります。ないことないんですけど、やはり一般のサイズと比べるとどうしても種類が少ないんですよ。そしてそのような方のニーズに答えるのが私達の会社なのです！」

びつくりした。いきなり立ち上がったぞこの人。意外に熱い人だったか。

「私達は一般のサイズはもちろん、双葉さんや諸星さんのような方でもいろんなデザインが選べるようにと沢山の物を揃えています！それが売りですからね！だからこそ彼女達のようなモデルさんは探してもいないのですよ。いえ、モデルさんってだけならいますけど。同時に世間に興味を持っていただけるような方はなかなかなくて。だから非常に助かりました！」

「あ、ああ、いえ。ども」

熱い、熱いよこのひと。ちよつと相手するの疲れるんですけど。

「貴方もぜひ、結婚式をする際はうちの衣装を使ってくださいね！」

「は、はい。そうですね、考えておきます」

考えておこう。

それが必要になるのは杏が引退したあとになるのかもしれないが。

「もしもし、お疲れさま。珍しいね君のほうから電話してくるなんて」

「ん？ああ、確かに僕は色々な方面に顔が広いよ。もしかして仕事で頼みたいこともあるのかい？」

「プライベート？へえ本当に珍しいね。それで？」

「…ああいや、すまない。そんな事を頼まれるとは思ってもなかった。うん、僕の知り合いに頼めば可能だと思うよ」

「そこは確実に大丈夫だよ。それこそ僕との約束を破れば潰すことも出来るくらいだからね。え？怖い？君が頼んだんじゃないか」

「わかつたよ。また詳しい話をしよう。日取りも決めなくちゃだしね。…ところで、見返りはあるのかい？」

「友情は見返りを求めない？僕と君は友人だったのかい？僕が思うに友人っていうのは

便利な言葉だよね？」

「脱線してる？」ごめんね、君と話すのは割りとき好きなんだ。じゃあまた会って詳しくはなそう。お疲れさま、比企谷君」

果てのその先には

青春とは嘘であり、悪である。

「どうしてそんな事を考えてるんだらうね。もつと単純でいいと思うんだ」

「そうもいかんだろ。単純な人間は単純に流されていくだけだ」

「…よくわかんないんだけど」

青春をおう歌せし者達は常に自己と周囲を欺き

自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。

「そもそも良い青春時代を送れなかった八幡が悪いんじゃない？」

「違う。社会が悪い。学校生活なんて閉鎖された社会は悪でしかない。村八分って怖い
だろ？それとかわらん状況が意図的に作られてるんだぞ？」

「…八幡ってほんとにぼっちだったんだね」

彼らは青春の2文字の前ならば

どんな一般的な解釈も社会通念もねじ曲げてみせる。

「でもさー、それならその社会通念をねじ曲げてやればよかつたんじゃないの？ そう出来たら良い青春送れたかもよ？」

「ばっか、それが出来るのは持つものだけだ。社長には出来るのが社員には出来ないんだよ。そもそも窓際だしな」

「なんか話がでかくなってきた」

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも

青春のスパイスでしかないのだ。

「ふふ。そうやって考えると八幡って失敗のスパイスしか入ってない青春だよね」

「ああ。あれだ、テレビでよく見る完食できた人間がいないとか言う、激辛料理と一緒だろ。真っ赤なんだよな。あれ、辛さで涙出てきた」

「よしよし」

仮に失敗することが青春の証しであるのなら

友達作りに失敗した人間も

また 青春のど真ん中でなければおかしいではないか。

「だねー。それなら八幡も青春のど真ん中だよねー」

「だな。まあ恐らく琵琶湖のど真ん中で、周りに誰もいないがな」

「心は広そうかも」

しかし彼らはそれを認めないだろう。

すべては彼らのご都合主義でしかない。

「ご都合主義ならそれで良いじゃん。八幡だつてご都合主義でしょ?」

「確かに。学生の頃は突然出会った女の子が、俺と結婚して専業主夫にしてくれるって思ってた」

「それ高校の話?だとしたら相当ヤバイよ?」

結論を言おう。

「俺はそんな青春を送ってきたが、今ではそれで良かったと思ってる」

「それはどうしてかな?」

「言わせんな恥ずかしい。」

そんなこんなで飛行機の中。

「少しは落ち着いた?」

「あ、ああ」

言った八幡はコーヒーを飲もうとして、手に持ったコップはカタカタと揺れてた。

「…全然駄目じゃん。緊張しすぎだよ」

「あれ、おかしいな。いや、機体が揺れてんじゃね？」

「全く。揺れてるのは八幡だけ」

ふう。こんなんじや心配だね。大丈夫かな？

「八幡、うちの両親に会ったら心臓止まっちゃいそうだね」

「…ああ。止まるかもな」

冗談でも止めてね。もう八幡は私の人生で必要な人なんだから。いなくなったらどうしたらいいのかわかんないし。

しょうがないなあ。

私は左手で八幡の手を握る。一瞬ビクツとしたが、すぐに握り返してくれた。

心地いいなあ。

「…うし。やるか」

「うん。がんばって」

私はふと右手を見る。

色々と不恰好ではあったけど、八幡の気持ちが詰まったモノ。その不恰好さも八幡っぽくて好きだし。

これを見るたびに私は幸せになる。

ふふふ。

あーやばい。ついつい顔がにやけちゃう。
ふふふ。

あー幸せだなあ。

約束は取り付けた。

例の物も用意した。

覚悟も決めた。

「八幡、おまたせー」

「おう。じゃ行くか」

今日は二人で出掛ける。後に仕事が控えているのでゆっくり出来るわけではないが、それでもそこそこの時間があるので問題はない。

「今日はどこいくの？なんかあるんでしょ？きらり呼ばないんだし」

「まあな。ちよつと二人で出掛けたくてな」

今日ばかりは二人きりが良い。そうでなくては締まらないし、そもそもきらりがいたって気を使わせてしまうし。

「ん。じゃ行くっか」

それからは特別なことをしなかった。

いつも通り、杏の買い物に付き合つて、それからご飯を食べる。

最近あつたことを話し、些細なことで照れる。俺じゃない。俺は顔に出てない、と思う。

最近は三人でいることが当たり前だったので、二人きりというのも新鮮だ。

ずっと二人だと杏も寂しそうになるので、きらりがいない方がいいとは思つたことないが。

そもそも杏と恋人らしいことなどしたことはないし。

手を繋ぐぐらいいか。それもきらりと三人で繋いだりしてるし、特別なこととは言いがたい気がする。

それ以上のことは……まあ、無理だな。

何年ぼつちやつてたと思ってるんだ。なんなら手を繋ぐだけでいっばいいいっばいだ。「しかしコーラぼつかりだな……」

車の後ろに積まれた荷物を見てそう呟く。買い物とはいっても女子がするようなウインドウショッピングとは違っていた。

杏の頼みで買い物するときは大体食料とか飲料の確保だ。

「八幡に言われたくないよ。マツ缶を通販で箱買いしてるくせに」

「マツ缶は千葉県民の血液だからな」

「奈緒は違うって言ってたけど…」

まだまだだな。本物の千葉県民に一步足りない。

「それで、一通り用事終わったけど、もう仕事の時間まで事務所まで待機する？ 杏はもうおねむなんだけど」

「いや、ちよつと付き合ってくれ。まだ行くところがある」

「ん？ うん、わかった」

まだ、行くところがある。そこは俺にとつての決戦の地だ。

昔は負けることにおいて最強だと、自負していた。なによりそれに誇りを持っていて、それを他人に可哀想な目で見られれば鼻で笑う程に。

でも今は違う。

俺が負けてしまえばそれは、俺の担当アイドルが負けることに繋がる。

売れないアイドルが悪いのではない、売り込むことが出来ないプロデューサーが悪いのだ。

そしてそれとは関係なく、俺は今日負けられない。

そもそも負けとは何を指すのか。今日においてのそれは、言葉を杏に伝えられないことだ。

「ハイっって…」

「芸がないとか言うなよ。そういうのは俺に期待するな」

町が一望できる丘。ここは以前杏に気持ちを伝えた場所だった。

「…期待はしないよ。でもこの場所は杏にとつて特別だから」

そう言いながらペンダントを握る。

「話があるんだ」

杏がこちらを向く。その顔はなんとも言えない表情で。

不安なのか、期待なのか。

「…その言葉を聞いたら期待しちゃうよ。あの時を思い出す」

前も同じように切り出した。

あの時も頭が一杯一杯で、まともに機能してなかった気がする。

「まあ別に大事な話って訳じゃないし、ただこれを渡したかったんだ」

ひとつ嘘を付いたが、その方が良いと思った。

そして差し出すのはひとつの小箱。その中にはひとつのリング。

「こ、これって…」

「ペリドット。太陽の石だそうさ。杏に渡したかった。まあペリドットは八月の誕生石

で杏とは一月違いだが…」

言ってる間も杏は口を開けて呆けている。

それを俺は喜んでくれていると思えるくらいには、変わったのだとおもう。

「それでも俺の杏を象徴する太陽を大事にしたかったんだ。つつても緑色だし、誕生石じゃないしで、どうも不格好だけどな…」

色々調べた。今まで何も知らないことが必要になったので仕方ないが、一生懸命調べて、やっぱりこれが良いと思っただんだ。

「杏」

「…ええ？」

ようやく我に帰る。呆けていた杏は俺の声に目を向け、同じ高さの目線に驚く。

同じ高さの目線、それは俺が膝をついているから。

人生でこんなことをするようになるとは思わなかった。小町は笑うな。

「右手を出してくれ」

「う、うん」

おずおずと差し出す手。その右手の薬指に指輪を填める。右手にしか填められないことも、酷く不格好だなどと思う。

「に、似合ってる」

最高に、綺麗だ。

「あ、ありがちよ…」

噛んだ。顔が赤いのは噛んだせいかな、それとも。

「今は右手で許してくれ。ばれるわけにもいかんしな。まあ勘ぐられるだろうが誤魔化してくれ」

酷いことを言っているなと思う。それでもそういう関係なのだから仕方ない。

「あ、その、ありがとう……。嬉しいよ」

やつと笑顔になる。やつぱり杏にはその表情が一番似合っている。

その顔を引き出せるのが自分だと思おうと最高に誇らしい。

「え、えへへ。嬉しいね。ま、まあ右手じゃ男避けにはならないのかな？」

そう言いながらも大切そうにその手を抱く。

しかしまだ甘いな。これで終わりじゃないぞ？大事な話じゃないなんて嘘だからな。

「杏」

杏の手を取る。両手でその手を包み、声を絞り出す。

まるで喉に何か詰まったように出にくいのが、それでも。

「え、えつと八幡？」

「結婚しよう」

「…」

無言。

「え、ええええええええ!!」

突然張り上げた叫び声は、町中なら俺が捕まってしまいうレベルだった。

「今すぐには無理だと思う。だからそれはエンゲージリング。約束してほしいんだ」

杏の顔は真っ赤で、肌色が無いんじゃないかと思うほどで。

「俺と、結婚して、ずっと隣にいてくれ」

頑張って絞り出した声に何時までも答えてくれない杏だったが、

「っー!」

その瞳には大量の涙が流れていた。し、しまった。

ま、まさか泣かれるとは。

「す、すまん。嫌だったか? わ、わるい。やっぱり無しに…」

その言葉の続きを言わせてもらえなかった。杏が膝を付いた俺に抱きついてきたからだ。

「八幡、杏と結婚してください」

「あ、ああ。って俺の台詞取るなよ。さっき言ったこと無かったことになるじゃん」

「あはは! 八幡がイタリア人みたいなことするからいけないんだーい!」

失礼な奴め。俺がどんな覚悟で言ったと思ってるんだ。

…まあ、それでも幸せな気持ちになるのだからとつくに俺は杏の物なんだろう。

「ずっと一緒にいてくれるか？」

「うん。一生側にいる。だいすき、はちまん」

これは蛇足で余談だが。

この日の仕事は小さなトークショー。ショッピングモールであったイベントには杏のファンと、足を止めてくれた一般人がいた。

その日彼女を見た客は、ファンは、彼女の最高の笑顔を前に、ただただ言葉を失ったのだと言う。

天使を前に、人間は無力なんだろう。

「ああ。式場も決まってる」

「…え。結婚式なんてしたら一発ではれるよ？」

杏の実家に二人で報告に行くことが決まった。

飛行機で向かうわけだが、杏の両親に顔を会わせるのか…。

そもそも17歳の娘に手を出してるんだけど殺されないかな？俺だったら殺す。

「いや、結婚式なんて立派なもんじゃない。場所を借りて、身内呼んで、誓いの言葉を言うだけだ」

「あーなるほど。それでもばれそうだけど…」

「いや、場所もスタツフもある人の息がかかっている。身内だけでするならばれることはないだろうって言ってたぞ」

「あの番組プロデューサー？確かに相当な大物らしいね」

そう、あの人は大物だ。大御所芸能人でも挨拶を欠かさないほどの。

それが幸運なことに気に入られたので、大いに甘えてしまおうということだ。

まああの人は仕事において持ちつ、持たれつをできていると思うからこれぐらいのお願いは受け入れてくれるだろう。

式に呼ばなきや結婚したことばらすと本気で言われたし。

「籍とかは入れられないから形だけな。それだけでもやっておきたいんだよ」

「うん。そだね。…嬉しいよ」

事務所のソファで話すような内容じゃないかもしれない。

誰かに聞かれたら一発アウトだし。アイドルなら問題はないだろうが、それでもまだ秘密にしておきたい。

「杏の両親の許可が貰えたら、準備を始めるから。でも衣装と日取りと仕事の調整と招待客の選別くらいだ」

本当はもうひとつあるけどまあ杏に話さなくても良いだろう。

「うん。じゃあ頑張つてね八幡。ちゃんと杏をやしなつてねー」

はいはい、敗者はただ従うのみ。

それに不思議と、好きな人をやしなうのは思っていたのと違って、楽しそうだと思つた。

杏の両親は思っていたより俺を歓迎してくれた。

それでも俺を信用していると言うよりかは、杏を信頼していて、娘が選んだ相手なら大丈夫だろうと。

そして最後には娘をよろしくお願ひしますと言われ、俺は深く頭を下げた。

そもそも杏が結婚できるとは思っていなかったらしい。まあ確かに。

杏はあれで人に対して難しいところもあるし、家事もしないだろうしな。

それを受け入れるとは変わり者だねと言われたが、俺からすれば杏みたいな天性の美少女、引く手あまたな気がするが。

ともかく、両親に許可を貰ったので準備を進めている。すでに武内さんには話を通して、これからが本番である、親玉に話をしにいかなければならない。

「失礼します、比企谷です」

中から肯定する声がかきこえ、扉を開ける。

「お疲れさまです、専務。今日は話があつて参りました」

「また下らない話をしにきたのかね？」

相変わらずだな。開口一番から毒を吐かれるとは。

「前の話しも私にとつては大事な話だったので」

「君にとつてそうでも私にとつては下らないということだ。今回もその類いなのだろな。それで」

ある意味ここが本番だ。

杏の両親よりもこの人を説得する方が難題なのだから。

「双葉杏との男女間の付き合いを許可していただけませんか？」

「ほう？君はプロデューサーだったな。アイドルを売るべき人間が、アイドルの価値を下げ、ばれてしまえばアイドル生命が終わるようなことを許可しろと？」

「…はい」

「くだらない。私が想像していた以上に下らん話だったな。話はそれだけか？それなら

もう下がりましたまえ」

ああ、胃が痛い。しかし今さら引くわけがない。

「そもそも問題はばれることです。しかし私はプロデューサーとして普段は接しているので対外的にばれる可能性は少ないです。こうは思いませんか？問題はばれなければ問題にすらならないと」

「問題は問題になり得る可能性があるから問題と言うんだ。その言葉になるほどと言えるのは子供だけだ。根本が解決しない限り常にリスクは付き纏う。可能性は100%になることはない。例えば今このデスクに盗聴機がしかられていたとしたら？その可能性まで考えが至らないから君の言葉は子供の我が儘だと言うんだ」

「…しかし今の時代アイドルが結婚している例もあります。それを考えずに暗黙のルールを馬鹿のように守り続ける意味もないのでは？」

「なぜ暗黙のルールが出来たか想像しろ。それはアイドルを応援するファンの気持ちであり、アイドルがそれに答えるための誠意だ。君たちはそれを理解できていない。そしてばれた場合のわが社のイメージはどうなる？346の落ちたブランドイメージに対して君は責任がとれるのか？」

くっ！正論だけに反論できない。だが引けないんだ。

「責任はとれません。私には背負えないと思います。ですがこのまま引き裂かれ、輝き

を失った太陽を見上げる人がいますか？俺には彼女を輝かせ続けることが出来ます」

「太陽とは見上げるものではない。そこに居るだけで良い。それが陰つていようと私たちに恩恵を与える。今出来ている彼女の成功ブランドがあればそれだけで十分だ」

「太陽が上らなければ？言っておきますが杏は上ることすら拒否するような太陽ですよ？」

「上らなければ月を輝かせる。わが社にはそれができるアイドルがいる。永遠に上らない太陽などない。彼女が姿を見せなければまた新しい太陽が顔を見せるだろう」

ああいえばこう言う。くそ、どうする。

「で、でも、それでも困るのは専務のほうのほうです。大切な稼ぎ頭を失うより、ばれる可能性の少ないリスクに賭けてもいいんじゃないですか？」

「わが社はアイドル部門が全てではない。それならば大きな賭けをわざわざするようなこともない。それで終わりか？」

「そ、それでも！」

引くわけにはいかないんだ。こんな結果をもって帰ったんじや杏の笑顔は曇る。

最悪アイドルやめても良いとか言い出すかもしれない。

それだけはさせるわけにはいかない。杏が自分で手にした世界を、捨てさせるわけにはいかない。

そこにはきらりだっているんだ。結果的にきらりも曇ってしまう。

俺はきらりのプロデューサーでもあるのだ。ならば、引くわけにはいかない！」

「……こそ」

が、何を言えば良いのか。

そもそも向こうが正しいのだ。許されるなんて事はそれこそご都合主義。

結局のところ俺はまだ、学生から成長できていないのかもしれない。

「終わりか。流石に頑張ったな。私は君を買っている。なぜならわが社に利益をもたらしたからだ。……しかし今不利益ももたらそうとしている」

不利益。それは、

「大沼。知っているだろう？君が懇意にしているプロデューサーだよ」

なぜいきなりその人の話を？

「……はあ、まあ」

「この前から話があると言われ、呼び出された。彼の力には我々も世話になっている。そこでこう言われた。比企谷君と双葉さんの関係をばらす準備があると」

「なっ！」

あの人秘密にしてくれるって言ってたぞ。しかも式場からなにまで世話になっているのに今更！

「私は、346を脅すなんて随分と大きく出ましたねと言ってやった。そこで大沼は笑いながらこう言ったよ。二人の式を用意している。それを行う許可さえくれれば黙っておこう、とね。ふざけた男だ」

あのひと……！本当にいい人だ。こうして周りに助けられ続け、それに対して返すことができるのだろうか。

「彼は大手の取引先のようなものだ。それほどの相手の反感を買うくらいならば君の言う小さなリスクを負った方がいいだろう。君はこうして助けられた。今後どうしている？」

「……今以上に努力します。受けた恩を返せるように」

「それでいい。……それと招待客はもう決まっているのか？」

「い、いえ、まだですけど……。身内とこの事務所の人と大沼さんくらいだと思います」

「そうか、なら私にも招待状が来るんだろうな。楽しみにしておこう」
「え」

まじか。この人呼ぶ予定なかったな……。てか来るのかよ。

……凄い嫌なんだが。なんで楽しみにしてるんだよ。

「おひさしぶりですね！今日は私、『幸福の木』社長の清水がお相手させていただきます」
「よろしくお願いします」

てかこのひと社長だったんだね。あの時八幡からちよつと話聞いたけど、八幡もただの社員さんだと思つてたみたいだし。

あんまりそうは見えないかも。

「によわー！杏ちゃん！このドレスかわいいにー！試着してみよー！」
「全部試着してたら身が持たないんだけど…」

とは言つても。

こうしてウエディングドレスが並んでいると壮観だ。

どれもきらきら輝いていてきらりが興奮するのもうなずける。

「それにしても、あのプロデューサーの方がお相手なのですね。失礼ですが、釣り合わないと言つた彼の言葉に納得してしまいました。私もまだまだですね」

「いや、まあ、ばれたらいけないし、八幡も必死だったんじゃないですか？」

それにしても本当に式の準備が進んでいく。

この前は八幡の実家に行つて報告もしたし、式場も押さえてるらしいし、武内プロデューサーは式の日にはアイドルの仕事がなるべくないように死に物狂いで調整してるし。

一応所属アイドルに声はかけたらしい。そうしたら皆参加したいと言って、その日を空けてとアイドル達からお願ひされたみたい。

そろそろ八幡が武内プロデューサーに本気で恨まれそう。

まあ仕方ないね。

でもなんだかんだ言っつてあの人も当日は来るといつていたし、楽しみにはしてくれてるんだと思う。

「あ、そうでした。ドレスについての予算は考えなくても大丈夫ですよ？大沼様が受け持つそうですので」

「ええーふとっばらだねー☆」

「いやいや、それは流石に…」

「なんでも今回は形だけだから御祝儀もとらないですよ？それで大沼様が納得できないので彼に秘密でこっちに領収を回せと」

「どんだけ入れ込んでるのあのひと。」

「本当に八幡のこと好きだね。嫉妬はしないけど。」

「あの人子供いらないから息子のようだと思ってるんじゃないですか？あ！だとしたら双葉さんは娘ですね！」

「それはやだ。感謝はしてるけど。」

「それはそうと、選んじやいませうね！彼を驚かせるようなやつを！」

「いっちばんきらきらしたドレスにしようねー☆」

「うん。ちよつとだるいけど、綺麗なやつ着たいね」

ふふふ。今から八幡の驚く姿が目に見えたいね。

楽しみだなー。

本日は晴天なり。

今日がこれほど晴れたのは普段の行いが良いからだ。だよね。

今日の結婚式は本番じゃない。用意しているのはマリッジリングでもなくエンゲージリングと、杏いわく女避けのリングだけ。ご祝儀もないし、お色直しもなければ食事会もない。

ただ誓い合うだけ。

これからのことを。

ただそうだとすると、それがやりたかった。

これから一緒にいるんだと近い人に教えたくて、そしてこれから公に普通の付き合いが出来ないからこそその式。

そして、俺の一番好きな人が俺のために輝く日。それがどうしても見たかった。

「比企谷君、おめでとうございます」

「ありがとうございます、武内さん」

今は控え室。慣れない色のスーツを身にまとい、緊張の中で時間が過ぎるのを待つていた。

「しかし吃驚しました。このような式場で式を挙げられるとは。これで内密に進められるんですか？」

「今までもあったらしいですよ、こうゆうこと。実績があるなら大丈夫じゃないですかね？それにもしバレルようなことがあっても346と大沼さんがバックアップしてくれるらしいですよ」

至れり尽くせりだな。まあ大沼さんはあれとして、346はばれてしまえば困るわけだから当然と言えば当然か。

「な、なるほど。それにしても似合っていますよ」

スーツに合わせて髪はオールバック。白のスーツだけでも照れ臭いのだが、めかし込むべきだと髪いじられた。

まあ似合っているなら良いか。

「そうっすか？ありがとうございます。あ、それと渋谷と遊園地いきました？」

「…ええまあ。ペアケケツトしかないので二人でと言われ仕方無く。しかしやはり比企谷君だったのですね」

「余計なことつすけど渋谷にブーケ作ってもらう為に取り引しました。嫌じゃないでしょ？」

「まあそうですけど…」

「これなら脈ありかもな。頑張れ渋谷。」

「そろそろ私は行きますね。どうやら誰か来たようですので」

言いながら部屋を出ていく。

そして入れ違いに小町と両親が入ってきた。

「お兄ちゃん、おめでとう！」

「おう。ありがとな小町」

小町は飛び付くように抱きついてきた。俺も嬉しくなつて頭を撫でる。

「小町はね、この日が来ることを夢に見てたよ。お兄ちゃんが幸せを宣言する日。まあ正直来るとは思つてなかったけどねー」

「おおう。酷いな妹よ。」

「お兄ちゃん、小町はね、お兄ちゃんが大好き。だから幸せになつてね？」

「小町…。ああ、でもな、小町が妹だからずっと幸せだったぞ」

その言葉を聞いて小町はさらに強く抱きついてくる。本当に可愛い妹だ。

「八幡」

「親父……」

スーツを身にまとった親父はどこか神妙な顔をしていて、

「これからお前は彼女達をやしなう立場になる。達つていうのは理解できるだろ？」

それは将来の話。二人で生きていければ家族が増えるかもしれない。

「ああ」

「自分の大切な人を守れ。自分を守れ。そしていつまでも愛し続けろよ」

「……恥ずかしいこと言うなよ親父。わかっているから」

大きくなつたななんていいながら肩を叩いてくる。

今更親とこんな空気になるのは恥ずかしい。でもそんなのも悪くないなんて思いな

がら。

「ひきがやー！」

バン！と音をたて扉が開き、そこにいたのは元担任だった。

「ど、どうしたんすか、先生」

「結婚おめでとう！私は嬉しいぞ！けどなあ！ついに教え子まで結婚しやがったあ！」

先生泣いてるじゃないですか。嬉し涙つすか？ちよつと判断できないんですけど。

「比企谷、私は本当に嬉しいんだ。確かに普通とは違う形かもしれない。でも捨くれた君らしい式だと思う。よかったな、比企谷」

「はい、ありがとうございます。先生のお陰でもありますから、特に感謝してます」

そこまで話してようやく親父が目に入ったようで、挨拶をしている。

そんな風景を見ながら自然と口が緩んだ気がした。

「わー！はっちゃんカッコいいじゃん！」

「ほんとだー！はっちゃんカッコいい！」

みりあと莉嘉が空気も読まずに声をあげる。

もうすでに全員が椅子に座っていて、新婦がヴァージンロードを歩いてくるのを今か今かとまっている。周りのアイドルが止めているが正式な場でもないし、それが二人らしいのでむしろ良いとおもう。

そして後方、ほんとに来てるじゃん。マジで来るとは思わなかった。

あんまり険しい顔しないで欲しいんですけど。ただでさえ緊張しているのに更に緊張が高まる…。

まあ今日忙しいアイドルが参列できたのはあの専務も力を貸してくれていることなので仕方ないとする。

そして、ついに光のなかに人影が現れる。

逆光でもないのにこんなにも眩しく見えるのか。まるでステージの上で輝いているようで、双葉杏を象徴するようだった。

そして初めて見る彼女のドレス姿。

奇抜なものは一切無く、シンプルに白を基調とし、そして、綺麗だった。

普段誉める言葉で天使等と言うことがあったが、今日の杏はまさにそれだった。花束を持つて、父親の手を取り、こちらへ歩いてくる天使。

この子が自分を好いてくれるなどまるで妄想のように感じてしまう。

参列席からもきれいな……とか、え？とか聞こえてくる。普段の杏しか知らないならしやうがないと思う。

俺も気持ちの整理が出来ないから。

そうして俺の前へたどり着く。

「八幡君、娘をよろしく」

「っ……はい、もちろん」

お義父さんからバトンタッチされ、杏の手をとる。

杏の顔はベールのせいでもく見えませんが、赤くなっていると思う。

ああ、きっと俺もそうなるんだろうな。

そうして手を取り歩いていく。

そして神父の前についた二人は横へ並ぶ。

「汝、比企谷八幡。あなたはこの女性を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も、良い時も悪い時も愛し合い敬いながさめ助けて、変わることなく愛することを誓いますか」

「誓います」

「汝、双葉杏。あなたはこの男性を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も、良い時も悪い時も愛し合い敬いながさめ助けて、変わることなく愛することを誓いますか」

「誓います」

「あなた方は自分自身をお互いに捧げますか？」

「はい、捧げます」

「それでは指輪の交換を」

神父が差し出した箱には歪なペアリングひとつはシルバーのシンプルな、しかし高級感のある指輪。もうひとつはペリドットを使ったシルバーのリング。

二つは結婚指輪というには違うだろうが、それでも今日の日にはピッタリのものだった。

俺は杏の指へ指輪を填める。もちろん左手薬指に。

今日くらいはいいだろう。ここにはばれて困る人間もない。

そして杏が俺の指へ指輪を填める。

「それでは誓いのキスを」

ここで緊張がマックスになった。震える手でペールを上げる。

そこに見えるのは、真つ赤になった杏の顔だった。

そして二人が固まる。

周りもざわざわとしてきた。あれ？もしかして。そんな声が聞こえる。

そうだよ悪いか。キスなんてしたことねえよ！

ふと目線を横に逸らした。そこに見えたのはきらりで、とても優しい顔をしていた。

まるで自分の子供を見ているようだな。近くに居る親父は泣いてるし。

「八幡」

杏に目を合わせる。

「だいすき」

何て顔で何てことを言うんだ。そんなことを言われれば、もう緊張なんて感じないだろう。

「俺もだ。一生側にいてくれ」

そして口を合わせる。

同時に上がる歓声。悲鳴も聞こえる。

むちやくちやだな。

それでも、口を離して目を合わせた杏は幸せそうな顔をしていた。

俺は単純なんだろうなと思う。

それだけで幸せになるのだから。

これで日常が終わる事はない。

今からは一緒に歩くことが日常になる。

だから歩いていこうと思う。

いつまでも、この小さな太陽の前に膝を付き、見上げながら。自分らしくないとは思いつつも、体は勝手に動くのだ。

俺の灰被り姫はぐうたらで、決して舞踏会に自発的に来るような子じゃない。だからいつまでも迎えに行く。

手を取り、共に光輝く城へ。

番外

俺の宝物

ある日の昼下がり。

今日は俺にとっての最高の日だった。

全休。ああ、なんて甘美な響きだろう。

ここ最近全休なんてものは存在しなかった。いや、そもそも346のプロデューサーにそのような権限があるのだろうか？一度武内さんにも聞いたことがある。

全休？ああ、午前や午後だけでも仕事が無い日ですよ？全休と言うには違う気がします。月に二、三日ありますよ？

と返ってきた。

武内さん：貴方洗脳されますよ…。それは半休です…。

そんなこんなで、もはや俺たちにとっては幻想と化している全休を全力で休むと決めた。そう休むのだ。

「おはよう、パパ。…てかびつくりしたよ。朝からパパがいるなんて」

「おう、おはよ。だがおはようなんて時間でもないぞ。もうすぐ昼になるだろ。休みだからって怠けてるな」

「む。それはパパに言われたくない。休みだからってソファで横になってるし。中年太りしちゃうよ?」

「あー、仕事で動いているからだいじよぶだろ。それなりに筋肉も付いてるぞ、ほら」

「わーお。カッチカチ…とまではいかないんだね。うーん、残念感。でも細マッチョなのは娘的にポイント高いよ?」

「おい、叔母さんの真似は止めとけ。ただでさえ可愛いんだからこれ以上可愛い要素が入ると悪い虫が付く」

「えへへー。パパに可愛いって言われるのは嬉しい。ねえ可愛い? 私可愛い?」

「ああ、もう超可愛い。俺の娘と思えんな。心から杏に似て良かったと思うぞ」

「じゃあ結婚してくれる?」

「…娘とは無理だろ」

「むー。つまんない。娘的に超ポイント低い」

さて。今日、杏はきらりと外出している。朝から出るようになるとは月日が経つと人

間は成長するらしい。

というのも、今一緒のソファで寛いでいる可愛い娘も、もう中学生だ。この前までオムツを変えていたような気がするが時間が経つのは速いと、社会人になつて思う。

あー、四十代が見えてきた。やばい、なんか精神的に来るものがある。

「中学生生活はどうだ？ いじめられたりしてないか？」

「ん、へーき。パパとママの娘だからね。なんでも完璧だよ？」

「…まあ俺の目を受け継いでないからな。杏に良く似てるし良かったな」

「うーん、娘的にはパパの目と同じが良かったかも」

「なんでだよ」

「だってパパみたいな目って他に居ないから、二人だけの特別って感じて憧れるんだよ？ すつこい残念…」

「まあ確かに見たことはないが…この目だと友達できないかもしれないぞ？」

「パパとの絆の方が大事。それに目が腐つてもきつと人気者になれると思うし」

「…まあきつと可愛いだろうな。うちの娘は何しても可愛いからな」

「えへへー」

全く可愛い奴め。

しかしこの娘は見れば見るほどに杏と瓜二つだ。同じようにだらけるし、身長もそん

なに変わらない。唯一の違いがあるとすれば口が達者なのと、髪の毛がピョンと跳ねていて、俺と同じくセツトしようとしても直らないことか。…そしてついぞ杏は成長することはなかった。杏は永遠なり。

それに関して杏は色々と実害を被っている。

例えば授業参観。当たり前の話だがこれには親が見に行くことになっている。その際俺はどうしても仕事で行けない日があつたりするのだが、その時は杏が一人でいくことになる。そうして各子供の親は教室の後ろへ並び、そして親は子供よりもまず杏を見てしまう。

勿論俺も授業参観へ行つたことがある。その時の注目度たるや俺は少し逃げたくなつたほどだ。何しろ授業を受けている小学生と、身長が変わらないどころか低かつたりする杏がスーツを着ているのだ。

正直色々ギリギリだと思う。しかしそれを直接言つたら、

杏はお母さんだよ？ちゃんとした格好じゃないとダメでしょ。

いや、まあそうだけど。見た目のアンバランスさはどうしようもないしな。

これ以上は何も言うまい。

そしてこの事について娘に聞いてみたが、

うん？ああ、嬉しいよ？当たり前じゃん。恥ずかしくないよ？だって自慢のママだ

し。それにうちの親が一番格好良くて、可愛いと思うんだ。
このあとめちやくちやなでなでした。

「ねーパパ、今日休みなんですよ？デート行こうよー」

「ん、いいぞ。そのつもりだったしな」

「やった！パパと心が通じたね！」

「まあ家族だからな。繋がっているのはあたりまえだ」

「むー。それ以上の関係もとむー」

「だが断る」

娘が懐いてくれるのは嬉しい。世間一般においてはこの年頃の娘に、パパと洗濯物別にしてって言ったじゃん！等と言われてしまうらしいのだが、うちの娘はそんなことはなかった。むしろファザコン。

俺の身内愛、てか小町愛が遺伝しちやったかな？しようがないよね。

もう中学生だというのに一緒に風呂入ろうとしてくるし。

その度に杏に睨まれるのだから勘弁してほしい。いや、嬉しいけど。

「はあ、まあいいや。それでどうする？レンタルビデオを宅配してもらって、家で見ながらいちやいちやすする？」

「…人の事言えんがお前も相当だよな。まあ親の遺伝子を完全に継承したせいだけど」
「だつてー外にでたくなーい」

「気持ちわかるが友達と遊ぶときはどうなんだ？」

「んー、あんまり遊んでないかも。どつちかというときらりちゃんとか、莉嘉ちゃんとか
みりあちゃんとかと遊んでる」

「あーなるほど。…あいつらに余計なこと吹き込まれるなよ？」

「そんなこと言つたら可哀想だよー。皆と遊ぶの楽しいよ？」

「…まあ楽しいならいいが。それでどうする？家でごろごろするより外に出た方が楽し
いんじゃないか？」

「別に外に出なくても良いよ？むしろ出たくないまであるし」

「遠慮しなくていいぞ？ごく希にしか休みなんて取れないんだから」

「普段から甘えてるからいいの。むしろ周りの目を気にせずいちやいちゃ出来る家が一
番」

はあ、全く誰に似たのか。両親二人ですよ、知ってる。

というかファザゴン過ぎるぞ娘よ。彼氏出来るか不安になる。

いや、もし彼氏を家につれてきたら二秒で追い出すけども。

認めません。お父さんは絶対に認めませんからね！

…お義父さんもこんな気持ちだったのかなあ…。

「それで、なんのDVDにしたんだ？」

「プリキ〇ア」

「お前…俺の子なんだなあ…」

「当たり前だよ、何言ってるの？」

「いや、しみじみとな…。実感するなあと」

てかまさかこんなにもこのアニメが続くとは思わなかったな。もう何年目だ？

だがどんどん方向性に迷いが出てきているのは感じる。続きすぎてオールスターじゃなくなつたし。全部出してたら二時間なんて自己紹介で終わるぞ。

そして愛娘は俺の膝の上。

二人でマツ缶片手にゆっくりとした時間を過ごす。心が洗われるようだ。

仕事の事を忘れられるなんて最高だな。そして娘と過ごす時間も。

仮にこれが一人の時間だとしたら、ここまで良いものにはならなかったかもしれない。だとしたら俺はやっぱりポッチを卒業したんだろうな。娘と杏に俺はポッチだ何て言えば二人は悲しむだろうし。

時々頭を胸にグリグリとしてくる。わかつてる。

つまり撫でろと言いたいのだ。まったく、杏と同じで天使のような子だ。

撫でてやる。

顔は見えないが幸せそうな顔をしてるのだろう。なぜわかるのか？

それはきつと俺も幸せな顔をしているのがわかってしまうからだ。

ああ、本当にこの気持ちはどうしようもない。

どうしようもないが、どうしようとも思わない。ずっと続けば良いと思う。

「パパ」

「どした」

「だいすきー」

「ああ」

やはり俺の人生は間違っていない。

輝きの向こうへ

本物を願った。

「ここにきめる?」

「まあ値段も手頃だしな。今まで使うことも少なかった貯金もあるし、なんとかなると思うぞ」

「やっぱり杏もお金だそうか?」

「いい。それはもしものためにとつとけ」

「…別れたときとか言ったら許さないからね」

「言うわけ無いだろ…」

現在新居を決めている。今までは同棲が出来なかった為、別々の家で暮らしていたが、それも後数日後には大丈夫になる。

そして新居は結構でかい。こちとらトップアイドルと敏腕(?)プロデューサーなので、それ相応の対価を貰っている。敏腕というよりただのワーカーホリックでした。

まあそれならと、恐らく人生で一番でかい買い物をした。

しかしいまだに庶民感覚が抜けないため、どうにも不安ではある。年単位のローンは初めてだし。

「こつちを子供部屋にしようよ。でそつちが杏達の部屋。別々の部屋は嫌だからね」

「ああ、わかつてる。でもそうすると部屋が余るぞ?」

「…何人子供ほしい?」

「あー…二人は欲しいな。兄妹ならもつと良い」

「そつか。杏は男の子が欲しいな。でも目が腐つてたら笑つちやうかも」

「そうはなつて欲しくないな。出来れば杏に似ていた方が良く決まつてる」

「ええーそうかな? 杏は八幡似の男の子も良いな」

「俺に似ちやつたら可哀想だろ」

「それでもないよ。きつと人の痛みが解る優しい男の子になるし、カツコいいと思う」

それは多分に主観が入つてるぞ。自分が良い青春を送れなかつただけに自分の息子と同じ思いをさせたくないんだが。そうして考えると、杏の遺伝子を受け継いだ娘なんて最強だろ。もはや全てが霞むまでである。…杏に似た息子も見てみたいな。

でも子供はまだ先の話だと思ふ。

今はまだ杏はアイドルだし、計画性も無しに子供を作るなんてそれこそ専務に殺され

る。なによりまだそこまでしてないし…。べ、別にびびってるわけじゃないよ？大事に思ってるだけだし。言い訳ですよねー。

まあつまり部屋が埋まるくらい子供が居ても良いんじゃないかってことか。

子供か。

今までの人生の中でそこまで考えたこともなかった。子供だったときは自分は人の輪の中に入ることが出来ず、いつしか諦め、そして一人で生きる術を身に付けた。

他人を信用しない。期待しない。俺に向ける笑顔があるならば、それは誰にでも向けられている笑顔であり、俺が特別であることはない。

そうして輪の外から他人を眺める。俺がやるべき事を実行するために考え、その為に俺を大切に思う人間が傷つく事を見て見ぬ振りをした。

俺が苛められたとき、小町は悲しんでいた。

俺が学校一の嫌われ者になったとき、小町は泣いた。

それを見て俺は仕方がないと思った。そんなはずはないのに。

自己犠牲のつもりはなかった。自分に出来ることをしただけ。自分にそれが出来る、するべきだと思つたから結果的に自分を犠牲にしてきた。そうとは気づかずに。

小学生の時、苛められていた子を助けて自分が標的になった時も、高校の時、文化祭で女子を泣かせた時も。

そして俺はプロデューサーになった。一人じゃなくなった俺に失敗は許されなかった。

その時は気づいていなかったが、愛する杏の為にと奔走する日々。勿論最初はうまくいかなかった。自分で仕事を探すが、新人の何のつてもない人間には厳しい世界だったのだ。

改めて思った。社会はボツチに厳しいんだなと。

そうして手詰まりになった時に先輩を頼ることにした。他人に期待しない。

そう思いながら生きてきた人間が、少しは変わった瞬間だと思う。

「それでは双葉杏の会見を始めさせていただきます」

緊張の瞬間が始まった。とは言うが、それは世間だけであり、俺は少しも緊張していなかった。だって杏だし。

今日は袖から眺めるだけなので俺はなにもしない。必要ないとも言う。：はちまん
いらぬいこじやないよね？

「まずは世間をお騒がせしたことをお詫びします。私、双葉杏は皆さんがご存じの通り
アイドルを引退します」

大量のフラッシュが光る。そして記者の攻撃が始まる。

「双葉さんはトップアイドルだと思うのですが、今突然引退する理由はなんなのでしょうか？」

「以前から決めてました。その時が来たらやめよう」と

「噂では恋人がいるそうですね？ファンの方を裏切ったとは思いませんか？」

「…そうだね。杏を応援してくれたファンを裏切ったんだと思うよ」

杏が言葉を崩せば記者はここだと目を光らせる。

記者は知らないからな、彼女の凄さを。

「認めるんですね!?恋人が出来たからファンを捨てて逃げるんですね!？」

「…その人は杏のファン一号だよ。杏の為に全てを捧げてくれる人。だから杏も全てを捧げようと思ったんだ。それに杏のファンなら皆知ってるよ?杏は働きたくないの」

なぜこんなにも彼女は強いのか。俺にはその理由がわかる。俺がいるからだ。決して自惚れている訳じゃない。

何故なら俺も杏の為なら強くなれる。

「で、では自分のファンなら、裏切ることを認めて受け入れると?少し勝手じゃないですか?」

「勝手だとは思うんだよ?だけどさ…」

そこで一旦言葉を切り、顔を伏せる。泣くのかと思いきやシャッターチャンス逃すまい

とカメラマンは身構える。

「夢が叶うんだー」

そう言った彼女の笑顔に会場は呑まれた。シャツターを押すべき指は動かず、バツシ
ング記事を書くべき手も動くことはない。が、なんとか正気に戻った一人のシャツター
を皮切りに次々とフラッシュが点った。

そこからは想像通りだ。基本売れる記事を書くのが仕事な人間たちである。ならば
幸せを祝う記事に変更するのは当然と言える。

質問は下世話な方向へと進み始める。まあ悪い記事じゃないなら問題ないだろ。も
う心配要らない。杏は強い。俺なんかよりもよっぽど。

だから負けじと強くなるんだ。だって俺は、杏をやしなうのだから。

結局のところ、ボツチだからとそんな気持ちでいたらこの仕事は出来なかった。一人
で成果を出せる仕事じゃないからな。

最初から杏に求めていたのはずっと願っていたもの。

本物が欲しい。

一目惚れとかいうものを馬鹿にする人間だったのに一目惚れをし、本物なんて無いと
決めつけていたくせに本物を願った。

諦めきれてなかったんだろう。手に入らないから馬鹿にし、怖かったから一步を踏み出せなかった。踏み出さなきゃ本物なんて手に入らないのに。

俺の青春は間違っていた。

高校の時犬を助けた女の子は俺に近付いてくれた。だがそれを信用せず、突き放したのは自分自身。それでいて本物なんて笑える話だ。

そして俺はアイドルに間違っているよ、と言ってもらえた。実際に言われた訳じゃないが、気づかせてもらえた。

そうして踏み出した一步は誰のためでもない、俺の為になった。

「報告しに来ました」

「ああ、聞こう」

「杏の引退ライブは滞りなく進んでいます。会見以後のファンの意見も大多数が杏を応援するものだったので心配は無いと思います」

「そうか」

「それで、その、大沼さんが引退ライブの一部を地上波で放送したいと言っていますがどうしますか？」

「…奴の私利私欲にも困ったものだな。私の方で話を進めておく」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「…とところで比企谷」

「?なんですか、専務」

「子供はどうするんだ?」

「は?」

「子供は、どうするんだ、と聞いている」

「い、いえ、そによ、欲しい?ですけど?」

「ふむ、そうか。…太陽の子はどんな輝きを持って生まれるんだろうな」

「は、はあ。まあそれは、どうですかね?」

「男の子がいいな。太陽の遺伝子が受け継がれた男の子は他に類を見ない存在へとなるだろう」

「せ、専務?」

「だが女の子も良い。月の遺伝子を持った子はアイドル界に新しい旋風を巻き起こすだろう」

「つ、月?」

「知らないのか?我々の間では双葉杏を太陽、君を月と呼んでいる。一方が空へ上がればもう一方は裏で支える。お互いが必要としている存在だからな」

「そうなんですか？初めて聞いたんですけど…」

「誰もが君たちをそう表現するほどに、その関係は良いものだと言っている」

「ありがとう、ごございます？今日は誉めすぎじゃないですか？」

「…子供が出来たら御家族の次に報告しろ。いいな？」

「ええ…。いえ、はい、わかりました…」

願いに際限はない。今ある願いが叶えば次に新しく願う。際限があれば七夕なんて風習にはならないしな。

じゃあ本物を手に入れた俺は何を願うのか。際限無く願うことを間違っているとは言うつもりもないが、欲張っているとは思う。

そう、欲張っている。

本物を手に入れたくせに新しく願う。

いつまでもあの笑顔を見ていられるようにと。

「杏ちゃん」

声を掛けられ私はそつちへ顔を向ける。

「どしたの？きこり」

そこにはお揃いの衣装を着たきらりが立っていた。

「あのね、きらりはやっぱりさみしいなーって思っちゃう」

「…うん。ごめんね」

きらりは本当に寂しそうに顔を伏せる。

「今日が本当に最後、なんだねー…」

「うん…」

引退ライブ。346のアイドル総出で送り出してくれる舞台。正直私には勿体無い気もするけど、皆も喜んで出てくれるって言うからやっぱり嬉しい。

「杏ちゃん、今までありがとう」

「きらり…」

「きらりはねー、杏ちゃんと一緒だったから、ずっと楽しかったよ？毎日がきらきら輝いてたー！」

「うん、杏もだよ」

「杏ちゃんが幸せならきらりも幸せ。ね？みーんなではぴはぴしようね！」

「うん！」

そうしてきらりは歩き出す。今から二人で立つ舞台へ。

その背中へ私は声を掛ける。

「きらりー！」

今は泣かない。どんなに嬉しくても。だって最後の舞台は笑顔で迎えなきゃ。きらりが、八幡が好きになってくれた笑顔で。

「んゆ？」

「杏はさ、きらりがいなきゃアイドル辞めてた。だから杏の今は全部！きらりのおかげ！きらり、ありがとう！」

「っ！うん！」

泣かない。泣かない。でも終わったら泣いても良いよね？

「だから最後まで輝こう！杏達はアイドルなんだから！」

「うん！それじゃーいっくよー？」

「行こう！輝くステージへ！」

八幡はなにも言わずに見ていてくれる。

私の世界を。

きつと笑顔で帰ってくるから。最後まで笑顔でいるから。

だから、

終わったら八幡の胸で一杯泣くね？

小さな空の大きな太陽

眩しい。

真つ暗な部屋でただ1つの光源が私を照らす。

光源の中の妖精は多くの歓声に包まれて輝き続ける。

：ああ、なんて遠い世界だろうか。

妖精は多くの人間を魅了し、その姿は天使にも見える。

歓声は嬌声にも聞こえ、ただ叫んでいるようにも聞こえる。

ただその人達は乱れる事なくその妖精に声を上げ続ける。

届け。届け。

その想いは様々だけど、それでもその声が、動きが乱れることはない。

そこに集まった人達は、一心に妖精へと恋焦がれるのだ。

届け。届け。

その妖精はステージの上で歌い踊る。

眩しい。

どうしようもなく届くのだ。観客の純粹な想いが。

言葉にしていけないのに、何を届けたいのか口にしていけないのに。届け。届け。

届くのだ。純粋なその想いたちが。

「…」

私が手に出来ない思い。それを彼女は集めている。

追いつけない。遠い。

私はこの妖精に心を奪われる。

だからこそ思うのだ。

彼女、双葉杏には、

「みんな！今まで応援してくれてありがとう！最後だから！杏も全力で行くよー！」

私のお母さん、比企谷杏には敵わないのだと思いきらされる。

アイドルである私が、心を奪うべき私が、心を奪われているのだから。

「…嫌い」

私はソファに身を委ね、クッションを抱きながら愚痴った。

「は？何言ってるのお前」

そして腐った目でこちらを見ながら不思議そうに私を見る人が1人。

「ママが嫌い」

「…杏が歌う歌は？」

「好き」

「杏と一緒に買い物は？」

「好き」

「杏に抱かれながら寝るのは？」

「…大好き」

「病気になった時作ってくれたお粥は？」

「大好き」

「大好きじゃねえか…」

「ぬあー！違うの！」

パパは誘導尋問が上手い。私はすぐに丸め込まれてしまう。

私がちよろい訳じゃない、決して。

「嫌いなもの！」

「杏と一緒にごろごろしながら飲むコーラは？」

「大好き！」

「何が違うんだよ…」

「ぬあー！ー！パパの馬鹿！」

「ばかばかばか！乙女心がわかってない！内心でそう愚痴りながら私はクッションをパパに投げた。」

「パパは難なく私のクッションをキャッチし、それを私に返してから頭を撫でてくれた。」

「ふにゃー」

「…って違うの！」

「なんだ、そろそろ反抗期か？パパ悲しくなっちゃうぞ」

「パパに反抗なんてしないもん！」

「だから何があつたんだよ。お前がママを嫌いになるわけないだろう？」

「それはそうだけど。パパもママも大好き。だって世界一素敵だし、私の理想の女の子で、私の理想の男の人なのだ。」

「ママのように素敵になりたいと思うし、パパの様な結婚相手が欲しい。」

「というかパパが欲しい！」

「なんだただのファザコンかよ…」

「ちーがーうー！」

「そう言うことが言いたいんじゃないもん！」

本当にパパってば…愛おしいんだから。

「ママみたいになれば、パパに愛されるのかなーって」

「いまでも愛してるけど」

だーかーらー、そう言うんじゃ無いんだってば。

「え？なに、嫁の前で浮気宣言？八幡も大胆になったねー」

「杏まで馬鹿なこと言うなよ…女の子として杏を世界で一番愛してるよ」

「それだよ！」

「何言ってるの、お前」

私が欲しい言葉…なんでそれを言ってくれないかな！

「ふふん、娘よ、今の言葉は私のものだ」

ママが無い胸を張り、身長も伸びなかつたくせに、大きく見えるドヤ顔で私を煽る。

ぬー！ママはずっこい！しかも可愛い！

「ママやつぱり嫌い！」

「とりあえずお前から仲良くしろよ…」

どうあがいても勝てない。

私が物心ついた頃に感じた一番大きな感情こそがそれだった。高い壁。壁というにもまだ足りない。

そう、まさにベルリンの壁のよう。：いつか崩れることを祈っているのだ。

私が願うのは、比企谷八幡の心を私のものにしたいたいということ。

娘というのは理想の男性を父親に重ねるらしい。

そのせいなのかな？うーむ、周りの人はいつかその想いを忘れて他の男性を好きになるという。

はっ。私は鼻で笑った。

私がパパ以外を好きになる？あり得ない。ちゃんちゃらおかしい。

「フアザゴンでもいいもーん」

結果、私は開き直った。

でもどうやったら、パパに振り向いてもらえるのかなー？

ママの後を追ってアイドルにもなった。

まだママほどじゃ無いけど、それでもそこそこ有名になりつつあると思う。

勿論、ママの子供だつていうのは内緒だ。二世つていう肩書きが嫌いなだけけど。

妖精の再来と言われている私はステージの上で輝いているはずだ。

それでも、

「足りないんだよねー…」

私のお気に入りのステージのライブを見るたびに思う。

まだあの妖精に勝っていかないんだと。

どうしてだろう。

言い訳に聞こえるかもしれないが私は負けを認めている。

だってあれを見るたびに私は心を奪われてしまうから。

あのラストステージは汚いと思う。あの時もママは世界の誰よりも輝いていた。

世界の全てが霞んで見えるほどに、あの時のママは世界の全てを虜にしていた。正直
直接見れなかった事がとても悔しいと思う。

アイドルファンの中でもあのラストライブは伝説になっっている。

あのライブの限定版が出た時、用意した数は予約開始から速攻で売り切れてしまい、
すぐに追加で大量に用意したにもかかわらず、それすらも予約で売り切れたという伝説
も残した。

要するに何もかもが伝説に残った。

あの時はママもそして一緒に最後を飾ったきらりさんも、最高に輝いていた。

これが結婚会見をした後のアイドルのライブなのかと疑うほどに、会場は全てを飲み
込むほどの熱を生み出した。

間違いなく、あの時あの瞬間、世界で一番輝いていたのは私のママだった。

その美しさを目にすれば私は勝てないと思うのも無理はないと思う。

はー。それでも勝ちたいと思うのはパパの気持ちがこっちに向くかもという私の淡い希望からだ。

パパはママに一目惚れしたらしい。

その輝きに心を奪われたのだ。

だからこそ、私が取れる手段はママ以上に輝く事！

「と、思うんですけど、どうでしょう？」

「君はもう16歳だろう？いい加減に現実を見たほうがいいと思うが」

むう…大人はみんなこう言うのだ。

「お姉様、私はパパの心が欲しいんです、お姉様はパパの上司ですよ？ママ以上に輝く方法を教えてください！」

「私は確かに八幡の上司ではある。が、奴のプロデュース力は私以上だろう。事実、奴が我が社に在来している間は陰る事はない。月として輝く彼が、いかなる夜であろうと我々を照らしているからだ」

「むう…だってパパの力を借りるのは違うし…」

「それに君はもう十分に輝いている。杏の時のように、君のファンは君を太陽のように、

そこにある事が当たり前だと思い始めているよ。みんな君を見上げるようになってい
る」

「お姉様は私に甘いから。見上げるのはファンだけ。ママの時はみんなが見上げてた」

346プロのトップのくせに私に対してとても甘いお姉様。

因みにお姉様呼びは気がついたらそう呼んでた。恐らく小さい頃からそう呼ぶよう
に言われてたと思う。

「君は何も見えていないよ。太陽も上だけしか見ていないのか？それとも君から見る景
色は蜃気楼のように見えない何かを見続けているのか。どちらにせよ一度は月に夜を
譲り、そして暗くなった世界でその明かりが照らすものを見たまえ。世界はそうすると
違うものに見えるくる」

うーん…？

「一度八幡に相談してみなさい。君が見ていないものを、彼はきつと見ている」

「つて、お姉様に言われた」

「美城社長、まだポエマーなのか…」

治らないもんだなど、そう思いながらも、まあそりやそうかと自分で納得して取り敢
えずは考えるのを辞めた。

しかし、ちよつと悩むな。

「お前は自分のステージでファンのみんなをどう感じてる？」

「うーん、まだまだ輝きが足りない？ ママの時のようなキラキラしてるみたいなの、鬼気迫るみたいなの…そういうのが無いと思う」

これは、うーん…。

「…確かに、お前はまだまだだ。何も理解できていない」

「…パパに言われるとへこむな。事実でも。今の娘的にポイント低いよ？」

「俺は今アイドルとして話を聞いてるんだろ。娘ポイントは変動するな」

ちよつと凹んじゃうでしょうが。

「まあいい、ちよつとこれでも見てみる」

そうして見せたのは娘のライブ映像。こいつはもう既にソロライブが出来るほどに有名なアイドルになっている。

これも血のおかげか、はたまた娘の努力のおかげなのか、それについては親バカが発動しそうなのであまり言及するのは控えておく。

やっぱり杏の子はとても可愛く育った。親から見ても、絶世の美少女だと思う。

杏と容姿がとても似ているため、杏の子供だと隠していても某掲示板ですぐに看破されていたが。まああくまで事実を認めていないので噂レベルではあるが。

こいつに足りないものはわかる。
杏にあつて、こいつにないもの。

それを自分のライブを見ることでは気づけないとは思う、が、それでも一回見ておいたほうがいい。

俺が杏の何に溺れ、そしてそれをどうやってステージの上で輝かせたのかを。

見終わつた。

何とも言えない。だって私のライブだし。

この時の熱も、何もかもを覚えてる。適当にしたことなんて無いんだし。

「……これが？」

「お前は何の為に輝くのか」

「え？」

「何の為に、輝くのか。お前は輝きを持っている。だが今は方向性もなく、目的もないままに輝いているだけで、それ以上の魅力がない。だから誘蛾灯のように人は集まるが、お前が求めるような熱を感じる事はない」

そうして、私は最愛の人に、こう言われたのだった。

「お前は、アイドルとして、輝いていない」

私は部屋で一人泣いていた。

パパに言われた事がショックすぎて私は言葉を失い、そして泣き崩れた。何の為に輝くのか。

そんな事を言われた。

私はいつだってパパを想い、そして大好きなママを追い越したくてアイドルを続けた。

その結果、ある程度は認められたと思ってるし、事実ファンもついている。それでも、パパから見れば私はアイドルとして輝いていないと言う。

私もどこかそう思っていてそれで納得出来ないのだと。

「うう…：ひつく…：」

じゃあどうして教えてくれないの？

パパに突き放された様に感じて、私の心は嵐の様だった。

「は…るよ」

そこにいたのは、

「八幡に酷いこと言われたってね。ママが話聞くよー？」

最愛の妖精だった。

「ままあー……！」

上手く話せたかはわからないが、嗚咽の様に、私はママに気持ちを吐き出した。「何の為に輝く、かー。確かに難しいね」

私とママはソファへ座り私はママに抱きついて離れなかった。

「それはアイドルにとつてとても大事なことではあるんだよね」

ママは優しく話しかけてくれた。

「お金のためでもある、自分の為でもある。本当に色々だと思う」

お金の為、自分の為？ そんな事で輝けるの？

「輝ける。それでも輝いてるんだよ。輝きなんて人それぞれだしねー」

人が求める輝きなんて、人それぞれ。ママはそう言った。

「だから貴女も何を持って、何を求めて輝くのかを見つけないといけないの」

何を、求めて……？

「そう。流石に杏と八幡の子だからね、それが無くてもアイドルとして成功した。でも一番の高みに行くにはそれが足りないよねー」

一番の、高み……。

「ママは……」

「ん？」

「ママは最後のライブの時、パパの為に輝いたの？」

「違うよ」

「え？」

私は酷く驚いた。ママがあそこまで全ての人を熱狂させたあの時、そこには最愛の人に対する思いがあったからだと思っていた。

「全然なかったわけじゃないけどね。それでも一番の想いは違ったんだよ」

あの時ママは、

「何を思っていたの？」

「感謝」

酷く、シンプルな答えだった。

「杏はファンを裏切ってアイドルを引退する事を決めた。それでも会社は杏に引退ライブを用意してくれた。あの時は焦ったよー、だって結婚して引退するアイドルを応援するって人がいると思う？」

それはそうだ。アイドルでそんな事、タブーもいとこだ。

「それでも八幡が企画して、会社がおーけーしてくれた。きつと最後のライブにファンは集まり、みんなが熱狂するライブが杏には出来るからって」

それは、酷く無責任とも言えるのじゃないだろうか？

「信頼してくれただよ。杏の今までと、杏のアイドルとしての輝きを」
行ってこい。

「そして杏は最後は感謝を持ってステージに立った。ファンに、仲間に、きらりに、八幡に。だから、私が何を持って輝くのかと言われたら、」

ママはステージの上にいる時とは違う笑顔で、

「杏をささえてくれる人への感謝、かな？」

杏が輝いていられたのは、身近にいたきらりや八幡のおかげだから。

そう言ったママは、なるほど。

あの妖精の姿そのものだった。

「…答えは見つかったか？」

ステージの脇、そこで担当でもないのに。パパは私の様子を見にきてくれた。

…何だかんだ私は愛されてるんだよねー。

「ううん。やっぱりまだわかってないと思う」

「…そうか」

パパはちよつと残念そうに顔を落とす。

ふふん。成長がないと思ってるなー？

「…でもね？」

「うん？」

「わからないけど、でも、今までとは違うと思う。だから、」

私は大きく息を吸い、そして吐く。

振り返り、最愛の家族の顔を見る。

…うん。とても素敵な男性だ。私が愛する人。愛する家族。

「見せて」

私は笑顔を見せる。

「私を、見せて」

そんな私を見て、

「ああ、見てる。行つてこい」

パパは少しだけ口角を上げた。

見せて。私を。

貴方の娘を。

きつとあの太陽すらもこえてみせる。

だって私は、太陽と月の子供なんだから。

2つも持つてるんだから、最強なんだ…！

何を持って輝くのかと聞かれてまだ答えることは出来ない。
でも、ステージに立つんだ。

私は妖精の子。

そのステージは、私のステージなんだから！

さあ！輝こう！

パパとママの子供は、世界一なんだと世界に示してやる！

日常の1分

ねーパパ

どした

最近忙しくてパパとの時間が取れない

ん、まあいい事だけだな。ちよつと休暇取れるか頑張ってみる
やった！ありがとう、パパ！大好き！

ああ、俺も大好きだぞ

「ねえ、ママ」

「どうしたの？」

「もしもで楽しい話があるの！」

「なにそれ。自分で楽しい話なんていったらハードル上がるよ？」

「いいの!」

「ふふ。で、なーに?」

「もしね、パパと同じ学校で同級生として出会ってたらどうなってると思う?」

「あー、なるほど。八幡とね」

「そうそう!きつとすつごく楽しいと思うんだ!」

「ははは!どうだろうね。我が子は昔の八幡を知らないからなー」

「どういう意味?」

「昔の八幡はね、今の何倍もひねくれてたし、もっと暗い人だったんだよ?」

「それでもパパはパパだもん!だいたいママはその時のパパを好きになっただんじょ

?」

「まあね。いつだって根元は変わってないからねー。それと、八幡がママを好きになっ

ただだからねー?」

「むう…」

「なーにー?」

「なんか私の知らないパパのこと知ってるい!」

「へっへーん。当たり前でしょ。悔しいでしょー?」

「悔しい!でもドヤ顔ママ可愛い!」

「うーん、それにしても高校時代の八幡かー」

「楽しいと思うんだー」

「どうだろ？八幡はアイドルのママに話しかける事なんてしないと思うなー」

「むう、確かに」

「ママも自分から話に行かなかったと思うし」

「じゃあもし同じ高校に通ってたら出会いはなかったって事？」

「んーん。ママは八幡と運命で繋がってると思いたいから。きつとなにかきっかけがあればお互いに惹かれていくと思うんだ」

「私だってパパと運命で繋がってるもん！」

「そだね。世界が違っててもあなたはママたちの子供に産まれて来てくれるよね」

「うん！ねえママ」

「なーに」

「あーいーしーてーるー！」

「ママもあーいーしーてーるー！」

「ねえ、八幡」

「んあ？」

「……プロデューサー」

「ぶっ！いい、いきなり昔の呼び方するなよ」

「にはー。こういったら喜んでくれるかなってね」

「…可愛いな、つたく。なんかあつたか？」

「んーん。ただ娘に旦那が取られるかもーって思っただけ」

「あー…。ほら、これでいいか？」

「うわぶ。…すー。はあー、プロデューサーの匂い…」

「ん、杏の匂いがする」

「変態っぼいよ？」

「…いいだろ別に。俺の好きな匂いなんだから」

「へへへ。嬉しいよ、プロデューサー」

………

「今日は杏が獣になっちゃうかも」

「あの子が生まれてあんましてないしな」

「がおー」

「…やっぱ俺の方が獣になっちゃまうわ」

「やさしくしてね?…あ、激しいのもいい?…かも?」

「馬鹿。愛してる、杏」

「うん。愛してるよ、八幡」

もしも同級生なら、彼と彼女は。

総武高校。

千葉にある高校。私はここに通っている。

双葉杏。高校2年生。将来の夢、印税生活。

意外にも健全な自己紹介だと思う。：まあ言われることはわかるけどさ。

でも私が高校1年の時にアイドルにスカウトされてからはこの夢も笑われるようなものじゃないと思うんだ。

だから笑うのは禁止。

まあまだまだただけど。それでも自分で言うのも変かもしれないけど、そこそこなんでも出来る子だからアイドル活動も上手く行ってる。

プロデューサーにはよく褒められるし、結構ファンもいるしね！

この間は地上波の有名なテレビにも出たし。：そのせいで学校じゃ相当面倒にはなったけど。

まじやばいっしょー

杏すごいじゃん。昨日のテレビ出てたよねー。あーしびつくりしたし。

双葉さんテレビ見たよ。凄いな。

とか普段関わるのを嫌うカースト上位に囲まれた。

面倒だったからきてーに流したけど。

それ以降あんまり関わってこない。丁度いいけど。

どうにもあんな感じの関係は好きになれない。そもそもうるさいのは嫌いだし、面倒だし。

双葉さん、僕も見たよ！凄かった！やっぱ可愛いからアイドルとか向いてるよね！

ああ、彼は戸塚君だったっけ。彼はこっちの気持ちも察してくれたりするし、必要以上で絡もうとしてこないから好きだった。

うん。ありがとー。

悪い気はしなかったので普通に答える。

彼は応援するね、と言って自分の机に戻って行った。

いい人だなーと何処か冷めたように思いながら、それでも嬉しく思う自分もいて。だんだん思考もアイドルに近づいたかなと思いつながらホームルームを意識してそれまで休もうと考える。

机で寝ようと横を見た時に私の視界に入ってきたのは、もう既に私がしようとしてい

た体勢になっっている男子だった。

そういえばこの人いつも寝てるな。

えーと比企谷八幡君だったかな。

入学式に事故にあつて遅れてクラスに合流したから覚えてる。

1回も話したことはないんだけど。なんか気にはなるんだけどなー。

私と似たような波長を感じる。面倒な事とか嫌いとか、将来楽して生きていたいとか思つてそうとか。

それは失礼かな？ かんがえるのやーめた。

先人にあやかつて私も寝るとしよう。

おやすみー。

授業が終わった。ぬあー、今からレッスンだ…。

やだなー…とはいえ印税生活の為にはやむなしか。ぼちぼちがんばっていいこ。

「そういえば双葉さん、学校では大丈夫ですか？」

レッスンしているとプロデューサーに突然問いかけられた。

「どしたの、突然」

「昨日双葉さんが出た音楽番組が放送日でしたので。学校で何らかの反応があったのではと思いますよ」

あーそゆことか。

「まあ色々と言われたよ。普段関わってない人達にも話しかけられた」

「問題はありませんでしたか？」

「問題？まあちよつと面倒だったくらいかなー。純粹な応援とかだったらいんだけど、野次馬みたいなのもなかったし。…あ、でも1人だけちゃんとお手伝いしてるって感じで嬉しかったかな」

戸塚君だったかな。まあ私のファンになったってわけじゃないだろうけどそれでも嬉しかった。

「そうですか。それなら良かったです。では残りのレッスン頑張ってくださいね」

うへえ。

「ぶろでゅーさー、今日はもうやめよう？」

プロデューサーは私の言葉を聞いて心配そうな顔をして、

「え？体調が悪いのですか？」

そして私は悪びれずに答える。

「だるい」

プロデューサーはとても微妙な顔をして、

「…頑張ってくださいね」

そう言い残してレッスン場から出ていった。

むう。抗議は通じず。まあしようがないんだけどさ。

だるいもんはだるいんだい。

「はいはい。続きやっていきますよ」

トレーナーさんが手を叩いて仕切り直そうとする。

「はい…」

私はのそりと身体を起ここしてレッスンを続けるのだった。

それから2ヶ月がたった。

まだ収録されたわけじゃないけど、私にはそこそこの仕事が舞い込んでくるようになった。

これもしたくなかった努力の賜物だ。

そうして私はプロデューサーに聞いてみた。そろそろ印税生活も近いんじゃない？って。

プロデューサーは困ったように後頭部をかいて苦笑いするだけだった。

むう。

まだまだらしい。とおーいーよー。

そろそろ杏ちゃん頑張りすぎて疲れちゃうよ？と、いうわけで今日も今日とて学校で寝るのである。

横になるだけでも休まるなー。

こっそりと持ってきた自前の枕を机に置いて横になる。そうした時に目に入るのはやっぱり同じように寝ている比企谷君の背中だった。

この人凄いなあと思う。

何がすごいってこの人授業中と昼休み以外はほとんどこうしてるから。

友達がいらないとか？まあスタートの遅れのせいできくりづらそうとは思うけど。なんか：気になるというか、んー？

よくわからないけど、寂しい背中だなって思った。

授業終わり！

と、喜ぶのも束の間。私はレッスンに行かなければならないのだ…。

憂鬱になったので皆が帰る中、少しだけ横になって時間を潰した。

いい加減動かなきゃと思ったからカバンを持って枕を机にしまい、帰ろうとする。

あ、比企谷君。

どうやら彼も眠っていたらしく、慌てた様子で周りを見てすぐにカバンを持って帰っていく。

なんとなく見送ってしまったけど、私も後を追って教室を出ようと、

「ヒッキーー！」

して、扉に手をかけた時に廊下からそんな声が聞こえた。

「待つてよ！ヒッキーー！」

どうやら同じクラスの由比ヶ浜さんだ。

「え？俺のこと？」

「他にいないじゃん」

「えっと、誰？」

「ひどい！同じクラスの由比ヶ浜だよ！」

「わ、悪い。知らなかったから」

…比企谷君、あのこリア充グループにいるんだから知るところよ。

「え？ヒッキーって俺の事か？」

「そうだよ、比企谷だからヒッキー」

それはどうなの。

「いや、その呼び方やめて欲しいんだけど…」

「ちよつと話があつて、聞いてくれる?」

「せめて俺の話聞いてからにしてくれる?」

まあそうだよな。無視かよつて突つ込んだじやうところだったよ。

それにしても、出にくい雰囲気だなあ…。

「あ、あのね? その…」

「なんだよ…」

早く終わつてくれないかな。

なんか告白つぽいし、出るに出不れないなあ。

そういえば比企谷君が喋つてるとこ初めて聞いた。こんな声だったんだ。

「えつと、その」

「何も無いなら帰るけど」

まあ私としてはレッスンに遅れる理由も出来たしゆつくりでも良いけどね。

でもびつくりだな。由比ヶ浜さんが比企谷君に告白なんて。

「入学式の日、覚えてる?」

「…あいにくとその日は交通事故にあつてな。お前とは会つてないと思う」

あれ、告白じゃない?

「それだよ、その交通事故。ヒツキーが守ってくれたあの犬私のだったんだ……」

そうなんだ。ん？もうそれ一年以上前の事だよ。なんで今なんだろ。

「ああ、クツキーくれたのお前だったのか。知らなかった」

「お礼を言いたくて……あ、ありがとう」

……

「……別にお前の為に助けたわけじゃない。偶然だ」

「それでも、サブレをたすけてくれたから。それでね！ヒツキーとその、と友達に、なりたくなってる……」

……

「……お詫びなら貰ったし気を使ってるならやめろ。事故がなくてもどうせぼっちだったと思うし、お前が気を使うことじゃない」

「ち、ちがうし！気を使ってるとかじゃない！ヒツキーと友達になりたくて！」

ああ、もう！

私はついに我慢することなく教室のドアを開けた。

予想もしないところから音が鳴ったために2人はびつくりしてこちらをむく。

「ふ、双葉さん、い、いたんだ……」

びつくりしている由比ヶ浜さんを無視して私は口を開く。

「あのさ、由比ヶ浜さん。お礼を言いたいならまずそのヒツキーっていうのやめた方がいいと思うんだけど」

「え？き、聞いてたの!?!」

「友達になりたいんだよね？だったらず友達嫌がつてることやめた方がいいよ。それと大事なお礼はもっと早めに言わなきゃダメ」

私はちよつとイライラしていたせいも明るく言えなかった。

「え、あ、うん。…そうだよねごめん…」

由比ヶ浜さんは顔を伏せて俯く。

「それと比企谷君」

「ひゃいー!」

彼は自分が話しかけられると思っていなかったのか、声を裏返させて返事をする。

「由比ヶ浜さんはお礼を言ってるんだから素直に受け取ろうよ。比企谷君はどう思ってるか知らないけど感謝は受け取らなきゃ可哀想だと思う」

「だ、だからもう受け取ってるし…」

「わざわざ1年も前のことを直接言いに来たんだから今受け取らなきゃダメ。どれだけ勇気が必要だったか由比ヶ浜さん見たらわかるじゃん。せつかくいい事したのに台無しだよ」

「…ああ、そう、だな」

「それじゃ杏帰るね。ばいばい」

とことこと2人に背を向けて歩く。

はー、柄にもないことしたなあ。そうは思ってもなんか凄く嫌だったから。

特に比企谷君。

せつかく勇気を振り絞って謝りに来たんだから受け入れるべきだと思うんだよね。
いくら由比ヶ浜さんが失礼でも。

でも、

「…なんとなく、比企谷君がわかったかも」

器用で臆病。

人が怖くて、でも1人は嫌だ。

そして他人のために行動出来る優しい人。

初対面でヒッキーなんて言われ続けても話を聞いて、

友達になりたいって言われて嫌だと言わずに気を使うなど言い、

顔も知らない、他人の犬を身を呈して守ってしまい、

それを偶然と言った。

つまり彼は誰でも助けていたんだ。何も無い。助けられたから助けた。

見返りも求めていなかった。

ただ体が動いただけ。

どんなに凄いことなんだろう。

私には出来ない。

下駄箱から靴を出しながら私は知らず呟いた。

「…羨ましいなあ」

どつちにそう思ってるかもわからず。

「…なんだか今日はいつも以上に疲れてますね。大丈夫ですか？」

プロデューサーが心配そうに聞いてくる。

「あー、んー。学校でちよつとねー。それよりプロデューサーなんかあったの？」

今日はプロデューサーが見学する日じゃない。だからこそ遅れていいやって思った
んだけど。

「大丈夫ならいいですけど…。今日は報告がありました」

「んー、なーにー？」

私は寝っ転がり、仰向けになりながらプロデューサーに聞いた。

「最近のメディアへの露出具合を考えそろそろファンクラブを作ろうと思ひまして。それでこれをどうぞ」

そう言つてプロデューサーが一枚のカードをくれた。

寝っ転がつて見るそれには、双葉杏ファンクラブ会員番号000000と書いてあつた。

「へーもうカード作つてあるの?」

「いえ、それだけです。それだけは特別なものになりますので、双葉さんの大事な方へあげるのが良いかと思ひます」

「んーそう言われても…」

大事な人ねえ。

「プロデューサーいる?」

「私よりも親御さんにあげてはどうですか?きつと喜んでくれますよ」

あ、そつか。

「じゃあお父さんにあげようかなー」

「良いと思ひます。では残り頑張つてくださいね」

うえ。

「やな事は思い出させないでよ…」

次の日、教室に入った私の目に見えたのは由比ヶ浜さんが比企谷君に挨拶しているところだった。

ぎこちないけどまあ挨拶出来るくらいにはちゃんと話し合ってくれたみたい。

由比ヶ浜さんはその後私に気付いて昨日のことを謝ってきた。

別に気にしなくていいよって言って席へ座る。

自分の机に枕もおかず頭を置きはー、と息をつく。

自分のした事を思い出し疲れた。やっぱり柄じゃないなー。

いつもの体勢なので比企谷君が見える。

今日は突つ伏した姿じゃなくて、正面からだけど。

どっか行くみたい。席を立ててこっちへくる。

…目が合ってる？

「ふ、双葉、そ、その、昨日はすまん」

びつくりした。話しかけられた。

「杏は言いたいこと言っただけだからべつにいいよー」

にしても比企谷君を正面からちゃんと見たのは初めてだ。

凄い目。目が腐ってる。

「へへ、何その目」

「うるせえ、生まれつきだ」

困ったようにそっぽ向く比企谷君。

かわい。

「それで、その迷惑かけたからな。なんかジュースでも奢る。なにがいい？」
「お返しなんていらぬよ。杏だつて言いたくて言ったわけじゃなかったし」
「俺はやしなつてもらうのはいいが施しは受けない」

ふふ、何それ。

「施してわけじゃないんだけどなー。ん？やしなつてもらう？」

「ああ、俺の夢は専業主夫だ」

あははははは。何それ面白い。

「その手があつたのかー。いいね」

「…引かないのか？」

「どして？いい夢じゃん。杏はその夢素敵だと思うよ。そだ、杏の事やしなつてよ」

そう言うとう教室は一瞬静まり比企谷君は驚いた顔をして、焦りながら

「ば、ばか。俺はやしなつてもらう側だ」

そういった頃には喧騒を取り戻した。

ちえー。印税生活よりも楽そうだったのになー。

「そ、それより何がいいんだよ。自販機にあるやつで頼む」

んー、別に大したことしてないからいいんだけど。

でもそれじゃ比企谷君納得しないだろうし。

「じゃあー…」

あ。

「ん？コーラで良いのか？」

私はおもむろにカバンを取り出し、財布を取り出す。

「お、おい、奢るからお金は」

そして一枚のカードを取り出した。

「はいこれ」

比企谷君はカードを受け取り、

「…なんだこれ？」

「見てみてよ」

そうして言われるままにまじまじと見ていき、

「お、おい、これ」

「杏のファンクラブのカード。杏のファンになってよ！」

比企谷君は顔を引き攣らせて固まり、教室を静寂が支配し、今度こそ喧騒を取り戻す事無くホームルームが始まった。

彼と彼女は踊り出す

手に持ったそれを弄び、くるくるくるくと回す。

表と裏を交互に見て、たまに上にかざして仰ぎみる。

光を反射して輝くソレは、どうにも持て余すものであり、正直今にでも元の持ち主に返したい気分だ。

ファンクラブの会員の証であるそれは、奇妙なことに00000と書かれていてどんな意味を持つのか明白だ。

ありえなくない？

何度考えてもからかわれているとしか思えんのだが。

これは新手の嫌がらせだ。明日にでもネタばらしされた挙句期待した俺は笑われるという未来まで見える。

もういつその事今ネタばらししてくれない？

「ん……」

そんな考えをあの時の顔が許さない。

へへ、なにその目

この目の事を言われて不快感を感じなかったのは家族以外に居なかった。

今まで友達が出来なかった理由がほぼこれなんだぞ？

ありえない。

何度目が気持ち悪いと言われてきたのか。

それでも。

からかうように、はにかむように笑う彼女の顔を見た時に何かまずいと思った。

よく分からないまま、まずいと思った。

杏は素敵な夢だと思うよ

悪意を感じさせずに笑う彼女の顔を見て。

素敵な夢だとか妹にすら言われたことない事を言われ、過去の記憶が大きな音で警鐘を鳴らす。

駄目だと。これ以上は駄目だ。

何度も学習したはずだ。期待はそのまま裏切りに繋がるはずだと。

その時にはわからなかった自覚のない警鐘の気配を感じ、臆病な俺は逃げようとして

杏のファンになってよ

その退路は絶たれた。

幼い自分にとっては凄惨な記憶だ。

なにもしていないのに避けられ、蔑まれ、それでも寂しかったから話しかけた。

一人ぼつちが嫌だったから。

少しの希望が見えただけですがりついた。話しかけてくれたから、人を好きになつた。

それは裏切られて

俺は人が嫌いになった。

誰とも関わらなければ良いんだと思った。

だって怖いから。

だって傷付くから。

そうして作つた壁は今まで傷すら付けられずにいたはずだ。

一瞬だった

それは一瞬だった

あの笑顔で手を差し出す彼女を

壁は崩れ、そこに差し込んだ太陽を背に、輝く彼女を視た

「…はあ」

最悪な気分だ。

黒歴史ノートを家族の前で朗読するような気分。

いや、もう書いてないけどね？

今すぐベッドに潜り込んで叫んでやりたい気分だが、それはさつきやって小町に怒られたし。

どうする事も出来ずに考えていたらこんな気持ちになるなんて恥ずかしいにも程がある。

「なんだよ太陽って」

いつの間に厨二病再発しちゃったのん？

そうは考えても自覚してしまった以上誤魔化すことが出来なかった。期待してしまったんだ。

彼女に。

「あああああああああああ…」

やっぱり抑えきれなかったので叫んでしまった。

「お兄ちゃん、今日はいつもよりキモイよ？大丈夫？」
うるさい。

自覚あるんだから黙ってなさい。

「あとそのアイドル？の動画見るのは良いけど朝のアニメ卒業してそっちにしたの？」
ばっか、それとこれとは話が別だろ

「ん〜」

ベッドの上で寝転がりながら、お気に入りのおうさぎちゃんのおぬいぐるみを抱いて唸る。

会員証を渡したあの日、フリーズした比企谷君は先生に席に戻され、その後には話そうとしたけどクラスメイトが妨害してきたり本人に避けられていたつぼくて話は出来なかった。

「む〜」

唸っているのもその不燃焼感のせいだ。

なんとも言えない気持ちを受け止めてもらおうと、大好きなうさぎをぎゅーつと抱きしめる。

そもそも私はどうしてあんな事をしたのか。

最近どーも突発的な行動が多い気がする。

わかりきったことかもしれないけど。

「比企谷君のせいだもん」

寂しそうな背中を見た。

大したこと思わなかったと思う。それこそ寂しそうだなーってくらい。

優しくして臆病な彼を見た。

寂しそうにしてるくせに好意を拒絶する彼を見てむかむかした。

自分を卑下するのを見たくなかった。

あーもうって感じ。

腐った目を見た。

いまでも笑っちゃう。

優しい彼の目は腐ってた。

まるで呪いをかけられたみたいに。

想像する。

彼は優しく産まれてとつても綺麗だったから、妬んだ神様が呪いでもかけたんじゃない

いかって。

「く〜いふ〜い」

面白い。そんな恥ずかしい妄想すら面白い。

だって私は目を見た瞬間思っちゃったんだもん！

なんて綺麗な目なんだろう
誰も気づかなかつたんだ。
どうして？

あんなに綺麗な目を見て何も思わないの？

私は見つけてしまったんだ。

私はきつと運がいい！

俺の夢は専業主夫だ

堂々とそんな夢を語る彼を素敵だと思った。

楽しいって思った。

愛しいと思った。

愛おしいと思つてしまった。

私に話しかけるのも勇気を出したんだらうなあ。

少しキョドつたような声で呼んでくれて。

その目は少し怯えていて。

そのくせ専業主夫になりたいなんて事を堂々と言つて。

「へへへ」

思い出すだけで顔がにやける。

本当はお礼を口実にお昼ご飯と一緒に食べようかと思っただけど、会員証の事を思い出した私は迷いもせずに渡してた。

1回一緒にご飯食べるよりも、これで比企谷君と話すきっかけになれと思わず渡しちゃった。

それは大事なものだよ。

だから渡そうと思っただらうね。

今のファンには悪い事しちゃったけど、私が認めたファン第1号は比企谷君になったんだよ？

そんな事直接言ったら比企谷君はきっと困るんだらうなあ。

困ったように目を逸らして、でも私の好意を無下に出来なくて。

そうだったら嬉しいなあ。

「杏だつて怖いんだよ……？」

もつと強く、

ぎゅつてうさぎちゃんを抱く

強く、強く

怖いから

「…嫌われてないといいなあ」

窓から見える星空にそう呟く。

ああ。そっか。

「由比ヶ浜さんが羨ましかつたんだ」

私がついていない、比企谷君との関係を見て。

いつぞやの答えにふつと納得が言つて、自分の気持ちが整理できないままにまぶたがおちていった。

「おはよ」

「あ、お！…おう」

「声裏返つてるよ。朝だから？」

「…ちよつとびつくりしたただけだ」

「へー。そいえばさ、杏が歌つてるのとか聞いてくれた？」

「まあ、一応な」

「ねーねー、どだったー？」

「い、いやまあ、よか、つたんじゃね？」

「なんでぎもんけーい？好きじゃなかった？」

「良かったよ、良いんじゃない」

「むー、そっけない」

俺の前の席の椅子に座って話しかけて来たのは双葉杏だった。

昨日のこともありちよつと避けて行こうと思つた途端の襲撃である。

あと双葉の歌なら聞いた。というか見た。

テレビで流れたものしか無かつたのでどんな感じかちよつと見ようと思つただけだった。

気がついたら動画終わつてたけど…。

それとごめんね、前の席の前田くん（名前知らないけど）

いや、俺悪くないけどさ。

「勝手に席借りて良いのかよ。困ってるかもしれないぞ」

俺が。

「だいじょーぶ。坂田君には許可取つたから」

さいで。

名前間違えてごめんね、坂田君。

それよりも朝からの襲撃である。教室に来て自分の席に向かうまでに由比ヶ浜が挨拶してきて、それに少し慣れた俺はおうと答えて席に座つた。

そこにやってきたのが双葉杏である。

坂田君の席に座るなりこちらの机に頭を乗っけてだらけた彼女は、今までの俺が一日の学校で話す文字数を軽く超える会話爆撃を仕掛けてきた。

べ、？に普段話す人が居ないわけじゃないよ？

平塚先生とか平塚先生とか…あれ、説教受けすぎ？

「だーるーいー。…あ、ねーねーお昼ご飯一緒に食べよう？」

「朝から昼飯の話かよ。それとだるいならわざわざごつちに来なくていいだろ」

顔だけ机に乗せてだらーつとしてる双葉に返す。

ごつちを見るな。

さり気ない風に顔を逸らして視線を外す。

「なんで目をそらすの」

ばれてら。

「別に。そろそろ先生来るかなと思っただけだ」

言い訳としては正解だろ。そろそろHRだし。

「まいつか。昼休みになつたらついて行けばいいし」

なん…だと…。

それは非常にまずいのでは？主に八幡のS A N値的に。

「坂田君ありがとね。比企谷君、また後でねー」

「あ、ああ、うん。ありがと双葉さん」

なんでお礼言っちゃってんの坂田君。

ダメだよ！そんなちよつと顔を赤らめてさっきまで双葉が座ってた自分の席を見るのはダメだよ！

気持ちわかるけど！わかるけど！

その後、双葉は授業が終わる度に俺のどこに来た。

俺が先んじてトイレに逃げ込めば、帰ってきた時には俺の席で双葉が寝てました。

いやー、どうかと思うよ？

そんな事健全な男子高校生にやっちゃ駄目だよ？

坂田君なんて双葉が自分の席に座る度、自分の椅子を眺めちゃう病気が発生しちゃうレベルなんだよ？

でもまあそんな事も訓練されたぼっちには通用しない。

特に双葉の場合純粹っぽいところあるから、きつとうん。

あの、あれ。犬が落ち着く場所見つけたみたいなき感じなんだ。

だからこれはきつと期待するような事じゃない。

：わかってるよそんな事。
期待なんてしない。

うがー。

比企谷君に会うのが楽しみでそわそわしてた私はいつもより早く学校に来てしまった。

比企谷君いつも遅いのに。

そんなこんなで登校した比企谷君と話はできたけど、思ったより冷静で昨日の事は気にしてないような感じだった。

一応私の事気になってくれたかなと気になって聞いてみたけど、歌は聞いてくれたらしい。

反応が微妙だったから思わず好き？って聞いちゃったけどなんかはぐらかされた感じ。

むー。

気に入らないけど反応は悪くなかったし、気に入ってくれたと思う事にした。

だってそう思わないと怖くなってもう話せないもん…。

「…なんでついてくるんだよ」

とことごと比企谷君の後ろをついて行ってたらそんな事を言われる。

「だってひるやすみだし」

「は？」

忘れてるって顔。

うー、許さん。

「ごはん、一緒にたべよ？いや？」

魅力がないと言われているようでムカツとしたのでとびきり可愛く言ってやった。
顔を傾げて、普段は憎らしい低い視点からの上目遣い。

どうだ！アイドルのとびきりのチワワ顔だぞ！

「えーべにゆにー…んん！別に嫌じゃないけど…」

「はははははははは！」

「笑うなよ」

「だって！ふふ、べ、べにゆにつて！くふ、だめ、もーむりー！」

生まれて初めてここまで笑ったと言わんばかりに笑ってしまった。

動揺してくれたんだよね？私の精一杯の可愛いアピールに。

よくわかんないけど、嬉しさと面白さで一杯になった。

だって私の事可愛いって思ってくれたんだもんね？

脈はあるかも。

「からかうならもういい」

「ごめん、ごめんね？だって可愛いくて…ふふ！」

「もう好きしてくれ…」

「へへー。じゃあ一緒にご飯たべよ。どこで食べるの？杏はあんま歩かないとこきぼー」

嫌とは言わないんだね。

でもさ、それは優しさから？

そうじゃないことを望んじやだめ、かな。

「知らねえよ。俺は好きなところで食うだけだ」

「しょうがないなー。疲れたらおぶってね？」

「なんでだよ…。自分で歩け」

今はいつか。

こうして隣にいれば。

比企谷君、私だって比企谷君がどう思ってるかわからないよ。

だから怖いんだよ？

それでも。

「手、繋ぐ？」

「な、ば！繋ぐかよ……」

そんな顔を見れば幸せになれる。
だから一緒に居たいな。

この時間が

この照れ顔が

この距離が

この優しさが

とても愛おしい

そうして比企谷八幡は

「…最近とても調子が良いように見えます」

私のレッスンを見ていたプロデューサーが突然そんな事を言い出した。

「どしたの、突然」

褒められるのは素直に嬉しい。でも純粹に褒めてる？

「いえ、レッスンを見ているとそう思いました。調子が良さそうというのもありますけど、やる気があるような…」

やる気かあ。うーん、そうかも。

前よりかはレッスン楽しいかな。

「別に悪いことではないので気にしないでください。ただ、なにかいい事でもあったのかなと思います」

いい事ねー。

「今のところは特にないかなー。進展とかないし」

「進展？」

おっと、口が滑った。

「なんでもないよー。最近学校が楽しくなっただけ」

「そうでしたか。それは良かったです」

良くないもん。進展させたいし。

もつと仲良くするにはどうすればいいのかなあ…。

「…」

「どうかしました？」

とはいえプロデューサーに気になる男の子とどうすれば仲良くなれる？なんて聞く

訳にもいかないし。

「べつにー。女の子は悩みがいっぱいってこと」

「は、はあ」

実際の所は比企谷君に見られることを意識してると思う。

だからレッスンも真面目にやってるし、次の仕事が楽しみになってる。

いいところ見せたいもんね。

「あとちよつと頑張ろっかな」

明日も学校がある。

早く学校に行きたいな。

学校に行きたいなんて思うとは思わなかった。

これも比企谷君のおかげかな。

明日はレッスンはなし、放課後どっか遊びに誘ってみようかな？

うん、いいかも。

比企谷君から誘ってってくれるなんてないだろうし、勇気を出して誘ってみよう。

明日が楽しみだな。

「はあ……」

最近疲れる。

それというのも全部双葉のせいだ。

いつもいつも話しかけて来て、休まる暇がない。

：あんな美少女に話しかけられてちや休まるわけないだろ。

それに好意をよせてくれるのがまずい。

そんな事もう期待しないって決めたし、人に期待するのは怖い。

また騙されるかも。

優しい女の子はみんなに優しいんだ。

俺が特別なんてことは無い。

「……」

そんな考えはあのカードで揺らいでしまう。

あれは特別じゃないのか？

携帯の連絡先だったら勘違いもあった。けどあのカードは特別と思って良いんじゃないのか？

いや、そもそも俺はどうしたいんだ？

双葉の事を好き、なのか？

「はあ……」

ベッドで横になり、少し落ち着く。

可愛い、と思う。

それ以上にあの好意を向けてくれる事が何よりも嬉しい。

でも俺は双葉に何かをしたことは無い。

例えば由比ヶ浜は、自分の犬を助けて貰ったっていう理由があった。

でも双葉は何も無いはずだ。少なくとも俺は知らない。

それなのにあんな好意を向けてくるだろうか。

俺にはそれがわからなかった。

ラノベのように理由もなく人を好きになるなんてありえない。

「あー頭痛え…」

考えすぎか頭が痛い。今日はもう寝よう。

明日、学校でどうすればいいんだ…。

今日も早くに学校に来てしてまった。

比企谷君はそんなに早く来ないからもっと遅めでいいのに。

まいつか。いつも通り来るまでゆっくりしてよつと。

そんなふうにしてたのに。

「ホームルーム始めるぞー、席につけー」

先生のそんな言葉が聞こえても比企谷君の席が埋まる事はなかった。

「40度あるよ…お兄ちゃん」

ベッドで動けない俺を小町が看病してくれる。

というのも朝になつても起きれず身体が思うように動かなかつた俺は、小町に必死に助けを求めて朦朧とする意識の中助けられた訳だ。

「うわーこれはちよつとやばいね。お兄ちゃん立てる？とりあえず病院行こつか。小町

タクシー呼んで学校に電話してくるから待っててね」

小町の言うことを理解は出来てるが身体は動かない。

ここまで重い風邪にかかったのはいつぶりだ。

「…小町？」

気がついたら小町がいない。あれ、どこいった？

「小町…」

無性に不安になり小町を探す。

小町を一人にする訳にはいかないしな。

「いって…」

そうは思っても何故かからだが上手く動かなくて、ベッドからおちた。

あれ、おかしいな。

「わー！お兄ちゃんなにやってるの！寝てなきや駄目だつてば！」

小町にベッドにもどされる。

「小町がいなかったから、しんぱいだったんだよ…」

「心配しなくても今日は小町も学校休んであげるから。タクシー来るまでゆっくりしててね」

そうじゃなくてな、こまちがしんぱいなんだよ。

あれ、よくわかんなくなってきた。

「大丈夫だよ、こんな時くらい妹に頼っていいんだよ」

あたまをなでられる。

いつくらいぶりだろうか、こんなにひとはだがあたたかいかんじるのは。

「さんきゅこまち」

「小町はお兄ちゃんの妹だからね。当然だよ」

「すーはー」

まるで不審者だ。

私は今人の家の前で深呼吸をしてる。

不審者と言われようともこれは仕方ないのだ。

表札には比企谷の文字。

これを見るだけで心臓はバクバクいつてる。

さつきまではここに辿り着けるかが心配だったけど、今はそんなこと忘れて緊張が頭を埋めつくしてた。

「うー……」

比企谷君はどうやら風邪で休んだらしく、それを知った（先生に問い詰めた）私は何

とか住所を教えてもらおうと平塚先生に聞いてみれば教えてくれた。

ラッキーなんて浮かれてた私は家の前に着いた途端に緊張に飲まれたという訳だ。

いや、だって看病とか出来るかな？って思ったし…。

最初は何も考えてなかったけど、比企谷君の家って事は家族もいるだろうし…。

色々考えるとやばい気がする。

「うー」

最初の勢いはどこへ行つたんだと自分で言いたくなるけど、よくよく考えたらお見舞いしたとして比企谷君の部屋に入るの？

それはそれでまずい。

私男の部屋とか入ったことないし。

ってそうじゃなくて。そもそも寝てるだろうし会えないと思うんだよね…。

でも来てしまったししようがないよね？

途中で買ってきたお見舞いの品だけ渡して帰ろう。

「よし」

恐る恐るインターホンを押す。

ピンポン。

ドキドキと胸が高鳴っていく。

あ、やばい、逃げたい。

家の中からはーいと声が聞こえて逃げられなくなった。

うわーうわー!

女の人の声!お母さんかな?

まづいまい!

咄嗟に鏡で身だしなみをチェックしなかった自分を呪う。

大丈夫、多分。学校出る時は問題なかったはずだし大丈夫。

ぬあーやつぱりチェックしとけば良かった!

「はいはーい、どっち様ですか?」

あ、年下だ。妹さんかな?

「あ、えつと比企谷君の友達で…あ!違う、八幡君の友達で…」

ここは比企谷家だった!

「えええ!お兄ちゃんの友達!?!しかも女の子!」

「え、あ、はい…」

「んー?ふんむ…」

すつごい見られてる。てか品定めされてるような…。

「あのこれ、八幡君のお見舞いに来たんです」

私はとりあえず目的を果たそうと途中で買ってきたお見舞いの品を渡そうとした。

「それはお兄ちゃん喜びますよー！じゃあ案内しますので上がってどうぞー！」

そう言われて手を引かれるままに家に入っちゃったとき。

あれー？

「おじやましませーす…！」

そろりそろりと扉を開け静かに言いながら入る。

妹ちゃんは何かをしなきゃ行けないらしく、私は一人で比企谷君の部屋に入ることに。

そろりそろりとベッドに近づく。

「うわー…！」

うわー！寝顔！寝顔！

「綺麗…！」

なるほど。普段は目が腐ってるけど寝てると普通に見えるんだ。

普段も好きだけど無防備な顔も好き。

やっぱり優しさが溢れてる気がするな。

少しの好奇心。

だってこんな無防備だったら誰だってそうする。
頭を撫でる。

あ、気持ちいい。

撫でられるのは気持ちいいって聞くけど、撫でるのも気持ちいいんだね。

「あ」

「小町…?」

やばい、起きた。しかも手を掴まれた。

うーうー、心臓がやばい!

「…?」

起きたと思ったけどすぐに寝息が聞こえてきた。

寝ぼけてたのかな?

でもなんでか、弱々しく掴まれた手を離せなくて。

「よしよし」

逆の手で頭を撫でた。

「大丈夫だよー。杏は傍にいるからね」

時間が許してくれるまで、こうしているからね。

時間が許してくれるなら、ずっとこうしたい。

時間が止まればいいのにな。

暖かい夢を見た。

「ん…」

目を開ければ部屋は随分暗くて外は夜になっていた。

ああそうか、俺は風邪ひいて寝てたんだ。

朝は随分ときつくて起きられなかった記憶があるけど、今はそれなりに良くなったみたいだ。

「あー、頭いてえ…」

ずっと寝ていたせいかわらわらする。

どうやら動く分には問題ないみたいだし、水を飲み居間へと降りる。

「あれー、お兄ちゃんもう起きて大丈夫なの？」

「なんとかな。悪い迷惑かけたか」

「気にしないよ。どうせお兄ちゃんにはいつも迷惑かけられてるし」

「あーはいはい。あんがとさん。水あるか？」

「あるよー。あとポカリも」

小町らしからぬ用意の良さだな。

「悪いな。用意してもらって」

「ふっふっふー。実は小町はそこまで用意してないよー。買いに行く余裕もなかったし」

「なんで威張ってんだ。」

「母ちゃんか」

「最初はお母さんに頼もうと思ったんだけどね。その必要なくなっちゃってさ」

「父ちゃんか、珍しいな」

「ぶっぶー。両方ハズレだよー」

「そうだったら選択肢無くね？」

「まあいいや。今は小町のクイズに付き合ってるほど体力ないし。」

「誰か気になるでしょ？それにしてもね、小町は感動しているのです」

「どした、突然。」

「しらばっくれちゃって。お兄ちゃんにあんな可愛い友達がいるなんて知らなかったよ」

「病み上がりの傷を抉らないようにね、小町ちゃん。お兄ちゃんに友達はいないぞ」

「何その悲しい発言…。じゃあ彼女？」

「友達がいらないのに彼女がいるわけないだろ…」

ふと、夢のことを思い出す。

「じゃあ友達でも彼女でもないのに見舞いに来たってこと？無理があると思うなー」

「…待て。見舞いに来た？」

臆気ではあるけど誰かがそばにいてくれた事。

あれは夢か？

「そうだよ。双葉さん。ソレも双葉さんが買ってきてくれたんだからね」

「は？」

言われて飲んでいた水を見る。

双葉が？お見舞い？

「…な、なあ小町、お前が看病してくれたんだよな？」

「最初はね。でも病院から帰ったらお兄ちゃんすぐ寝ちやったからずっと付きつきりつてわけじゃなかったよ」

「そ、そうか」

良かった。妹に甘えてたという黒歴史は避けられたみたいだ。

妹に甘えてたなんて事あったら八幡死んじやう。

「それより双葉さんの方が付きつきりだったかな」

え？

「え？」

「言つたじゃん、お見舞いに来たつて。わざわざ来てもらったから風邪ひいてますけど顔みていきますか？つて聞いたら看病してくれたんだよ？これが友達じゃなかつたらなんなのさ」

そばにいるからね

そんな声が聞こえて、誰かに撫でられた気がした。

あ、あれつて…。

「結構長い間お兄ちゃんをみてくれてたんだからね。ちゃんとお礼いいなよ」

「小町」

「なに？」

「お兄ちゃんちよつと失踪してくる」

「なーに言つてんのかなこのごみいちゃんは…」

「じゃあ何？俺は双葉に甘えた拳句頭なでなでされてたつて事？」

「やだ死にたい。」

「そもそもなんで双葉が来るんだよ…」

「…はー。本気で言つてる？これだからごみいちゃんは」

「だって意味わかんねえだろ。俺あいつと仲良くなんてしてないぞ」

「お兄ちゃんこの際だから言うけどさ、逃げちゃ駄目だよ」

小町は随分と真面目な顔でそう言う。

「逃げるって…何をだよ」

「好意から、でしょ。双葉さんがお兄ちゃんをどう思ってるかなんてどうでもいいと思うな」

「いや、大事でしょそこ」

「だから逃げてるって言ってるの。結局さ双葉さんがどう思ってるかじゃなくてお兄ちゃんが双葉さんをどう思ってるかじゃない」

逃げる…。俺は…。

「お兄ちゃんは自分を好きになる人しか好きにならないの？小町はさ、お兄ちゃんがめんどくさい事知ってるしもう慣れちゃったからなんとも思わないけど」

お、おう。

「でもだからそうやって逃げてたらもう二度と友達も出来ないし恋人も出来ないよ」

いつの間にか俺は小町が座っていたソファへ座り、横に並ぶ。

そうするとすとんと小町が頭を預けてくる。

「小町はさ、お兄ちゃんのいい所を知ってくれる人が好き。だって気持ちわかるもん」

こそばゆくなくなってきたので小町の頭をゆっくり撫でた。

「お兄ちゃんのめんどくさい所小町は好きだよ。だから小町と同じような人が現れたら良いなあって思ってる」

「小町…」

「でもねそんな人が居たとしてもお兄ちゃんが逃げたら駄目なんだよ」

「なんとも言えない気持ちになったせいで俺は小町の頭をわしやしやと撫でる。」

「わーなにー」

「ありがとな、小町」

「小町がいる限りぼっちにはならないから安心してね？」

「全く可愛い妹だ。」

「ありがとう」

「小町にあんなことまで言わせたんだ。」

行動しなくてどうする。

結局は怖いだけなんだ。

今まで理不尽に嫌われ、それでも人と繋がりがたくて必死に頑張った。人を好きにもなった。

その結果は最悪で、人が怖くなった。

人の好意が怖い。だってそれは俺にだけ向けられるものじゃなくてみんなに向いてる。

だから俺が特別になろうとするとまたあの時みたいなことになる。

それがとても怖い。

でも、それでももう一度だけ頑張ってみよう。

だって俺は双葉杏を好きになったから。

どこが？

この目を綺麗って言ってくれた。

どこが？

笑顔が。

どこが？

真つ直ぐな目が。

好きになった。

「お、おはよ、双葉」

声をかけると双葉はキョトンとした顔をしたが直ぐに、

「おーはよ。もう風邪治った？」

いつものだるそうな笑顔で答えてくれた。

「あー、なんかお見舞いに来てくれたらしいな。さんきゅ」

「ふふん、ちゃんと感謝してねー。わざわざ平塚先生に住所聞いたんだから」

少しドヤ顔で答える双葉を見て、やっぱり少し照れてしまう。

「それとな今日昼飯なんだけど簡単に弁当作ってきたんだ。一緒に食べないか？」

すると今度こそキョトンとした顔で固まり、

「え？比企谷君で弁当作ったりできるの？」

びつくりした顔でそう言った。

「専業主夫希望だからな。普段作ることはないけどまあ看病のお礼だ」

「へー、へー。うれしいかも。じゃあ一緒に食べてくれるんだよね？」

随分とニヤけた顔でそう答える双葉を見て抑えていた期待感がまた出てくる。

「お礼だしな。いつものとこでいいだろ？」

「あんまり歩きたくないな。ま、あの場所好きだから良いけどね」

そういうええばどうしても聞きたいことがあつたんだった。

「な、なあ、看病に来てくれた時の事だけど…俺何か変なこと言ったりしてなかったか？」

「んー？どうかな。あんまりおぼえてない！あははは！」

なんだその笑いは。やっぱり俺なんか言つたのか？

はあ。

答えるつもりも無さそうだし、諦めるしかないか。

この先聞く機会もあるだろうしゆっくり聞いていこう。

もう一度、もう一度だけ近づいてみよう。

この太陽に焼かれるか、それとも太陽の横に寄り添えるか。

俺の青春ラブコメを頑張ってみよう。

実家

「こんにちわ、杏ちゃん。いらっしやい」

今日は私のもうひとつの家でもある比企谷のお家に来た。

結婚してから何度か来ているこの家は私にとってはもう実家も同然だった。

「ただいまーお母さんー！」

「おかえりー！私の空ちゃんー！」

それは中学生に上がった私の娘にとってもそうだ。

玄関から入るや、飛び込みそこにいる女性に飛びつく娘を見て可愛いなあなんて思いながら、私も挨拶をする。

「ただいまです、お義母さん」

「おかえり、私の娘ちゃん」

そう言っただけでくれた笑顔に最愛の人を重ねて、ああやっぱり。

私はこの家族の笑顔が大好きだ。

「今日は八幡は仕事？」

「そうだよー。私はお休み取れたからママと遊びに来たの！」

空がそう答える。

この子も立派なアイドルなんだからなかなか休みは取れないけど、今日は休みが取れた。だからまあ久しぶりに比企谷の家に遊び行こうって話になって。

「わざわざ休みに遊びに来てくれるなんて嬉しい！お母さんは嬉しいぞ」
ソファで座るお義母さんにベタベタに甘えまくる空。可愛い。

お義母さんはなんていうか、小町ちゃんのお母さんって感じ。いつまでも若々しいな。

「お義母さんのお休みに来てごめんなさい。杏もお義母さんに会いたかったし、空も会いたいって言うから」

「うふふ、いいのよ。私も会いたかったわ。初孫ですもの！小町はねまだそうなのよねー……」

「私はつまごー！でもお母さんはおばあちゃんって感じしないよー」

「嬉しいこと言っちゃってー。可愛いぞー！」

「わー！！」

娘がわしやわしやと頭を撫でられる。

傍目から見たら親子に見えてもしょうがないくらいだもんね。

「夜ご飯は食べていく?」

「はい。八幡が仕事終わってから迎えに来ることになってるので」

「はい。じゃあ腕振るっちゃおうかな」

「お手伝いしますよ」

「私もー!」

「あら、空は料理できるの?」

「あーえつと…で、出来るよ?」

「ママがいたらでしょ。まだ1人でできないじゃない」

「むー!」

ちよんちよん。

「…お母さんお母さん」

「ん?どうしたの?」

「ママに内緒で少しだけ手伝って?1人で作ってみたい…」

「よし、ママをびっくりさせようね!」

「…2人でコソコソして何してんの?」

「ないしょー！」

私のお母さんは3人いる。

パパのお母さん。

いつまでも元気で小町お姉ちゃんみたいな人。

そしてね、私知ってるんだー。

お母さんとお父さんの部屋には私のアイドル写真があるの！

ふっふーん。どや。

あんまり2人とはそういう話しないけど、小町お姉ちゃんが教えてくれたんだ。

嬉しいな。

もう1人はママのお母さん。

私が背が低いのはこっちの遺伝のせいなのだ…。

まあ私はママが大好きだから嫌になっただけは無いです。

ちなみに双葉の家には玄関から色んな部屋まで私とママの写真でいっぱい。

あそこまであるとちよつと恥ずかしいけど…。でも嬉しい。

そしてママ！

大好き！

可愛い！

超可愛い！

見た目もだけど、そうじゃなくて。

パパといえる時とか超可愛いの！

ぎゅーってしたくなる感じ！

してるけどね！どやあ！

みんな優しいの。

だから私もみんなに伝えるんだ。

私が貰ってる愛情みたいなやつ！

アイドルってね、そういうの伝えられるんだ。

私が貰ってるものをちゃんと表現できるようにするんだ。

だから今はいっぱい貰うの。

いつかいっぱいお返しするために。

だから私は2人に抱きつく。

ぎゅーって。

んー…。

今度は双葉の家に行きたいな。

「あら、空寝ちやつたの？」

こつちに来てからはしやぎ倒してた空はソファの上で静かになっていた。
「ずっと騒いでましたからね。お義母さんが大好きなんですよ」

この子は八幡が大好きだ。

だから余計にその家族には甘え方が凄い。

普段はまるで昔の私を見てるようだけど、好きな人が居るとこの子は感情のままに甘え倒す。

学校では授業中寝てたり、あまり社交的じゃないらしく先生にちよつと心配されたくらいだ。

「嬉しいわね」

お義母さんはそう言いながら空に近寄っていき優しく頭を撫でる。

「この子は小さい頃の八幡に似てるの。あ、もちろんあの子はこんなに関係を見せてくれる子じゃなかったわよ？」

「あはは。そんな八幡も見てみたいですけどね」

きつと笑つちやう。大爆笑だ。

「中身がね、似てるの。八幡は酷く臆病な子だったけど、寂しがり屋な子でもあった」

私は八幡の昔話を思い出す。

何もしていないのに嫌われ、見た目がキモイと言われ。

私が思ったのは、八幡はそう言われながらも繋がりを求めてたってことだった。

嫌われいじめられ、それでも八幡は話しかけようとしたり、少しの事に期待してた。

私ならきつとそうしなかつたと思う。

だつてそんなことになつたら全部嫌いになつちやうから。

八幡は違つていて、寂しかつたのかどうなのは分からないけど、ぼつちだなんて言いながら求めたんだと思う。

「寂しかつたのかなあ。私もお父さんも仕事であまり家にいなかったし。小町のお兄ちゃんではないきやいけなかつたし、負担かけちゃつたんだよね」

申し訳なさそうに話すお義母さんは、昔を思い出しているのか遠い目をする。

「…寂しかつたのかもありませんね。八幡はああ見えて寂しがり屋なところもあるし」「ずつと抱えてた心配事があつてね。あの子の目の事が、申し訳ない気持ちでいっぱいだった」

口を挟んでは行けない気がして、私は黙ってしまっていた。

「私は好きなのよ？可愛げがあるし。我が子だからなのかなあ…。八幡が小学校でいじめられたつて聞いて理由聞いたら気持ち悪いからですつて。最悪だわ」

確かに最悪だ。

今聞いたら私はどうするのかな？

…その人の目の前で八幡にぎゅって抱きついてやる。

「そんなこともあったし家ではフォローしてただけど、段々八幡も斜に構えるようになっちゃって。悔しかったなあ、自分の子供が悲しそうにしてるのは」

私はどう思うのかな。

空が学校から帰ってきてそんなことになったら…。

怖いなあ。

「あの子がどんどん変わって行っちゃう気がして怖かった。でもね？高校の入学式の日
に気付かされたの。ああやっぱりこの子は誰よりも優しい子だって」

犬を助けた。

車に轢かれそうな犬を助けるなんて誰にできる？

走っている車の前に飛び込むなんて怖いし、助けたいって思っても咄嗟に動ける人が
どれだけいるんだろう。

「自分の子供だけどね、本当に誇らしかったの。そして思ったの。あんた達が気持ち悪
いって言う子は咄嗟に他者を助けることが出来る凄いい子なんだぞって。世界中に自慢
してやりたかったわ。凄く怖かったけどね」

自分の子が車に轢かれるんだもん。

怖いに決まってるよね。

「高校でも友達出来なくて、八幡大丈夫かなってまた怖くなったけど…そんな気持ちだが杏ちゃんのおかげで吹っ飛んだわ」

少し恥ずかしい。

「杏ちゃんに会って八幡はやつと自分の居場所が出来たのよね。家族が作ってくれる居場所もちろんいいけど、自分で家族をつくって出来る居場所は何よりも幸せな事」お義母さんは空を撫でていた手を止めこちらを向き、

「八幡を見つけてくれてありがとう」

わたしはないてしまった。

ぐずぐずと、なにがかなしいのかうれしいのかわかんないけど。

なみだがとまらなくて。

よくわからないいきもちにながされながらも

「ちっ、ちがう、ます…。あんずがつ、みつけたんじやない」

わたしはよくまわらないしたをいっしょうけんめいに

「はちまんが、あんずをつ！」
ふわつとあたまをなでるかんしよく。

「ありがとう、杏」

私はお母さんに抱きついた。

説明なんて出来なかった。

でも抱きついたお母さんはすごく暖かくて。
撫でられる頭から幸せが込み上げてきて。

そっか。

ここも私達の居場所なんだね。

御伽噺のような実話

2人がまだ結婚する前の話。

「にやー…。つかれたあ…」

ジャージをきた少女がだらんとした格好で横になる。

「お疲れ様。今度のライブも問題なさそうだな」

俺はレッスンの光景を思い出しながらそう答える。

「ひぎー…八幡、ひぎまくらー」

…まあ今なら誰もいないいいか。

「普段は駄目だぞ。今は誰もいないからいいけど会社じゃこういうのは駄目なんだからな」

「ぶつくさ言いながらも膝枕してくれるはちまんさいこー」

べ、べつにしたいくしてるんじゃないんだからね！

「んー！」

なんだと思つて杏を見るとどうやら頭を撫でろと言ふことらしい。
可愛い。

「むふふ」

撫でてやると猫のようにゴロゴロとし始める。

なんだこいつ地球上で一番可愛いだろ。

「今度はソロのライブだ。きりりないんだから気を抜きすぎてミスするなよ」

「誰に言つてんのさー。ライブは本気でやるのが杏のほりしーだよ」

ほりしーね。

「初耳だな」

「んー?…だつて杏は太陽だからね。月が舞台を作つて沈んだら太陽が輝く番でしょ

?」

ぐつ!杏めデビューの頃の話覚えてやがる。

忘れろと言つたのに!

「…白夜になつたらどうするよ」

「…そうなつたら太陽もやる気なくしてどっか行くんじゃない?」

厳密には月はどっかいつてるわけじゃないけどな。

意地悪な質問だったか。

暗い顔させちゃったな。

「あー…：そういえばライブ前に休みをとってる。だからな、その」

「ん？なーにー、八幡」

杏のにやにやしてる顔を見るに俺の気持ちを察しているようで、悔しいやら嬉しいやら。

「デートに行こう」

「ふーん、いつになく直球じゃん。良いね、行きたい！」

そう言つて首に腕を回してくる杏は、やつぱり天使だ。

「どこいくのー？」

久しぶりのデートだ。どこ行こう。

相変わらず杏の私物に埋め尽くされそうな車の中でどうしようと考えていたら

「ノープラン？さすが八幡だね」

「うっせ。そもそもあんまり行きたいとことかないし、なんならお家デートでいいまである」

むしろ最高だ。

そうだったらこんなメガネにマスクとか怪しいカッコしなくて済むし。

「んーまあ杏もそれでもいいけど…」

そんなことを言う。

そんな寂しそうな顔するなよ…。

「そういやみりあ達から、デパートに新しく出来たぬいぐるみ専門店の話聞いたんだよ。杏が好きなのあるかと思ってたんだが…」

「へーそうなんだ。いいじゃん、いこっか」

しつかりと嬉しそうな顔しやがって。

ふとミラーに映る自分の顔を見てげんなりとする。

俺もかよ…。

「これ可愛い！はちまーん、見て！」

やっぱ好きな物の前だとテンション上がるのな。

久しぶりに見る好きな人の笑顔に自分も嬉しくなる。

この顔が見たかったんだよな。

「買うのはいいいけど車におけるサイズと量にしてくれよ」

「どーしよっかなあ。んー今日はこの子だけにしよっか。良いよね？」

「熊？珍しいな、熊は選んだことない気がするんだが」

確かいなかったはず。車にも俺の部屋にも。

結構な数あるのに一体もいかなかったのはあまり好きじゃないからじゃないのか？
「好きってわけじゃないけど、見てよ」

言われて見てみる。

所謂デフォルメされているぬいぐるみでその顔には覇気が感じられない。

その顔はなんだか見ていてムカつく。

とぼけた顔をしているだけなんだが、なんか煽られてる気がして…なんだこいつ。

「なんかムカつく」

「なにそれ。もーわかんない?」

「わからん」

「自分じゃわかんないかな?この子八幡に似てない?」

…ええ?

「いや似てないでしょ…」

「えーわかんないかなー?目の辺りなんかそっくりじゃん」

そう…か?いやそれでムカつくのか?

「可愛いでしょ?」

お前がな。口には出さないけど。

「お昼だねー。なに食べる？」

「サイゼが恋しい…」

「探せばあるかもしれないけど…めんどいよ」

「まあな。しょうがないからそこら辺の店でいいだろ」

「どんだけサイゼ行きたいのさ…」

俺はハンバーグドリアを頼んだ。

「結局オムライスにしたのか。美味しそうだな」

「八幡はドリアばっかりだね。サイゼ以外でもそれだもん」

「1番はサイゼだがな。」

千葉県民のソウルフードだし。

「ねーちよつとちようだい？」

仕方ないな。

このままあげても熱いし少し冷ましてあげる。

「ほら」

向かいに席に座る杏にスプーンを差し出す。

「んむ。んー美味しい」

一通りの動作を終えて、そこで気付く。

なに俺はリア充みたいなことやってんだ…。

爆発しろっ…！

「ねーねー、今度オムライスつくって。八幡がつくったの食べたいな」

「ん。いいぞ」

そこでふと思いつく。

「杏も作ってくれよ。俺も杏が作ってくれたの食べたいし」

そういえば俺は杏の料理を食べたことがない。

そもそも料理できるのか？

「うえっ！料理…料理かぁ…面倒だぁ」

「お前なあ…」

「面倒、だけどもあやってみようかなあ…」

ちよつと気恥しそうに言う杏は、見ていて嬉しいもんだな。

「八幡、最初はちゃんと教えてよ？」

「おう。まかせろ」

「今度のはソロでの大きいライブだ」

日も暮れて暗くなってきた頃、車で送るついでに話をする。

「ソロでのライブがどれくらい凄くてどれくらいどれだけ怖いものか想像するしか出来ないが…」

「間違ってるよ八幡」

「え」

どうにも俺には難しいらしく、やっぱり分かりきれていないらしい。

プロデューサーとして成功しているのかもしれない。

何人かのアイドルをプロデュースして少しはそう思っても、全てを理解するなんて難しい。

いや、出来ないって言ってもいいかもしれない。

「怖い？そんなわけないじゃん」

間違えてるのはそこらしい。

怖いだろ？

自分の前には何万人の人がいて、自分に会いにわざわざ来ているんだ。

そんな期待とかそういうのは怖いに決まってる。

「八幡と杏じゃ感覚違うのかも」

そうやって笑う杏に首を傾げる。

「杏にとつては八幡が作ってくれた舞台だよ。怖いなんて思うわけないじゃん」

…?よくわからん。

「わかんねえ」

「その舞台は杏専用なの。王子様が開く舞踏会じゃない。そこは杏の為だけに用意された場所」

まあそのために整えてるからな。

俺や会社がそういう風につくった舞台だ。

「そこには杏にとつて怖いものなんてないよ。用意してくれたのは1番信用してる人なんだから」

…そこまで言われると照れるけどな。

「だから大丈夫。太陽は輝くよ」

笑顔を見せる杏。

「最初から心配はしてねえよ」

心配なんてする訳ない。

杏のことは俺が1番よく知ってるんだ。

杏が舞台にたった時の輝きは知ってるんだ。

それが見たくて舞台を整えたんだ。

だから後はその手を引いて城の階段をエスコートするだけだ。

「また見せてくれよ」

何をとか言わない。

恥ずかしいからな。

「もちろんだよ。杏は空の上で月と並ぶために輝くんだから」

比企谷八幡は魔法使いになった

俺は酷く焦っていた。

「こちらが今回紹介するアイドルの資料です」

目の前にいるスーツの役員に資料を見せる。

そこには担当である双葉杏の資料が書かれていた。

「ま、まずお話ししなければいけないのは、彼女がEランクのアイドルであるということですよ」

その資料を見た時に眉をしかめたのを見て、まずいと思った。

「ですがひと目見れば彼女の凄さに気づくでしょう。彼女は今のアイドルにはない特別なものを持っています。それは在り来りなものじゃありません。新しいものが世間を熱狂させると思うのです。彼女は」

俺は怖くなり一気にまくし立てる。

彼女の魅力を伝えればいいんだ。

「あのねえ」

「ーええ？」

俺の言葉を遮ったのは酷くどうでもいいような目をした大人だった。

「君の気持ちはわかる。プロデューサーとしてアイドルを売り込まないといけない。それが君の仕事だからねえ」

腕を組み、椅子にもたれ掛かるこいつはなんの勘違いをしているのかそんなことを言い始めた。

「ち、違います。そういう事じゃなくて俺は彼女のアイドルとしての力を！」

「ああ、うん。わかるよ。でもね？君が言った今までのアイドルって言うのは実績を残しているんだよ。かもしれない、行けるはずだ、そんな曖昧な言葉ではなく」

ああ、わかる。言ってることはわかる。

でもそうじゃないだろ？

なんでわからないんだ。

「そうだね、例えば竜宮小町が出れば数字が取れる。これは確定事項なんだよ。君のいう双葉杏と違ってね」

くそこいつ嫌いだわ。

「…竜宮だつて最初があつたはずですよ。それでもあそこまで売れた。今は先行投資が必要なのです。先を見る目がないと売れるものも売れないと思いませんか？」

「…君はどうにもプロデューサーに向いてないと思うね。そんな様子じゃ売れるものも

売れないだろう。自覚をするべきだ、君のアイドルの為にもね」

彼は席を立つ。

「ま、待つてください！まだ話はー」

「終わりだよ。私が席を立ったんだ。話は終わりだ」

そして彼が部屋から出ていき

扉が閉じた。

「うるせえ、向いてないことくらいわかってんだよ…」

俺はマツ缶を飲みながらいじけていた。

なんでこんなに伝わらないんだ。

見てから決めろよくそが。

だいたい見てないものを駄目だなんて決めつけるのはあまりにも幼稚だろ。

竜宮が数字持つてんのなんて知ってんだよ。なんで数字を持つてるかが大事なんだろうがよ。

そこまで考えないからその程度なんだよ。

…頭を冷やす。

駄目だ。こんな調子じゃ売れない。

それでいいのか？良くないだろ。

俺は双葉の良さを知ってる。

双葉の凄さを知ってる。

あいつを見た時足が竦んだんだ。

まるで絶対に勝てないものに出会ったように。

それは俺だけの物に出来る事じゃない。

皆に見てもらおうのが一番いいんだ。

違うか？

∴自慢したいだけかもしれない。

双葉杏を。

まるで子供が自分の宝物を自慢したいみたいに。

∴俺は子供か。

まだ子供なのかもな。

それじゃ駄目だろうな。

俺だけじゃ駄目だ。

俺にはなんの力もない。

あの野郎に言われた通り向いてないしな。

自分がそう言われるのはいい。でも、なんでこんなにムカつくかって、

双葉杏がアイドルとして未熟だと言われたからだ。

思い出したらまたムカついてきた。

俺一人じゃ出来ない。

なら、先輩に甘えてしまおう。

今はまだ出来ないけど、いつか必ず俺だけでも魅力を伝えられるように。

あいつマジで覚えてろよ。いつか必ず後悔させてやる。

「武内先輩」

「…比企谷君、珍しいですね。なにか御用ですか？」

「コネを貸してください」

「…は？」

「コネを貸してください」

「私にそのようなものはありませんが…」

「番組のプロデューサーを紹介してください。出来れば346が良くお世話になってる

人です」

「…いるにはいますが、コネと言うには弱いです。彼はその、ちよつと変わっている人

で。ですがプロデューサーという観点から見れば優秀だと思っています」

「紹介してください！お願いします！」

「わかりました。ですがコネは通用しないと思ってください」

「はい」

「本日は無理を聞いていただきありがとうございます」

指定された場所は料亭だった。

いかにも高そうな場所で、お代官様とかが使つていそうだ。

「気にしないでいいよ。僕は346さんの無理は聞くようにしてるんだ。面白いからね」

目の前にいるのは敏腕プロデューサー。いくつかの番組を持つ業界では有名な人らしい。

「ありがとうございます。こちらが紹介したいアイドルの資料です」

「うん、見させてもらおうよ」

彼は資料を見ていく。

今回は落ち着いていこう前回の反省を活かしてもっと慎重に。

伝えるべき事をちゃんと伝える。

落ち着くんだ。

「それで？」

「はい、えっと」

「聞き方が悪いね。こんなアイドルを売り込んでどうしたいんだい？ 僕的には何も引つかからないけど」

…落ち着け。落ち着けよ比企谷八幡。

ここで激情したら前と一緒にだ。

「双葉杏の魅力は書面では伝わりません。まずは彼女のステージを見ていただいて、そのあと—」

「ステージ？どこで見られるんだい？」

こいつ、わかって煽って来てる。

「…今はまだ。ですが私はそのステージを用意して頂きたいと思つてます。どんなものでも構いません。彼女が日の目に当たればすぐにみんなが理解出来るはずなんです」

聞くと腕を組み、うーんと考える。

押し足りない。

まだここじゃ終わったら駄目だ。

「私は双葉杏を見た時に足が竦んでしまいました。彼女には普通じゃない何かがある。」

そしてそれはステージに立つべきものなんです」

そこでふうつとため息が聞こえた。

またこの反応か……!

「聞いてた話と違うね。ちよつと残念だよ」

「はい?」

武内さんか?

「前に聞いたんだよ。双葉杏っていうアイドルを売り込んできたプロデューサーの話。彼とは付き合いがあつてね。まあ僕は嫌いだけど」

あいつか。

業界は狭いらしいしこういう事もあるのか。

「…少し反省しまして。アイドルを売るために気持ちを切り替えました」

「つまらない」

「は?」

「今日は面白そうだから来たんだ。彼の言うような男の話なら聞いてみたいと思つてね」

だからなんなんだ。俺の答えは不正解だったのか?

よく分からない言葉で濁さないでくれ!

「君は自分がアイドルと向かい合った時に売れると思ったんだろう？ 足が竦んでそう思ったんだろう？」

そうだ。

でもその気持ちだけじゃ売れないことも理解した。だからこうやって

「僕はそいつと違う。もちろんそういう売り方だったら売れる可能性もあるだろう。例えばあいつだったたらもつと話は聞いてくれたかもね」

「…そうです。だから色々考えて」

「相手によって売り方を変えるんだよ。人それぞれ伝え方が違うなんて仕事じゃなくても人間なら当たり前の話だと思うよ」

うるせえ、ぼっちだからわかんねえよ！

「じゃあ改めて聞こう。君の気持ちを。君が感じているそのままを言ってくれていい。むしろそれが聞きたい」

…言ってやるよ。

気持ち悪いと言われようが、やってやるよ。

「…双葉杏は今までのアイドルとは違う。彼女はまさに舞踏会に立つべき女の子だ。誰もがその存在に光を見る。同年代の女の子はその存在に憧れ、男は神聖な何かを見る。その姿は本物の偶像だ。誰もが心酔できる。普段の姿は等身大で、舞踏会に立てばシン

デレラ。その姿こそが人の心に突き刺さるんだ」

「なるほど。ところでもし今出演を決めるとなるとゴールデンの歌番組、ああもちろん知ってるよね？そこしかないけど……どうする？」

「是非。最高の舞台だ」

「ははははは！良いよ、決定だ。覚悟を決めなよ？そこはアイドルにとつても君にとつても戦場なんだから」

「……最悪うちの会社が責任を取りますよ」

「その時は君も、だけどねえ？」

決まった。

よし！

明日双葉に教えてやろう！

これでやっと、プロデューサーとして歩ける気がする。

まだ30歳でもないけど魔法を使えるようになった。

シンデレラのために。

されどパパは上司と踊る

「ねえ、最近目の濁りが良くなってきた気がするんだけど」

「は？嘘だろ？」

「んーちよつとね。少なくとも出会った時よりは濁ってないよ」

「おお…！ついにゾンビと言われなくなるのか…！」

「今も言われてないけどねー。どっちかと言うと…これは言わない方がいつか」

「そんなやばい呼び方されてんの？担当の子も呼んでたら明日から仕事したくないんだけど…」

「悪い呼び方じゃないよ。ただ、えっと、呼び始めたのが美城さんだから…」

「…ゾンビより酷くないことを祈る」

「空が生まれてから良くなってきたかもね」

「自分じゃわからんからな。良くなったって気づかなかったし」

「うーん、まあ杏はいつも見てるからね！小さな変化も気づいてあげるよー！」

「…嬉しいけど、それって本当は男がいつも言わないといけないんじゃないのか」
「そうだよー？だから杏のことちゃんと見ててね！」

「…おう。ずっと、だな」

「比企谷。私が呼び出した理由、わかっているな？」

俺は呼び出された。こうやって上役に呼び出されると学生時代に平塚先生に呼び出されたことを思い出す。

あの人元気にやってるかな。

今度ラーメンでも誘ってみよう。

「…はあ。いえ、突然呼び出されたので特に心当たりがありません。俺常務に怒られるような事しましたっけ？」

「君は良くやってる。相変わらず気に入らないこともあるが」
「なんかすみません」

俺はこの人に認められたわけではないのかもな。ただ損にはならないから気にされないような。

人の評価なんてよく分からんけどな。特にこの業界では。

「いやいい。実績があればある程度は目を瞑る。そんなことより比企谷」

「はい、何でしょうか」

「息子が生まれて3年になるな」

呼び出してまで子供の話か…。

もはや悪癖じゃね？

「…えつと、そうですね。空から3年後でしたから少しは落ち着いて育てられていると思っっています」

「もう3歳だ」

「はあ。いえこの前の誕生日はありがとうございました。あんな高いもの貰っちゃちよつと気遅れますけど…」

グランドピアノで。わざわざ家の広さを確認して置いても邪魔にならない大きさを発注してるあたり用意周到さを感じる。

家もそこそこのいい家とは言ってもさすがにあれにはびっくりした…。

「いい。必要だと感じたから送っただけだ。彼の才能を伸ばす手伝いになるだろう」

「才能ですか？あれば嬉しいですけどね。まあ自由にやりたい事やってくれれば良いじゃないですかね」

そもそも杏には才能があっても俺には何も無いからな。

それでプレッシャーになったらグレルでしよ。

「…君は何も気づかないのか？」

「…？何がでしょう」

「あの子の才能にだ。いいか？磨けば光る原石だ。いやそんな言葉も生ぬるい」

「あ、あの常務？」

「この人子供が好きなのか、才能があるものが好きなのか、うちの子を見てちよくちよくおかしくなる。」

「この前は真顔で空にお姉様と呼ぶように、とか言ってた。」

「磨けば光る、いやもう既に輝いている。君が双葉杏を見た時に足が竦んだと言ったように、私も同じ気持ちを感じた」

「いや、ちよつと待て、なんで知ってるんですか…！」

「それを知ってるのはごく一部…！黒歴史が勝手に1人歩きしている!？」

「男のアイドルは我が社ではあまり経験がない。これはいい機会と言えるだろう」
「誰ですか？どうせあのプロデューサーが喋ったんでしょ!？」

「あんのタヌキオヤジめ…！」

「聞け。今のうちから才能を伸ばすんだ。君ならプロデューサー出来るはずだ」

「はあ。何度が暴走しているとはいえ、前しか見れない人だ。」

「誰しも前向きに歩ける訳じゃないってのに。」

「嫌ですよ……」

「なぜだ？」

「そんな教育してたら生きづらいですよ。俺はあの子を自由に育てます。将来なんて自分で決めれば良いんですよ。なんなら専業主夫になりたいなんて言っても応援しますよ」

むしろ褒めてやる。よく言っただけな。

俺にはできなかつたが、だからこそ息子がやってくれたら面白いだろ。

「……」

「あの子が常務と会った時に笑ってくれなかつたらどうします？いつも無愛想に抱いてくれる常務にさえ笑顔見せる子ですよ？そんな子が笑ってくれなかつたら嫌でしょ？」

本当にこの人笑わないからな。なんでうちの子たちが喜んで抱かれているか謎なんだが。

「……今思えばあの子なら育てるまでもなく開花させるだろう。私は不合理な事をするところだったな。悪かった」

「いえ、悪くはないですよ。あの子達も346の大勢に囲まれて嬉しそうですよ」

まあうちのアイドルが時々遊びに来たりしてるけど、皆女の子だし綺麗どころだし子供は大喜びだ。

空はもうアイドルごっこと言って本業のアイドルたちと遊んでるし。

いやまあ、あれを遊びと言えれば、だが。

割とガチな指導を優しく言ってるだけなんだよなー…。

「ところで、空がこの前私にママのようになりたいと言ってきた。今からプロデュースの準備をしておけ」

「あんた何か変なこと教えてないだろうな？空はまだ6歳だぞ!」

思わず敬語を忘れる。

子役とかもあるが嫌だぞ俺は。

まだ大人の世界に入れたくないし。

「上司に向かってその口の聞き方はなんだ。あの子達の親でなければ首にしているところだぞ?」ふ、2人に感謝しなさい」

「…自分の子供持てば良いじゃないですか」

ぼそつと言ってやる。でもなあこの人自分の子供を世話してるとこ想像できないんだよな…。

今の距離感がちょうど良いんだろうな。多分。

「私の目に止まる男が居なかったのな。それに必要性も感じない」

聞こえてしまったらしく、顔はいつもの真顔だが怒っているのはわかった。

少しは見分けられるようになったな。

嬉しい成長なのかなんなのか。

とりあえず俺はやるべき事をしないと。

「すみませんでした！」

「あー…疲れた…」

「どしたのー？今日は一段と疲れてるね」

「常務がな…拗らせてんだろあの人…」

「八幡」

「ん？」

「ぎゅー」

「おっと」

「よしよし」

「はあ…落ち着くな」

「じゃあ交代ね」

「おう、ぎゅー」

「はふう…」

「よしよし」

「えへー」

「ありがと、杏」

「んーんーいーよー。杏もしたかったし」

「よし、空達にあつてくる」

「うん、さつき寝たばかりだから気をつけてね」

「ん」

「はー、それで常務のことなんだけど」

「無茶ぶりでもされたの？」

「んや、空をプロデュースしようとしてた」

「あーまあ空もアイドルの姿よく見てるから、アイドルになりたいとは言つてたけどね」

「本人がやりたいなら良いけど、まだ早いよなあ…」

「もうちよつと先が良いかな。杏もまだ家族の時間欲しいし」

「…そうだよな。時間欲しいよな」

「休み取れそう？」

「子供が寂しがってるから休みくださいっていえばよっぽど外せない限り取れるから大

丈夫でしょ。そのための調整はしてるからな」

「良かった。ねーはちまん？」

「どした？」

「これからもやしなってるね？」

「…俺の負けだもんな。しょうがない」

灰被りは魔法使いを見つけ、魔法使いはシンデレラを見つけた

「パパー、すきー」

「はいはい。宿題はやったか？」

「やったよー。だからパパの膝に休みにきたの」

「しょうがないな」

「んふー。おーちーつーくー」

「おちるなよ」

「ふあーい」

「八幡、ちよつといい？」

「ん、空悪いけど…」

「…」

「おーい、空？」

「ママのところ行っちゃうの…？」

「うぐ…ちよつと離れるだけだ…」

「そらー、八幡の邪魔しないの」

「うー！ママばつかずるいよ！せっかくパパと休みなのにー！」

「ママだつて八幡と一緒にいたい。独り占めはだーめ」

「ずるいもん…」

「あーはいはい。2人とも仲良くな。杏も後でいいか？」

「はあ…もう仕方ないな…八幡は」

「やったー！じゃあパパのひざー」

「…杏はどこに座ればいいのさー」

「横じゃ駄目か？」

「むー、しようがない我慢してやるかあ…」

「へへ、勝ったー」

「今度はママが膝だからね」

愛しい家族。

娘も可愛いしまだ幼稚園に通いだしたばかりの息子も可愛い。

今はもう寝ちゃつてるけど。

私と空の間で暗黙のルールがある。

八幡が仕事の日は帰ってきててもあまり甘えすぎないようにしようって事。

まあそんなこと決めてても八幡は空を可愛がるし、私の事も甘やかしてくれるけど。自分たちから言い出して八幡を困らせないようにして事だね。

八幡は身内には甘々だから私達から甘えようと際限なくなっちゃうし。

だからこそ休みの日の夜は至福の時間だ。

昼は家族みんなで遊びに行ったり家でゴロゴロしたりして、夜は静かにそばに居る。皆この時間が好きだもんね。

八幡が膝に座った空の頭を撫でてる。いいなあ。

私も大人になったとは言えその場所が好き。

幸いにも身体が大きくならなかつたから私もまだそこに収まるんだからね。

好きな人後ろから包まれる感触は幸福そのものだ。

もちろん八幡も好きみたい。

2人きりの時は時々そういうふうなこととしてあげてる。

膝の上には乗せてあげられなかつたけどね。

ソファで家族3人他愛もない会話をする。

小学校でこんな事があつたとか、担当のアイドルがテレビ出演するとか色々。

私は2人の顔を見る。

皆笑顔だ。

こんな家族をつくれて幸せだと思う。

八幡に出会えて良かった。

「杏? なんかに凄い嬉しそうだな」

ふと私を見た八幡が言う。

「ふふ、八幡だつて嬉しそうな顔してるじゃん。それとそらー? そろそろ代わりなさい」

「うー…わかったー。でもパパは空のだからねー」

ムスツとした顔でそんな事を言う。

全くフアザコンが酷くない?

この子大きくなって彼氏とかちやんとつくれるかな…?

まあ八幡よりいい男なんていないけどね!

「ふっふーん、八幡はママのだよ。残念だったね、空」

「ずるい! もう、ママ嫌い!」

「空、ママの引退ライブ限定の写真あるけどみるか?」

「え!?! みる! 見せてー」

思わず笑い出す。

空は私のライブが大好きで八幡も好きだけど私の事も大好きだ。

だから八幡を取り合う時は喧嘩するみたいになるけど、すぐに八幡が餌を出す。

純粋な空は私を嫌いと言いながら私の写真やライブ映像で笑顔になる。

わかりやすくいい子。

八幡に似て口が達者なこともあるけどそれ以上に人の感情にまっすぐだ。

好きだったら好きって言うし嫌いだったら嫌いっていう。

あと私にも似てる。

基本自分から動こうとしないし、もし動くとしたら自分がしたい事としなきゃ行けないことだけだ。

変なところ似ちやったのかなー？

「ねえねえ、どんなの？ライブ中のやつ？」

「聞いて驚け、パパの携帯にしかない超レアなオフショットだ」

「うーわー！なんで教えてくれなかったの？はやくみーせーてー」
皆で笑顔になる。

楽しいなあ。

幸せだ。

私は八幡との出会いを思い出す。

お互いにやしなつて！だなんて言い合つて。

結局八幡が私に負けて八幡が養うことになった。

いつかからかつてやろうと思つて言つたことがある。

夢が叶わなくて残念だね？つて。

そしたら八幡は

夢なら新しいのが出来た。教えてやらないけどな。

笑いながらそんな事を言つた。

教えてはくれなかつたけどその笑顔でどんなものは察しがついた。

だから余計に幸せになつて思いつきり抱きついてやつた。

昔八幡が言つてた青春とは嘘であるつて言葉。

私はそうは思わない。

だつて私の青春は嘘じゃなかつたから。

八幡だつて今ならそう言つてくれるよね？

だから八幡の真似をしてこう言おう。

私の青春ラブコメは間違つていない。